

43030

教科書文庫

4
220
42-1929
20000 81259

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

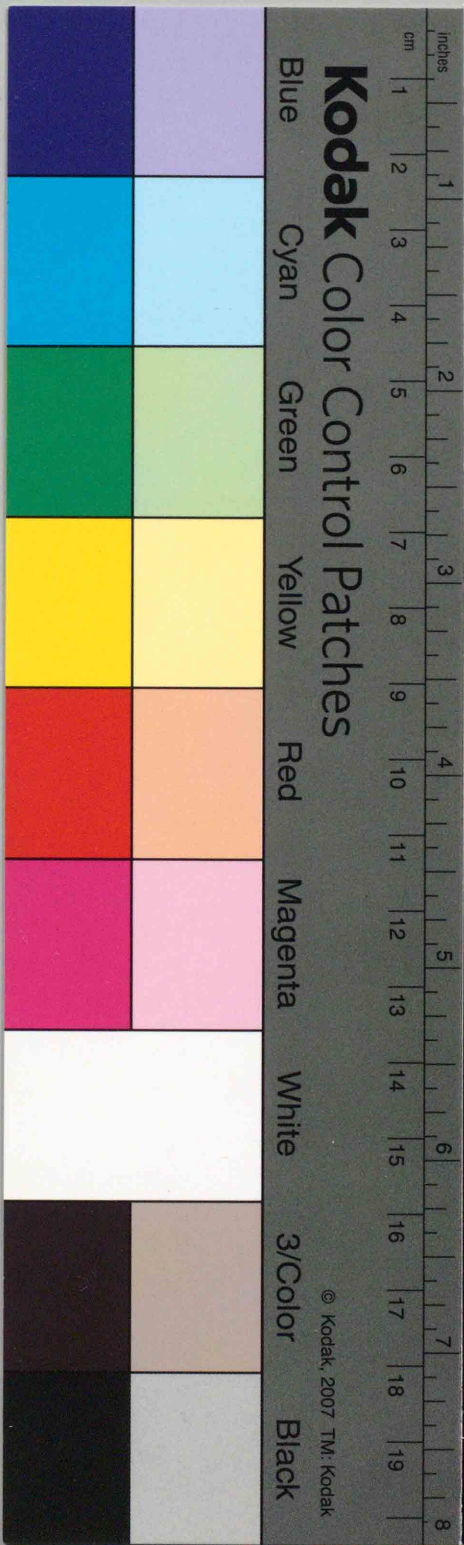


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4b
220
昭4

女子用
新編東洋史

峯岸米造編

東京
光風館藏版

教
4
20



資料室

教科書文庫

4

220

42-1929

2000081259



文部省檢定濟

昭和四年一月廿九日 高等女學校歷史教科用

東京高等師範學校教授

峯岸米造編

女子用
新編東洋史

広島大学図書

2000081259



東京

光風館藏版

46
220
ABx



はしがき

東洋史は、われわれ日本國民にとつて、最も深い關係を有つてゐる支那印度、その他の東洋諸國の成立や變遷をのべ、同時に、われわれ祖先の血となり肉となつて、その精神を養つた支那印度の文化の由來を知らしめる大切な教科である。然るに、中等程度の諸學校に於て、これを教授するに當り、生徒をしてその學習に甚しく困難を感じしめ、ひいて本科の課業を厭はしむるが如き傾向のあるのは、いかにも遺憾な事といはねばならぬ。

おもふに、東洋史學習の困難なるは、一には東洋史そのものの性質にも由ることであらうけれども、一にはその教科書の罪も、また甚だ大ならざるを得ない。蓋し、從來の東洋史教科書は、あまりに學究的専門的である。普通教育上、さまで必要もない支那史上の史的名辭をそのままに記載したり、或はまた東西交渉の跡を知らせようとして、専門學者も、なほ難しとす

る西域諸國その他の關係事項を過度に重んじたりするのは、その例である。また従來の東洋史教科書は、記述があまりに抽象的で簡略である。血も肉もない骨ばかりのものである。したがって、生徒の生きた魂を刺戟し、これらの情意を動かすには、甚だ力の弱いものである。これは、教科書として、まことに不満を感じざるを得ない點で、何としても、速かに改良を加へ、もつともつと、人間味の豊かな、面白いわかりのよいものとし、以て歴史の知識を與ふると共に、人間陶冶の大切な資料となるやうにせねばならぬことと信ずる。

編者は、右様のかんがへで、この新編東洋史の述作に當つたのであるが、今、特に注意した二三の點を左に掲げると、

- 一 正確なる史實に據り、それを骨組として、幾多の偉人傑士・女性等に關する史話を以て肉づけた。
- 二 單に史實を列記するにとどめず、或は説明を附し、或は批判を加へて、一貫せる教訓を與へることを力めた。

三 學習上の困難を減少するために、行文を簡潔・平明なる口語體にし、且、多く振假名を附した。

四 支那本土以外の固有名詞は、多くは片假名を用ひて、これを記し、學習上の困難を少くすることを期した。

五 多く繪畫・地圖等を挿入して、その想像・理解を助け、且、各篇末に概括を附して、大勢のおもむく所を示した。

ことなどである。どうか、大方諸賢の清鑑を得て、十分の御指教を仰ぎたいものと願つてゐる次第である。

昭和三年五月

編者

例言

一 紀年は、すべて皇紀を用ひ、その左側に西紀を横書した。而して、紀元前なるは、一一、前何年と記し、紀元後なるは、すべて略して、その數字のみを記した。

一 既得の知識の復習整理に充て、かねて時代と史實との關係を明かならしめんとために、各篇末に概括及び年表を載せた。

一 系圖は、特に重要なものを選び、必要に應じて、これを分載した。その輪廓外に記してある數字は、その王朝の始終の年を示すものである。

女子用 新編東洋史

目次

第一篇 上古

第一章 上代の支那 夏・殷・周の三代 自一至一頁

第二章 春秋・戰國 七

第三章 孔子 一三

第四章 秦の統一 一七

第五章 漢の統一 二二

第六章 武帝の功業 朝鮮の興亡 二六

第七章 東漢 西域との交通 三〇

第八章 上代の印度 佛教の東流……………三五

第九章 三國……………四〇

概括……………四〇

年表 (一)

第二篇 中古……………(自一〇四至一〇六)

第一章 晉 南北朝 隋の統一……………一〇四

第二章 唐の興亡……………一〇五

第三章 唐の制度・文物 宗教……………一〇六

第四章 五代 宋及び遼……………一〇七

第五章 南宋及び金 宋の文化……………一〇八

概括……………一〇八

年表 (二)

第三篇 近古……………(自一〇四至一〇六)

第一章 蒙古の勃興……………一〇三

第二章 世祖の業 東西の交通……………一〇六

第三章 元の衰亡 明の統一 チムール……………一〇九

第四章 明の衰運 朝鮮の建國 滿洲の興起……………一一〇

第五章 モゴル帝國 ポルトガル・オランダ等の東洋經略……………一一五

概括……………一二四

年表 (三)

第四篇 近世……………(自一二五至一二七)

第一章 清の統一……………一二五

第二章 聖祖 高宗 清露の交渉……………一二七

第三章 鴉片の役……………一二三

第四 長髮賊 英佛軍の侵入……………二六

第五 ロシヤの滿洲及び中央アジア經略……………二三

第六 フランスの印度支那經略 清佛戰爭……………二五

第七 清國と歐米列強との關係 清の滅亡 支那共和國の建設……………二九

第八 共和國建設後の支那 日支交渉 東洋の現勢と我が國の地位……………二四

概括……………二五

年表 (四)

女子用 新編東洋史 目次終

女子用 新編東洋史

峯岸米造編

第一篇 上古

第一章 上代の支那 夏殷周の三代

世界最古國の一

漢族と苗族

支那の起り 支那は、世界の最も古い國の一つで、その基は、今よりおよそ五千年ほど前に、西北方から黄河の流域にうつつて來た漢族によつて、ひらかれたのである。はじめ、漢族は、苗といふ先住の土人と争ひ、或はこれを征服し、或はこれを南方におひやつ



貴州省に於ける苗族

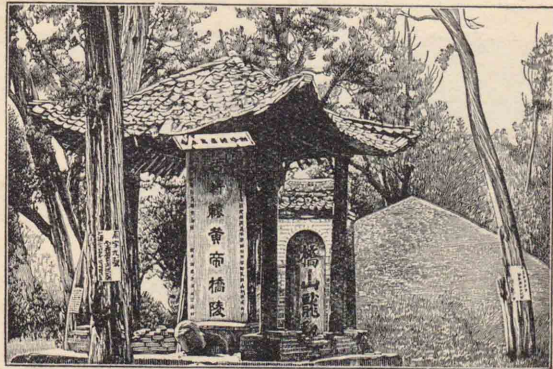
● 黃帝の一統

て、北支那の平原を占め、そこに多くの部落をなしてゐた。傳へによれば、黃帝といふ一人の英雄が、はやく漢族中にあらはれて、それらの諸部落、その他をしたがへ、はじめ、まとまつた一つの國をたてたといふことである。そのころ、漢族は、既に田を耕し、機を織り、市場を設けて、いろいろの貨物を交易し、また文字や曆や算法なども、發明使用してゐたと傳へてゐる。

當時の開化

◆ 漢族と苗族 今の漢族は、顔面が比較的長く、額骨高く、髪黒く、ひげ少く、皮膚は、おほかた黄色を帯びてゐる。近世以前に於ける東洋史の大部分は、ほとんど全くこの種族を中心としたものである。また苗族は、印度支那種で、今なほ支那の南部にゐる。身の長ひくく、皮膚は、黄色を帯び、ひげは少く、多くは居を山間の沃地に定め、牛を使役して、農業に従事し、草ぶきの小屋に住み、婦人は、刺繡をほどこしたゆるやかな衣服を身にまとひ、跣足である。

陝西省開縣にある。橋山の上にあるので、橋陵といつてゐる。



陵の帝黃

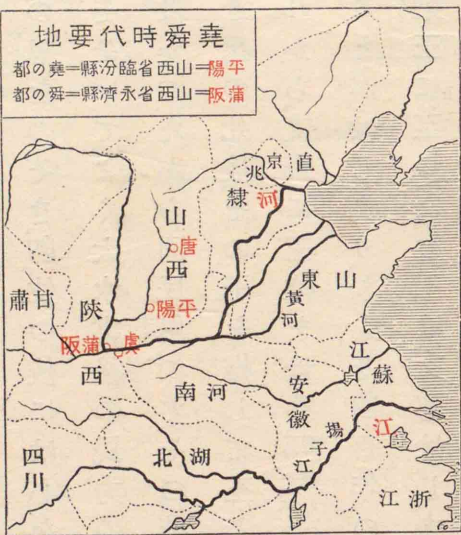
● 堯舜の治

君主の模範

○ 堯舜の世

黃帝の後、堯舜といふ二人のすぐれた天子が、相ついで出た。それは、今からおよそ四千數百年のむかしである。堯舜は、よく天下を治めて、ますます漢族の勢力をたかめ、且、一層、その文明をすすめて、國本をかたくしたから、後世、ながく君主の模範として、あがめてゐる。

◆ 舜の孝悌 舜は、もと身分のいやしい人であつた。幼き時、母をうしなひ、かたくなな父と、よこしまな繼母とにつかへて、孝をつくし、わがままな異母弟に對してさへ、よくこれをいつくしんだ。その上、舜は、また人にすぐれて、熱心に家業をはげんだので、德望が、日に日に高まり、その評判が、堯



堯の即位 前二六〇年頃
舜の即位 前二〇〇年頃

國號の始め

禹の治水と善政

王位世襲



廟王禹門龍省西山 (るあでのもなうやの社神がわは廟)

の耳にまではいつた。堯は、これに感じて、その女を舜にめあはせ、挙げ用ひて、政を攝らせ、遂にこれに位をゆづつた。

夏の世

舜の後、禹がそのゆづりをうけて、天子となり、はじめて國號をたてて、夏と稱した。禹は、堯舜と肩をならべるほどの賢君で、かつては黄河の大洪水を治めて、萬民の患をのぞき、即位の後には、心を民政にそそいで、よく大水害後の民力の休養をはかつたから、國民舉つて、その徳になつき、禹の死後、その子を推して王とした。これから、支那に王位を世襲(二世子孫に傳へる)とすることがはじまり、およそ四百年の間、禹の子孫が、代代、天下を保つて、桀王に至つた。桀王は、支那はじま

禹がほりわつた處といはれる龍門の景で、黄河の中流の過ぐるころにあたり、水流甚だ急である。

桀王の無道

湯王の善政

紂王の無道

殷の滅亡



夏殷周三代要地
都の夏=縣夏省西山=邑安
都の初め殷=縣邱商省南河=邑毫
都の後殷=縣師偃省南河=邑

つて以來の暴君で、おごりにふけり、酒色におぼれて、甚しく人民をくるしめたので、前1100年頃、遂に湯といふものに逐はれてしまつた。

殷の世

湯は、天子となつて、民をあはれみ、善政をしき、殷の世六百年の基をはじめた。その最後の紂王は、桀王同様、暴政をほどこして、大いに民心を失ひ、前1120年頃、姫發(前1100頃)にうちほろぼされた。

夏 (二七代 四〇餘年)
禹¹ 啓² 桀¹⁷
前1540頃 前1100頃

六〇年 殷 (二六代 三〇〇餘年)
湯¹ 紂²⁸
前1100頃 前460頃

◆禪讓放伐 堯舜のやうに、平和のうち、みづから天下をゆづるのを禪讓といひ、湯武のやうに、武力を以て、民望を失つた暴君をおひ、これにかはるの

を放伐といつてゐる。この禪讓と放伐とは、ともにながく支那の國體に大影響を及ぼした重大事で、この後、しばしば王家の革命がある。革命とは、天子の姓を易へ、世をあらためること、萬世一系の皇室をいただいてゐるわが國體とは、根本的にちがつてゐる。東洋史を學ぶものは、まづこの事をよくその心に入れておかねばならぬ。

周の都

封建制度

周の世 姫發は、王位に即いて、鎬京（後の長安縣）に都した。當時、天下には千數百といふ多數の諸侯があつたから、武王は、これを抑へて、世の太平を保つために、一族功臣を諸方に封じ、公侯伯子男の五爵を設けて、夏殷以來、やや備はつてゐた封建制度を整へた。武王について立つた成王（武王の子、即位の時、年十三）は、



ることるす佐輔を王成が公周
末漢東は堂祠氏武るあで畫の面内室石堂祠氏武は國のこ
るあに下山翟武南東の縣詳嘉省東山でのもたし造築に
るあで公周はるけ跪中人三の左のそ 王成はるて立に上臺の央中
詳不皆はるるてつ立に右の王成

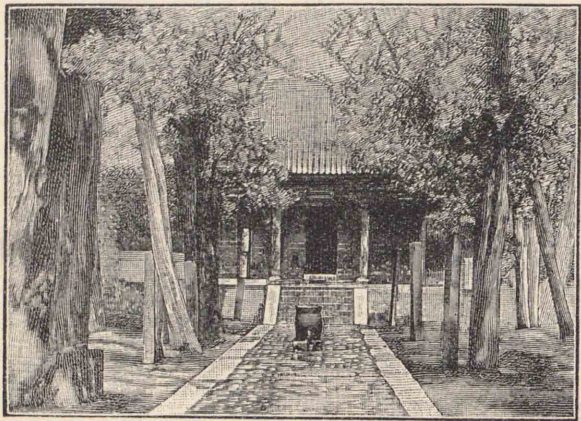
周公の輔佐
周の文明

王室衰ふ

諸侯の專横
異族の侵入

洛邑遷都

まだ幼年であつたが、賢明なる叔父周公が、これをたすけて、よく國を治め、禮樂をつくり、制度をととのへ、大いに漢族の文明を進めて、周の世八百六十餘年の基を定めた。



山東省曲阜縣城外東方にある。

周の公の廟

周室の東遷 しかるに、成王の後、久しからずして、王室の威力がおとろへ、諸侯は、日に日にわがままになつていつた。しかのみならず、異族が、またしきりに西方からおしよせて來たので、前一一〇年、周室は、これを避けて、東の方洛邑（後の洛陽、今の河南省洛陽縣）にうつつた。これが即ち周室の東遷で、周は、これから國勢がふるはなくなつた。

第二章 春秋・戦國

春秋の世

周室東遷の後、五十年ばかりたつて、いはゆる春秋の世

〔當時の事は、孔子が書いた「春秋」といふ書物にの〕となつた。春秋の世は、前六二

年から一八〇年に至る、およそ二百四十年あまりの間である。その

春秋の世の
ありさま

間、諸侯は、きそつて國を富ませ、兵を強くすることをつとめ、共に王

室の無力をあなどつて、その命に従はず、それぞれ獨立の姿をなし

て、相戦つた。その上に、異族が、またますます強くなつて、往往、畿内〔王

地の領〕に入りこみなどした。この時にあたつて、諸侯の中に、有力者が

覇者

あらはれ、諸侯をつらねて、その長となり、王室を安んじ、外夷を攘ひ、

五霸

以て天下の實權を握ることをつとめた。これが即ち覇者である。覇

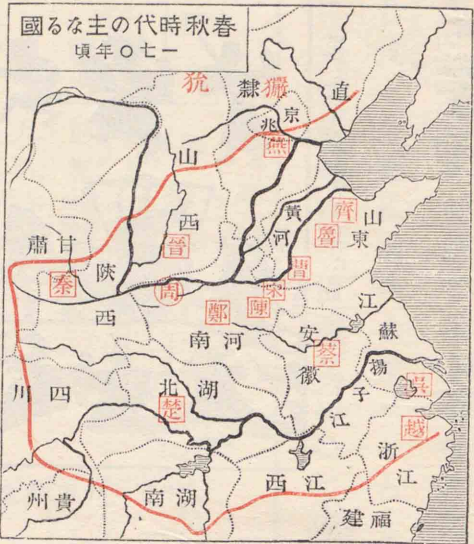
者とは、力を以て、諸侯たちをおさへ、これに長たるものをいふので、

前後あはせて五人あるが故に、名づけて五霸といつてゐる。その中

桓公と管仲

弱肉強食

七雄國の對立



するものもあつて、必ずしも一定してゐない。

戦國の世

春秋時代の争亂のために、諸侯の興亡甚しく、弱きもの

は、強きものにあはせられ、小はまた大にのまれて、結局、秦楚燕齊趙

韓魏の七雄國となつた。七雄國は、それぞれ諸方にたてこもり、およ

そ二百年の間、相たがひに攻め争つて、寧き日としては、一日もなかつ

て、齊〔侯爵〕の桓公〔神武天皇〕は、大政

治家管仲のたすけによつて、國

威を高め、最も盛んな業をなし

たので有名である。

◆五霸 五霸は、通例、齊の桓公、宋の襄

公、晉の文公、秦の穆公、楚の莊王として

ゐるが、宋の襄公のかはりに、越王勾踐

をあけるものがある。また齊の桓公、晉

の文公、楚の莊王、吳王夫差、越王勾踐と

戦國の世

秦の位置

秦對六國



(刻石の代漢)戦交の古上

上部は陸上、中部は橋上、下部は水上の交戦を示す。

合從・連衡

たまたま蘇秦といふ雄辯の策士があらはれて、はやく

た。これがいはいゆる戦國の世で、後には七雄國みな王號を用ひ、周室は、あれども無きが如きありさまとなり、また一人の尊王を口にするものもなくなつた。

秦の強大

七雄國の中、最も勢力のあつたのは、西方要害の地に據つてゐた秦である。秦は、人材を擧げ用ひて、質朴剛健の民をばげまし、しきりにその富強をすすめて、しだいに力を東方にのばさうとしたので、他の六國は、みなこれをおそれた。

蘇秦の合從策
張儀の連衡

六國の無方針

七雄國一覽

國名	國都	領地	滅亡の年代
秦	咸陽 咸陽縣	陝西省、 四川省	四〇〇
齊	臨淄 臨淄縣	山東省、 直隸省の 小部	四〇四
燕	薊 今の北 京の地	直隸省 の北部及 奉天省	四二九
楚	郢 湖北省 江陵縣	湖北、 湖南、 江西、 安徽、 河南省の 南部	四二六
魏	大梁 開封縣	河南省の 北部 及び東部	四七五
趙	邯鄲 邯鄲縣	直隸省の 西部 山西省の 大半	四三〇
韓	新鄭 新鄭縣	河南省の 中部 山西省の 小部	四三三

ことである。六國の位置は、縦に南北につらなつてゐるから、六國が相合して同盟する

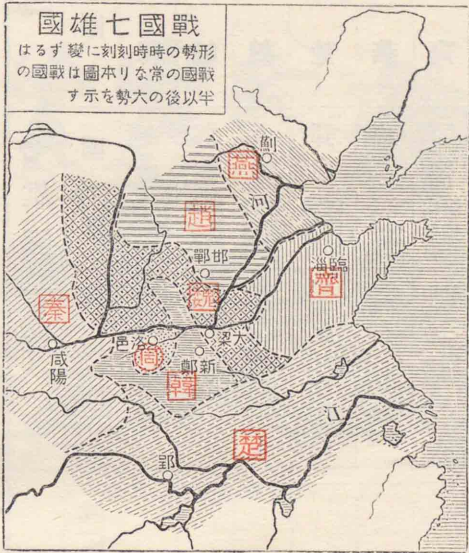
◇合從連衡 從は縦で、南北の

もこの形勢を見てとり、順次、燕、趙、韓、魏、齊、楚の六國に説き、相ともに合從して、秦にあたらすこととし、みづからその長となつた。しかるに、秦は、蘇秦の友張儀を用ひて、連衡のはかりごとをめぐらし、かへ

つて六國をして、それぞれ秦に服従させようとした。これから、六國は、或は合從し、或は連衡し、またたがひに攻めあつて、全く一定した方針がなく、日に日にみづから疲弊したのであつた。

のを合従といふのである。また衡は横で、東西を意味する。六國と秦とは、東西にならんでゐるから、六國がそれぞれ秦に連和するのを連衡といふのである。

◇蘇秦張儀 蘇秦張儀は立派に政治家の資格を具へ、特に雄辯を以て顯れたのである。共に自身の功名の爲めにし、只だ榮達をさへせば宜いとして居るが蘇は張よりも人物が淡泊で愉快、一の快男子であつて、夫れだけ締括りの足らぬ所があり、張は之に比して頗る腹黒く、煮ても焚いても喰へず、夫れだけ強く締括つて、相手をして身動きも出来ぬやうにする。張は黙つて居つても、優に勢力を贏ち得たであらう。〔三宅雄二郎氏著 西英雄一夕話〕



七國雄圖
はるす變に刻刻時時の勢形の國戰は圖本りな當の國戰す示を勢大の後以半

秦の強大

秦の一統 かかる間に、日一日とその實力を加へていつた秦は、ま

づ衰へきつた周をあはせ、ついで、王政に至つて、ことごとく六國を攻めほろぼし

前 460 頃
武王¹ 成王² 平王¹³ 威烈王³² 赧王³⁷
周 (三七代 約公室年)

た。これで、ながい間、かりごもと亂れてゐた天下が、はじめて一統された。時に 四四〇年〔孝靈天皇〕である。

◇六國の滅亡について 後世、唐の杜牧といふ詩人が、六國を滅ぼすものは、六國なり。

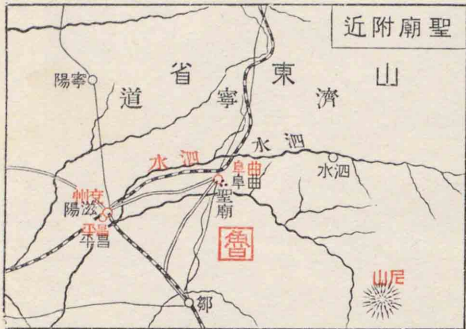
秦にあらざるなりといつてゐるが、まことに味ある言葉である。

第三章 孔子

周以前の教育

周の大學と小學

春秋戰國時代の有様



周の學制

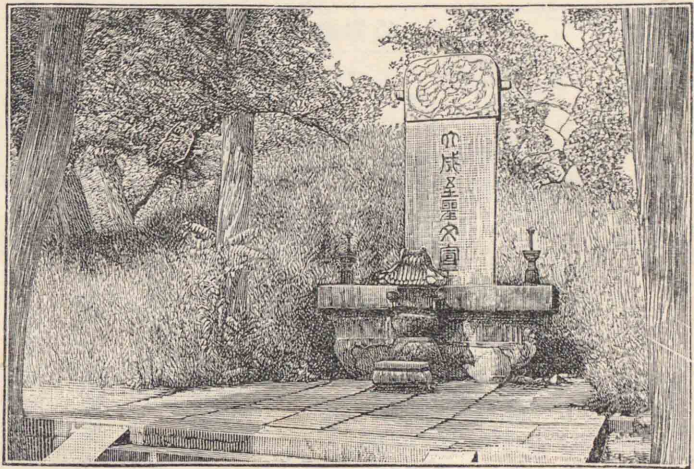
堯舜の時は、やくも力を教育に用ひ、夏殷の世には、學校も設けられた。周に至り、その制が、ますます備はつて、大學では、禮樂射御書數の六藝を授け、主として、おのれを修め、人を治める道を學ばせ、小學では、簡易な學科や、禮儀作法などを教へた。

孔子とその教

春秋戰國の亂世には、も

學者論客多
く出づ

孔子出づ



山東省曲阜縣城門の北方に當り、廣大でものしづかな孔子の墓地がある。そこには千古の老柏樹が枝をまじへてしけつてゐる。

孔子の墓

ろもろの制度が、全くくづれて、政府の取締も、社會の制裁も、ほとんど皆行はれなくなつたが、列國が相きそつて人材を求めたのと、思想言論が自由になつたのとで、人智は、かへつて大いに活動し、學者や論客が雲の如くにあらはれて、たがひに身を立て、世をすくふことをつとめた。その中で、最も名高いのが孔子である。孔子は、その名を丘といひ、字を仲尼と稱した。一〇九年〔綏靖天皇、魯〔今の山東〕といふ小國に生まれ、年長じて、學徳とも高く、仁を以て、身を修め、國を



孔子の像

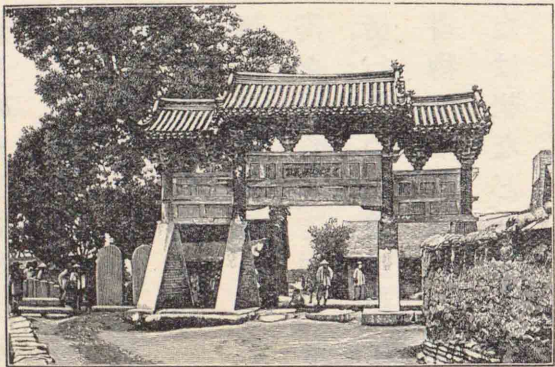
この像は、山東省曲阜縣聖廟大成殿に安置してある。その製作の年代については、徴すべき正確な文獻がないから、たしかなことはわからないが、東魏の興和年中(今からおおよそ千三百八十年前)に作つたものだといはれてゐる。

孔子と儒教

治める本とすべきことを教へ、年七十四で歿した。その教は、即ちいはゆる儒教で、孫子思をへて、孟子に傳はり、ながく支那の政治教化の本となつたのみならず、ひいては、朝鮮及びわが日本にも大影響を及ぼした。

◆孔子の讚 後に宋の米芾といふものが、孔子をたたへて、孔子孔子、大なるかな孔子。孔子以前、既に孔子なく、孔子以後、更に孔子なし。孔子孔子、大なるかな孔子」といつてゐる。孔子は、まことに大聖人である。

◆孟母の庭訓 孟子は、戰國時代の中頃の人で、名を軻といつた。その母は、世にまれな賢婦人で、ふかく心を孟子の教育に用ひ、墓地の附近の住居から市にうつり、さらに學校の傍にひきうつつた。孟母は、またかつて、孟子が讀書を中廢したのをいまして、その織つてゐた機をたちきり、途中で業を廢



孟母三遷表旌牌樓

孟母の徳を表彰するために、孟子の郷里山東省鄒縣に建てられたものである。

古文

篆書と隸書

楷行草

上古の書物

書寫の料

することの忌むべきをさとらせたのであつた。

文字の變遷

支那の文字には、黄帝以來、幾多のうつりかはりがあり、地方によつても、また多少その形を異にしたやうであるが、すべてこれを古文といつてゐる。周の時、古文よりも、やや簡易な篆書が發明され、秦の天下一統後、またこれを改良して、隸書をつくり、その後、なほ一層簡易な楷行草の三體が起つた。

草書	行書	楷書	隸書	篆書	古文
日	日	日	日	日	日
月	月	月	月	月	月
山	山	山	山	山	山
水	水	水	水	水	水
鹿	鹿	鹿	鹿	鹿	鹿
馬	馬	馬	馬	馬	馬
魚	魚	魚	魚	魚	魚
鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥

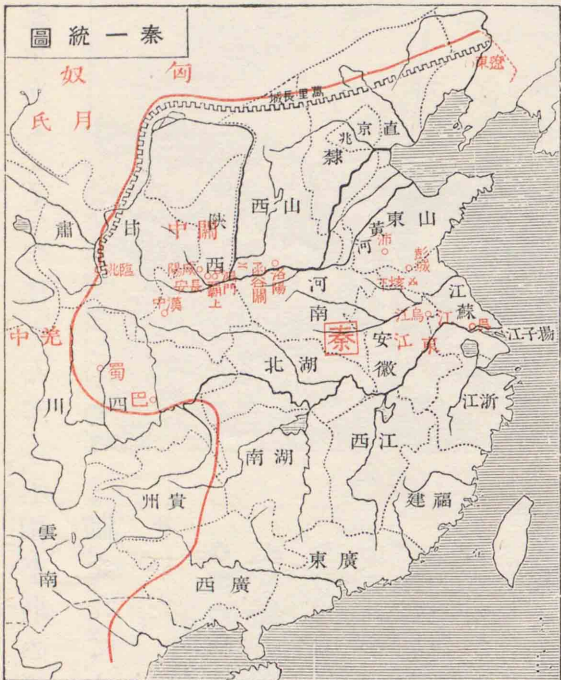
つた巻物で、鐵筆を以て、字をきざみつけたり、或は漆の液を用ひて、書きしるしたりしたのであつた。しかるに、秦の時にはじめて毛筆が精製され、後には樹の皮や布の類から紙をつくることの發明も

あつて、ますます多く文化の進歩を助けた。

第四章 秦の統一

始皇帝の中央集權

秦王政は、六國をほろぼして、天子となり、これま



での王號をやめて、皇帝ととなへることとし、みづから稱して、始皇帝と號し、二世三世とかぞへて、萬世に及ぼし、以て無窮に傳へようとかがんがへた。帝は、周が封建によつて、尾大ふるはぬ弊におちいり、遂に天下の大

郡縣制

亂をかもしたのにかんがみ、丞相李斯の言を用ひて、新たに郡縣の

制をたて、大いに力を中央集權にそ
そいだ。

◆秦の統一制度 秦では、中央政府に丞相(庶政を統ぶ)太尉(軍事を統ぶ)御史大夫(丞相をたすけて、目付役にあたる)の三大官を置き、地方は、これを三十六の郡に分け、その主なる官吏の任免は、全く中央政府でつかさどつて、統一の實を擧げることとした。

始皇帝の外征 この頃、北方に匈奴といふ蠻民がはびこつてゐて、つねに秦の北邊に攻めこんだ。帝は大兵をくり出して、これを撃ちしりぞけ、且、萬里の長城を増築して、これにそ



匈奴

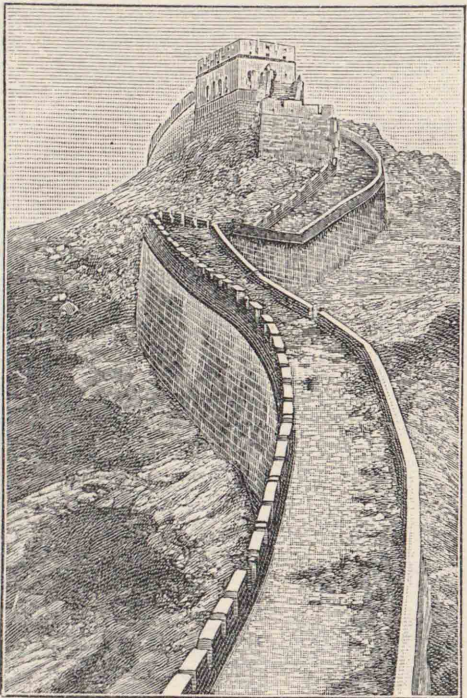
匈奴

萬里の長城

支那國名の起原

なへ、さらに今の兩廣(廣東・廣西)・安南地方までも征服した。それで、秦の領土は、周の二倍にもものぼり、秦は、實に未曾有の大統一國となつて、その威勢が四鄰にふるつた。かの支那といふ國名も、そのもとは、この秦の名から出たので、諸外國が秦をなまつて、チナと呼んだのにもとづくのだといふことである。

◆匈奴 匈奴は、トルコ種で、蒙古地方に遊牧し、水草をおうて、轉轉、居をうつした。未開野蠻ではあるが、騎馬に長じ、射術をよくし、戰爭に強かつた。



萬里の長城の一部

長城の築造に著手したのは、戰國の時である。秦以後、幾度かこれを修築して、現今に至つた。修築材料は、煉瓦または石で、その隙處に關門を設けてある。長城の上は、幅が廣くて、通路をなし、緩急相應じて、赴き援けるに都合よくしてある。

大土木

巡遊

勞役と重税

法令嚴重

焚書坑儒

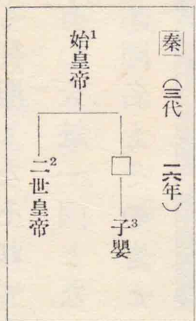
群雄蜂起

項籍と劉邦

秦の滅亡

かかる大帝國の首府として、從來の國都咸陽〔咸陽縣、陝西省〕そのままでは満足することができぬ。それで、始皇帝は、天下の善美をつくして、壯大なる阿房宮をいとなみ、また、しばしば地方をまはつて、ひろくその威光を天下に示しなどした。人民は、これらの事と外征とのために、勞役につかれ、重税にくるしんだが、天性、強情我慢の帝は、極度に統一を欲して、法令を嚴重にし、且、新政を非難するものをのぞいて、人心を一つにしようと企て、遂には書を焚き、諸生を坑殺したりして、甚だしい暴政を施した。そのため、だんだん秦をうらむものが多くなり、帝の死後、まもなく、項籍〔羽は〕劉邦以下の群雄が四方に蜂起し、天下は、また大亂のちまたとなつた。やがて、項籍と劉邦と、相ともに秦を攻め、籍、ことによく戦つて、しばしば秦の兵を破つたが、邦は、たくみに籍にさきだつ

440



455



阿房宮 荒木寛畝氏筆

この圖は、荒木寛畝氏の嗣子荒木十畝氏の所藏で、寛畝氏が苦心慘憺、滿三箇年の日子を費して、完成した一代の大作である。寛畝氏が江戸の土佐藩邸に於て、この圖の製作に精進してゐた頃は、三十四・五歳の時で恰も慶應・明治の交にあたり、天下の風雲、しきりに動き、或日の如きは、舊幕軍が、薩摩の藩邸を襲ひ、それに接する土佐藩邸は、危険いふばかりもないありさまであつた。或人が、寛畝氏に向つて、その製作の中止をすすめたところが、氏は、「なに、これがわしの天職だ。この大作を仕上げるまでは、死んでもやめぬ。またこれを仕上げる事が、唯一の奉公だ」といつて、平然として、その完成に努力したのであつた。

秦の滅亡

項籍劉邦の
争

三傑

劉邦の即位

て、秦の國都にせめよせた。かくて、秦は、萬世どころか、わづかに三世で、四五五年〔前206帝の死後僅かに四年〕に、劉邦にほろぼされ、始皇帝の理想も、あはれ槿花一朝の夢ときえうせてしまつた。

第五章 漢の統一

漢の統一



項籍は、劉邦の功をねたみ、鴻門〔咸陽の東、陝西省咸陽縣〕に陣して、これを撃たうとしたが、その志を果し得ず、これから數年の間、邦と天下を争つた。邦は、よく蕭何、張良、韓信の三傑を用ひて、籍にあたり、四五九年〔前202帝の御代〕、遂にこれに克つて、帝位にのぼつた。これが即ち漢の高祖である。

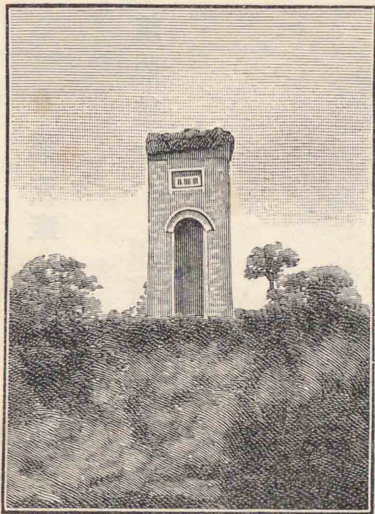
◇鴻門の會

劉邦は、項籍がおのれをうたうとしてゐると聞いて、張良以下を従へ、鴻

門に至つて、籍に謝した。それで、籍の怒も、ややとけ、やがて酒宴がはじまつたが籍の臣范増は、しばしば籍にめくばせして、邦をうつことをうながし、遂には人をして劔舞にことよせて、邦をうたせようとまでした。この時、劉邦の臣樊噲は、事の急なるをきき、劔をおび、盾をかかへて入り、目をいからして、籍をにらみ、且、その不徳をせめた。そのうちに、邦は、厨にゆくと稱し、噲を召して、ともににけかへり、張良をとどめて、籍に謝せしめ、からうじて大難をのがれた。

漢初の制度 高祖は、都を長

安〔周の鎬京〕にさだめ、ほぼ秦の制にならつて、中央政府を組織した。ただし、周・秦の興亡にかんがみ



鴻門の舊蹟

て、封建郡縣の兩制度をあはせ用ひ、子弟同姓を王に封じて、帝室の藩屏となし、その間に直轄の郡をまじへ置き、中央政府の任命する官吏によつて、これを治めさせ、且、かたく異姓のもの王たることを禁じた。

中央政府の組織

封建郡縣兩制の併用

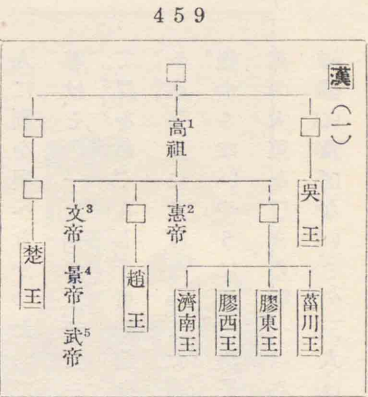
を禁じた。

◆高祖と三傑 高祖はいよいよ皇帝の位に即き、群臣をあつめて、酒宴を開いた時、群臣に向つて、朕が天下を平定したのは、なにによるかとたづねた。或者がこれに答へて、陛下が天下をとられたのは、人をして城をおとさせたり、地を略させたりした時には、必ずその者にこれを與へ、人と共に利益を同じくされたからです。これに反して、項羽は、功あるものを害し、賢者をもうたがひ、戦勝つても、人に賞を與へず、地をとつても、人に利を與へなかつたので、遂に天下を失つたのですといつた。帝は、これをきいて、卿等は、その一を知つて、未だその二を知らざるものである。帷幄〔作戦の計畫〕の中にあつて、謀をめぐらし、千里の遠きにも、勝利をあやまらぬ參謀の智略に至つては、朕は、到底、張良に及ばない。また國家を治め、百姓を安んじ、兵糧を十分にたくはへて、それを絶やさないうやうにする治民行政の手腕に至つては、朕は、到底、蕭何に及ばない。また百萬の大軍をひきる、戦へば必ず勝ち、攻むれば必ずとる將帥の才に至つては、朕は、到底、韓信に及ばない。この三人は、いづれも天下の人傑である。朕は、これを用ひたために、天下を取ることが出来たのである。しかるに、項羽は、一人の范増をすら用ひることが出来なかつた。これ項羽が朕のためにほろぼされた所以であるといつたので、群臣は、皆悦び服した。

呂後の人物

呂後の専横

呂氏の亂 高祖の皇后呂氏は、才略に富んだ女傑で、高祖の在世中から、政治に關係してゐたが、高祖の死んだ後、いよいよ政を専らにし、遂にはその禁をも破つて、おのれの一族を王としたりなどし、漢室をかたむけて、その天下を奪はうとまでした。しか

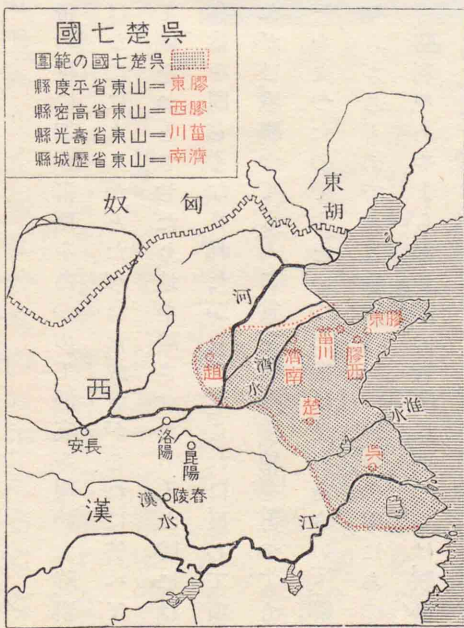


諸呂誅に伏す

るに、ほどなく死んで、呂氏の一族は、劉氏の諸王及びその他の人人によつて、ことごとく誅せられた。

吳楚七國の亂

かくして、



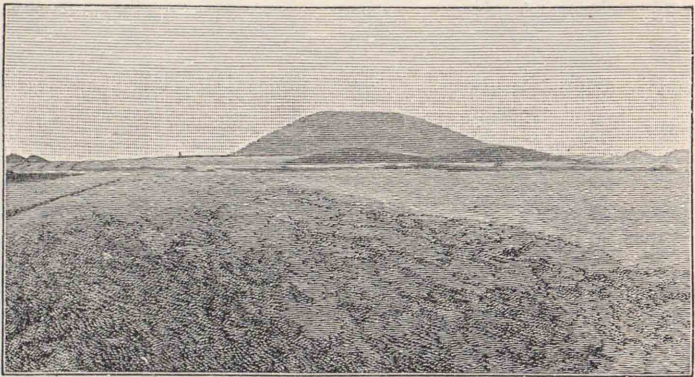
同姓諸王の強勢

景帝の對策

吳楚七國の叛

亂後の處置

呂氏の亂は定まつたが、諸王の實力は、かへつて、だんだん増して、遂には朝廷の命令をすら奉じないものがあるやうになつた。それで、景帝〔代第四〕は、事あるごとに、その領土をけづつて、諸王の勢力をそぐことをはかつた。すると、吳楚以下の七國が、これをうらみ、五〇七年〔開化天皇の御代〕遂に相應じて叛旗をひるがへし、漢室も、一時、危急の淵にのぞんだのであつたが、からうじて、これを平げて、事なきを得た。この亂の後、漢では、諸王をば皆都にとどまらせ、別に朝廷の官吏を遣はして、その領土を治めさすこととし、景帝の子武帝の時、さら



景帝陵

陝西省咸陽縣治の東にあつて、方壘状をなし、基邊約二百三十尺、高さ約四十五六尺ある。

中央集権の
實舉がる

に大國を小分して、ますますその權力をよわめた。これで、漢は、はじめに中央集権の實を擧げることが出來た。

第六章 武帝の功業 朝鮮の興亡

文運復興

武帝の文勳 武帝は、心を學問教育に用ひ、大學をおこして、大いに儒學を奨励し、且、文學の士を愛護した。この時、儒者に董仲舒、文人に司馬遷などの大家が出て、秦火以來おとろへた文運が、またおこつた。

◆司馬遷と史記 司馬遷は、世に名高い、史記の著者である。史記は、太古から漢の武帝に至るまでの紀傳體歴史で、この後、ながく支那正史の手本となつた。

武帝の人物

武帝の武功 武帝の功業は、ただに文事のみにはとどまらない。元來、有爲の才を懷いて、功名の心に富んだ帝は、漢初のゆたかな國力を利用して、しきりに兵を國外に動かし、匈奴その他の諸外國を

外征

漢の領土

伐つて、國威を四方にかがやかした。その結果、漢の領土は、東、朝鮮から、西、天山南路に、北、内蒙古から、南、安南に及び、秦の時よりも、また一層大きくなつた。それ

漢土と漢人



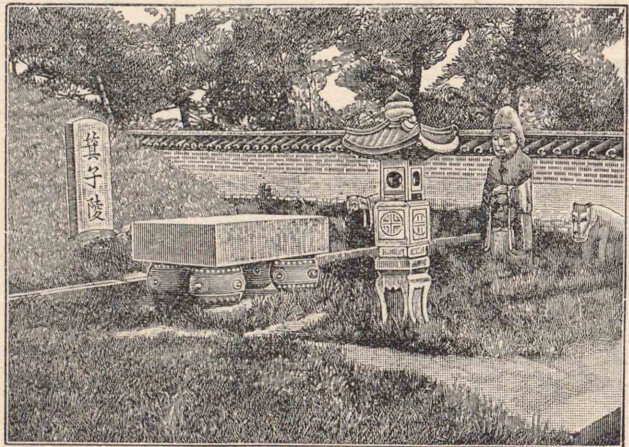
武帝
た、それ
で、漢土
といへ
ば支那、

漢人といへば支那人を意味するやうになつた。

朝鮮の變遷

朝鮮は、周のはじめに、殷の王族箕子が、王險〔平壤〕に據つてたてた國である。箕子以後、代代、そ

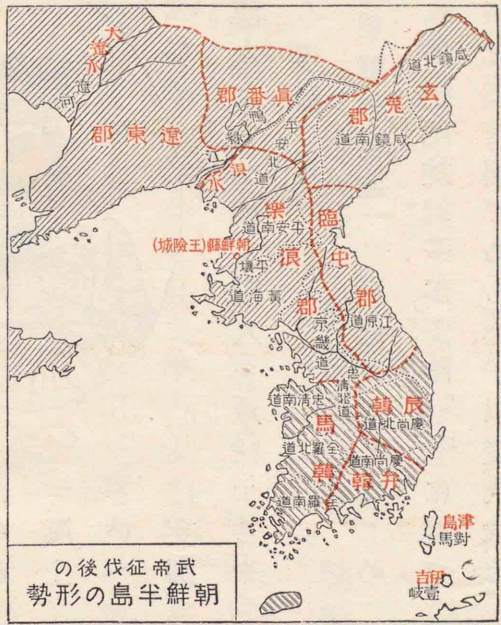
箕子の建國



朝鮮平壤の密靈の西麓松林中にある。

箕子陵

衛滿と朝鮮



武帝征服の結果

日漢の關係

帝にうちほろぼされ、樂浪以下、漢の四郡となつた。その頃、半島の南部は、馬韓、弁韓、辰韓の三韓に分れ、はやくから、わが日本と交通してゐたから、わが國及び三韓と漢との交通も、またしたがつて開け、支那の文明は、ますます多く東進した。

の子孫が、王位にのぼつて、半島の北部から遼東までの地をたもつてゐたが、漢のはじめ頃に、支那からにげて來てゐた衛滿といふものに、その國を奪はれた。かくして、衛氏が箕氏に代つて王となり、相傳へて、衛滿の孫に至ると、朝鮮は、武

財政困難

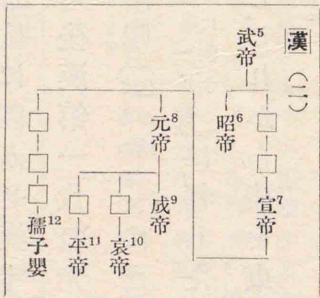
宦官外戚の專横

王莽の篡奪

王莽の政治

漢の末路

武帝の世は、連年の遠征や、盛んにおこした土木工事などのために、その失費が、はかりしられぬほどであつた。それで、ぜん、財政の困難を招き、課税は重くなる、物價は騰貴する、人民は、疲弊のあまりに盗賊となつたりして、天下は、しだいにおだやかでなくなつた。幸にも、帝の後二代、明君が相ついて出て、善政をしき、民力の休養をはかつたから、漢室は、しばらく事なきを得た。しかるに、ほどなく宦官と外戚と、かはるがはる權を専らにし、六八年、垂仁天皇の御代に至つて、外戚王莽が、遂に漢の帝位を奪つた。



668

第七章 東漢 西域との交通

漢室再興

王莽は、國を新と號し、しきりに人望を得ることをつ

十二年前
伊勢の皇
大神宮起る

群雄蜂起
劉秀の漢室
再興

西漢と東漢

光武帝の業



光武帝

とめたが、法令が常に變じて定まりなく、その上、しばしば幣制を變
更して、國民の經濟をみだし、且、重税をとりたてたりしたので、たち
まち人心を失ひ、天下は、また漢室をおもふに至つた。この時に乘じ、
群雄が四方に蜂起して、王莽をたふし、六八五年〔垂仁天皇の御代〕漢の一族劉秀
をおし立てて、帝位に即かせ、漢室を
再興した。これが後漢第一代の光武
帝で、その都を洛陽〔洛陽の地〕にさだ
めたから、長安〔洛陽より西に都した前
漢を西漢と稱し、これから後を東漢
といふのである。

東漢の初世

光武帝は、諸將を遣はして、各地に割據してゐる群
雄を伐たせ、久しからずして、天下を一統した。これから、帝は、専ら平
和主義をとつて、なるべく兵を動かさぬこととし、最も力を内治に

明帝・章帝
の治

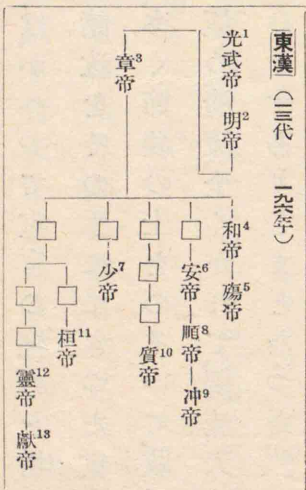
用ひ、大學をおこし、禮樂を定め、大いに節義を獎勵して、卑屈の氣風
をしりぞけた。帝の後、子明帝孫章帝が、相ついで立ち、いづれもよく
父祖の業をまもつて、儒教文學を尙び、光武以下三代六十餘年の太
平を致した。

◇明帝の皇后 明帝の皇后馬氏は、婦徳高く、みづから儉素をまもつて、粗服をまとひ、
宮女の美装をゆるさなかつた。后は、つねに己れの一族のものをいましめ、外戚の威を
かりて、華奢に流れ、わがままな振舞をなす等のことなきやうにし、朝廷から恩賜の事
があつても、なるべくこれを辭退させた。かかる賢明な皇后の内助の功があつたれば
こそ、明帝の治績も、立派になつたのであらう。

東漢の末路 その後、代代の皇

帝は、多く幼年で位にのぼり、また
はやく世を去つたので、しぜんと、
外戚專横の弊をかました。諸帝の
中には、宦官の力をかりて、外戚を

685



880

外戚の專横

宦官の跋扈

おさへたものもあつたが、その結果は、かへつて宦官の権力を増すこととなつた。かくして、遂に朝廷の諸政をその手ににぎつた宦官

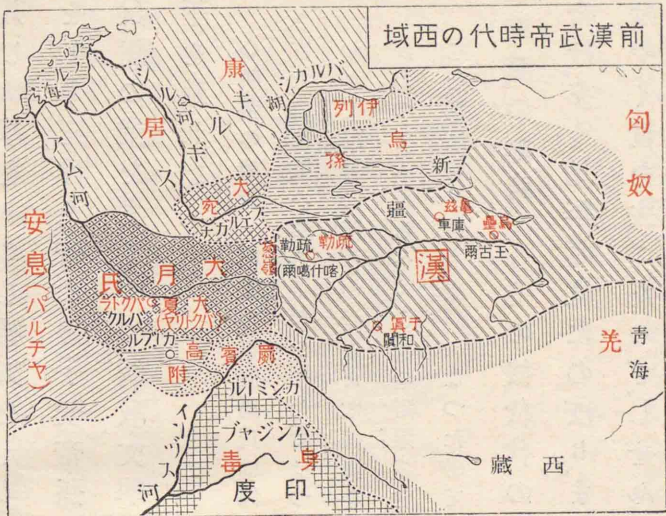
は、多く節義の士をのぞいて、跋扈を極め、清流、全くかれて、濁流、天地をひたすありさまとなつた。

西域との交通

はじめ、河西（黄河以西の甘肃の地）

の地に月氏（トルコ種、或はチベ）といふ種族が據つてゐた。この種族は、西漢のはじめに、匈奴に撃たれ、西に走つて、アム河北の地に土著し、ここに大月氏國をたて、しだいに盛んになつて、中央アジアにさかえてゐた。西漢の武帝は、大月氏が匈

月氏族
大月氏の建國



張騫大月氏に使う

漢と西域との關係

奴をうらんでゐる由を傳聞し、これとしめしあはせて、匈奴をはさみ撃つことをはかり、張騫を大月氏に遣はした。張騫は、途中、匈奴にとらへられ、十餘年の後、のがれて大月氏におもむいたが、大月氏が、既に匈奴と戦ふ意志をもつてゐなかつたので、使命をはたさずして、ひきかへした。ただし、これから、西域諸國の様子が、だんだん漢人に知られて、その交通も、おひおひに開け、西域からは、名馬、葡萄及び美術工藝品などを漢に輸入し、漢からは、蠶絲、絹、漆などを西域に傳へた。

◇西域 西域とは、匈奴の西邊と、今の新疆省地方及びバミール高地以西の總稱である。漢の初世には、東玉門、甘肅省敦煌縣の西北、陽關、敦煌縣の西南から、西葱嶺に至る間に三十六の國があつたが、後、分れて五十餘國となつた。

班超の功業

王莽は、外交に失敗を重ね、諸外國に對して、甚しく威信をおとした。それで、匈奴も西域諸國も、皆叛いたのを、東漢の明帝

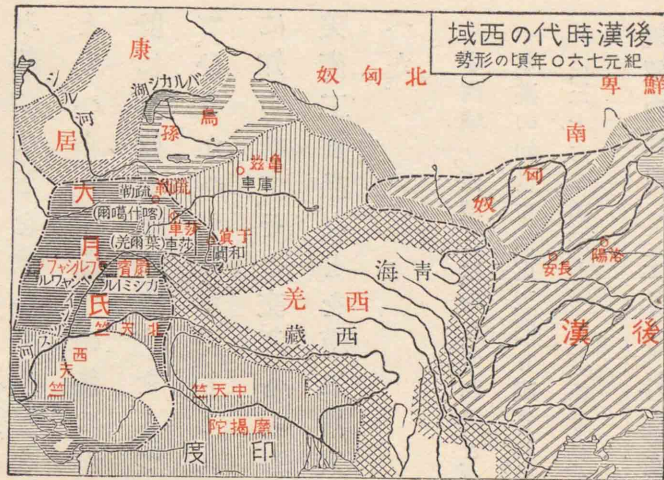
王莽の外交失敗

この頃景行天皇熊襲を征したまふ

班超と西域

漢とローマとの関係

東西海上の交通



だんだん開けて、支那の商船は、遠くセイロン島附近まで赴いた。

は、大いに軍を起して、匈奴を撃ち破り、また班超を西域に遣はした。

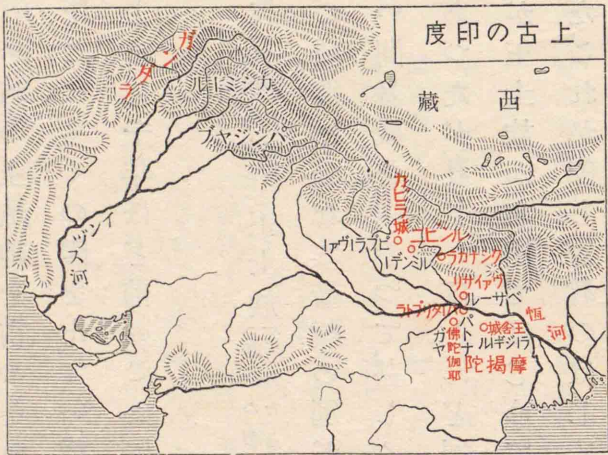
班超は、三十年の久しい間、西域にとどまつて、よくその諸國を従へ、さらに人を遣はして、ヨーロッパの大統一國ローマと交通しようとして、試みた。この試みは、遂に成功しなかつたが、ローマでは、大いに支那産の絹を愛好し、かねがね支那との交通を開くことをのぞんでゐたから、東漢末に、みづから進んで、使を出し、印度洋より安南をへて、洛陽に至らせた。これから、海上に於ける東西の交通が、

◆班超の兄妹 班超の兄班固は、西漢の歴史、漢書を著した博學能文の士である。その妹昭は、またわが紫式部にも比すべき才女で、且、貞女であつて、はやく夫曹世叔にさきだたれた後は、操を守つて寡居し、兄の業をついで、遂に漢書を大成した後昭は召されたが、極めて謙遜で、すこしも才をほこるついで、遂に漢書を大成した。後昭は召されて、宮中に入り、皇后以下の人人の師範となり、婦人の道徳を説いたもので、後世、ひろく用ひられた。

第八章 上代の印度 佛教の東流

上代の印度 はじめ、漢族が、西北方

から黄河の流域にうつつて来たころ、中央アジアのアム・シル兩河の間には、アリヤン種族が住んでゐる



アリヤン族の居住地

アリヤン人
印度に入る
印度に於け
る建國

四種姓

僧族の跋扈

釋迦の出世
と佛教

た。このアリヤン種族の一派で、しだいに東南に進んだものがある。まづインドの西北部にはいつて、インヅス河の上流地を占め、それより、しだいに恆河の左右にひろがり、そこに多くの國をたて、一種特別の文明を開いた。それは、今からおよそ三千年ほど前のことである。

佛教の開基

當時の印度の社會は、僧族〔祭祀教法を〕王士族〔兵政の事〕

平民〔をいととなむ〕奴隸〔耕作運搬等の〕の四つの種姓に分れて、階級の別が、甚だ嚴重であつた。そして、僧族が、久しい間、暴威をふるつて、甚しく他の種姓のものを壓制してゐたのであつたが、孔子とほとんど同時代に至り、カピラ城主の子釋迦牟尼が、王士族から出て、はじめて四民の平等をとらへ、慈悲博愛を説いた。これが即ち佛教のはじめである。

◆釋迦牟尼

釋迦とは族名牟尼とは聖者の義本名は、ゴータマシッダタルタで、父は淨

釋迦の布教



印度のブダガヤに於て發見したもの。

ゆる佛陀覺めたる人の義の境に入ることを得た。

釋迦歿後の佛教

釋迦は、およそ四十年の間、道を説き、教を傳へて、倦

むことなく、年八十で、一七八年頃〔懿徳天皇の御代〕歿した。その教は、從來、階級

前483

釋 迦

飯王、母は摩耶夫人である。摩耶夫人の孕むや當時の習慣にしたがつて、その實家にかへらうとし、途中、ルンビニ今のルミンデーに至つた時、急に産氣をもよほして、一子を生んだ。これ即ち釋迦の誕生である。釋迦は、父母の愛を一身にあつめ、幾多の臣下にかしづかれて、平和のうちに成長したが、ふかく人生の無常を觀じ、妃をむかへ、愛兒を擧げても、これを慰めることが出来なかつた。それで、二十九歳の時、斷然、宮殿をのがれ出で、高僧をたづねて、教を仰いだ。意に滿たず、みづから山中に入り、難行苦行すること六年、さらにブダガヤの一菩提樹の下に靜觀すること四十九日にして、はじめて生老病死の苦しみを解脱する道をさと、いは

孝靈天皇の御代

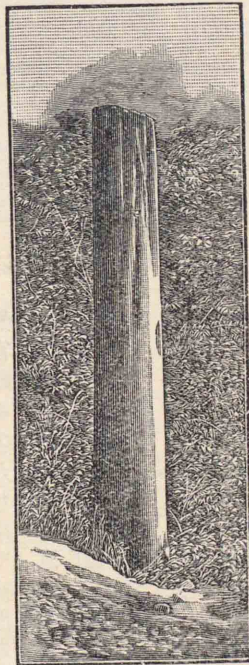
釋迦殺後の佛教

制度になやんでゐた印度の諸族に歡迎され、たちまち四方にひろまつたとはいふものの、アシヨカ王（即位西二九〇年頃死）がマガダ（摩揭）國に出たころまで、二百數十年の間は、勢力がなほ恆河流域内にかぎられてゐた。

アシヨカ王と佛教

アシヨカ王と佛教

カ王は、秦の始皇帝と同時代の人で、ほほ印度半島を一統した大君主である。王は、あつ



釋迦誕生地ニピル石の柱（今ニデン）

この石柱は、わが明治三十年の發見にかゝる。刻文には、アシヨカ王がこの地に來り、釋迦誕生地なるの故を以て、免租する旨を記してある。

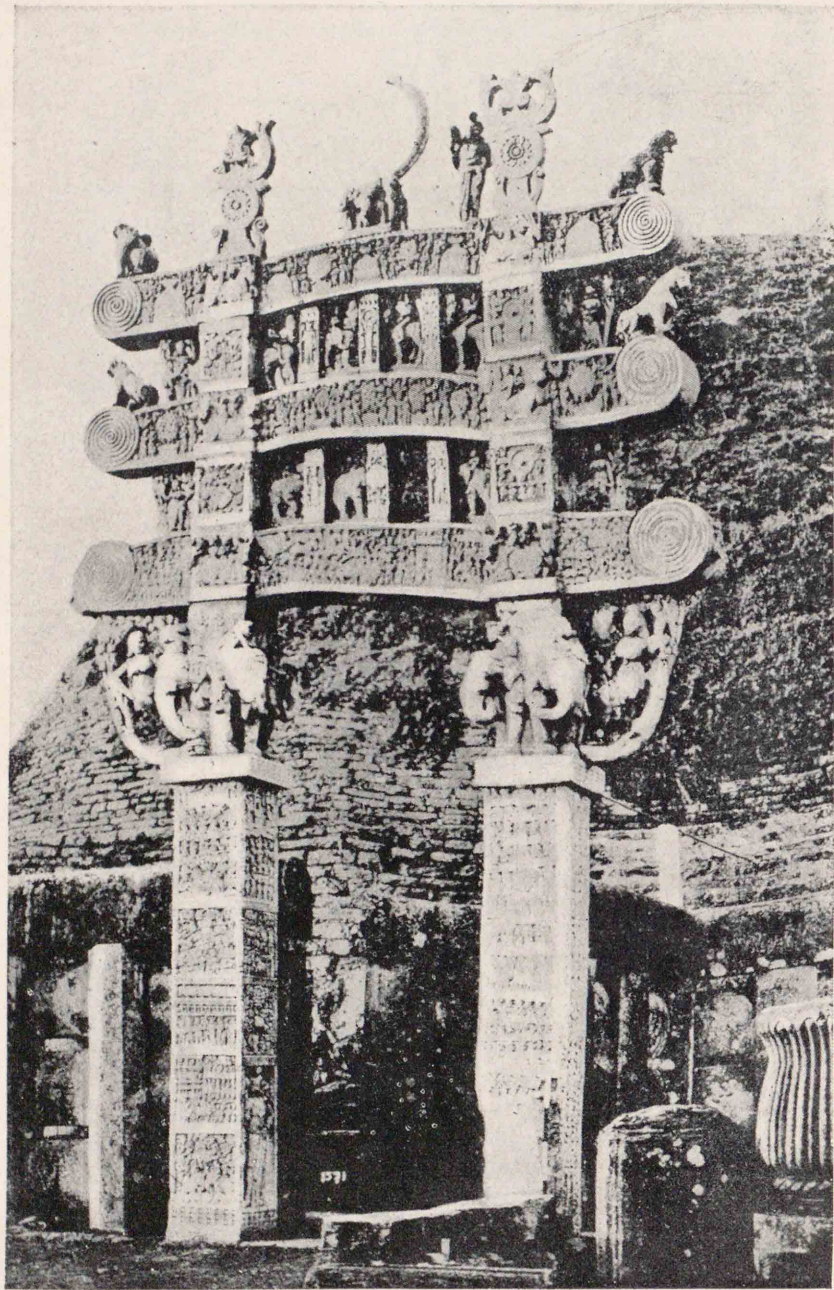
佛教の傳播

く佛教に歸依し、或はしたしく佛蹟をめぐり、或は諸處に塔をおこし、石柱をたてなどし、また僧侶を四方に派遣して、熱心、これをひろめることをつとめた。その結果、佛教は、印度半島内はいふに及ばず、遠くセイロン・ペルシヤ・エジプト・ギリシヤ等に至るまで、ひろく傳



アシヨカ王

（畫にたれか彩色した）



サチン大塔の北門

サンチーの大塔は、アシヨカ王時代の建立にかかる。その周囲の柵及び精緻の彫刻を施した四箇の門は、後世に添加したのであるらしい。サンチーは、一小村で、ビルサ市の南西約五哩半、ポパール市の北東二十哩の處にある。

マガダの興亡

佛教の中心
大月氏に
つる

カニシカ王
の世

カニシカ王
の佛教保護

はつた。

カニシカ王と佛教

アシヨカ王の後、マガダは、國勢が、しだいにおとろへて、再三、王朝が興亡した。それにつれて、佛教徒は、多くマガダを去



幣貨の王カニシカたし刻を像の迦釋

つて、大月氏國に赴き、その保護をうけたから、佛教の中心は、しぜんマガダを去つて、大月氏にうつつた。大月氏は、西漢末以來、一層、國勢がふるひ、東漢の中頃に出たカニシカ〔迦賦〕王の時には、まさにその絶頂テヤウに達した。當時、大月氏の領土は、實に廣大をきはめ、印度の西北部から中央アジア一帶の地にまたがり、ひいて葱嶺ソウレイ以東にまで及んでゐた。カニシカ王は、またあつく佛教を信じ、力をつくして、これを保護したから、佛教は、王の廣大な領土内にひろまり、東流して天山南路にまで進入した。

垂仁天皇の御代

佛教支那に入る

佛教朝鮮日本に入る

佛教の東流 はじめ、東漢の明帝は、西域に佛教ありと聞き、人を大月氏に遣はして、佛像及び經典を求め、且、高僧をとまひかへらせた。これから、西域の僧侶が、續續支那に入りこんで、教をひろめたり、經文の翻譯に従事したりしたので、支那の佛教は、年一年に盛んになり、さらに東して朝鮮半島に入り、後にはわが日本にまで傳來した。

第九章 三國

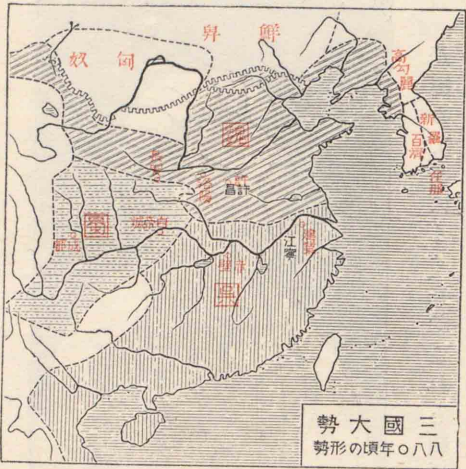
東漢末の政治 群雄蜂起と

東漢末の三雄 東漢の末年、その國政が甚しくみだれると、例によつて、盜賊が、各處に横行し、群雄がまた諸方に起つた。その中で、最もいちじるしいのが、曹操、劉備、孫權の三人である。

◆曹操と劉備 曹操は、或時、劉備にむかつて、天下の英雄は、ただ君とわればかりであるといつた。これは、曹操が、平生、劉備をおそれるたので、かういつて、その氣をひいて

八年前神功皇后新羅を征したまふ

江北に於ける曹操 江南に於ける孫權 赤壁の戦



三國大國の頃年〇八八 勢形

見たのであつた。その時、劉備は、曹操と會食中であつたが、自分が天下に志のあるのを曹操に見ぬかれたと感じ、ハツと思つて、匕をとりおとした。をりしも、突然けたたましく雷がとどろいたので、備は早速氣轉をきかせて、むかし、聖人は、はげしく雷がなつたり、風がひどく吹いたりしたときには、必ず容を變じて、おそれたといふことですが、私も今雷鳴のために、あわてて匕を取りおとしてしまひましたといつて、まことに臆病らしい様子を示したので、曹操は、劉備をとるにたらぬ人物であるとおもひ、それから後は、かれを疑はなかつた。

天下三分の形勢 曹操は、東漢の天子を擁して、四方に號令し、劉備を攻め走らせて、ことごとく江北の地を定め、さらに進んで、江南をも取らうとした。その頃、既に江南一帶の地を領してゐた孫權は、劉備の賢臣諸葛亮の言に従ひ、備と力をあはせて、曹操の軍をむかへ、²⁰⁸ 八八年「應神天皇」の御代、大いにこれを赤壁〔湖北省嘉魚縣の江岸〕に破

諸葛亮は
わが武内
宿禰と同
時代の人

蜀に於ける
劉備

つて、操の志をくじいた。この戦の後、劉備は、西して蜀〔四川省〕に據り、江北の曹操、江南の孫權と鼎足の勢をなした。

◆諸葛亮

諸葛亮は、字を孔明と稱した。八一年、山東の瑯琊といふ處に生まれ、幼き時、父母をうしなひ、叔父に養はれてゐたが、後、襄陽の隆中〔襄陽城西北の丘に寓居し、學を修め、才をねりしつかに天下の形勢を觀てゐた。たまたま劉備が亮の人物をしたひ、三たびそのいほりをたづねたので、亮は、備の誠意に感じ、遂に出でてこれにつかへ、そのあひだ、が、水魚のやうにうるはしく、忠誠無比、人臣の模範として仰がれてゐる。亮の妻黃氏は容貌



亮 葛 諸

が極めてみにくく、亮がこれと結婚した時には、一郷の人が、皆憫笑したほどであつた。しかるに、絶世の大人物亮のつれあひとして、内助の功を完うした賢婦人は、外ならぬこの醜女であつたのである。

三國の鼎立

曹操の死後、その子曹丕は、東漢の天子に迫つて、帝位

神功皇后
攝政時代

魏 蜀 吳

諸葛亮の誠
忠

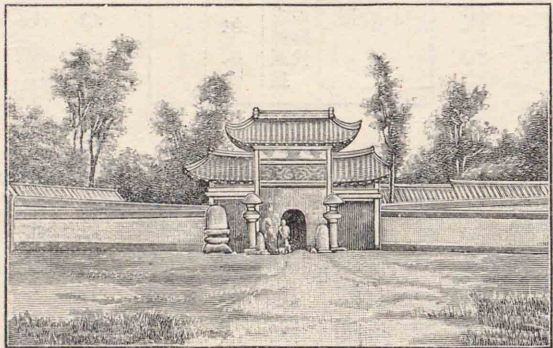
諸葛亮の死

をゆづらせ、洛陽に都して、魏の文帝となつた。時は八〇年〔神代天皇〕、これ、東漢は、全くほろびてしまひ、蜀に據つてゐた劉備も、その翌年に、成都〔四川省〕で位に即いて、蜀漢の昭烈帝となり、後八年、孫權も、また吳帝と稱して、建業〔江蘇省〕に都し、支那はいよいよ三國分立の世となつた。

蜀の滅亡

蜀では、劉備の死んだ後も、諸

葛亮がよく後主をたすけて、内外の政を治め、吳としたしんで、専ら魏と戦ひ、力を漢室の興復につくした。をしいかな。亮は、その功の未だ全く成らざるに、征魏の陣中に病死したので、蜀の國には、はやくも、うらさびしい衰亡のかがが見え、遂に魏にほろぼされた。



廟の亮葛諸

四川省成都城南にある。

魏の國勢

神功皇后
攝政時代

晉の統一 魏は、支那中央の要地を占め、三國中、その領土が、最もひろく、遠く朝鮮半島の西北部までをもあはせ領し、蜀をほろぼしてからは、一層、威勢が盛んになつた。しかし、魏は、曹操以來、多く一族のものを殺し、かへつて、その家の援を失つてゐたから、九二五年〔應神天皇の御代〕に、權臣司馬炎が、苦もなく、その天下を奪つて、帝位に即いた。これが晉の

三國一覽

國名	始祖	國都	代數	はじめた帝號を稱した年代	滅亡年代
魏	曹丕	洛陽	五	八〇の應神天皇の御代	九五の應神天皇の御代
蜀(漢)	劉備	成都	二	八二同	九三同
吳	孫權	建業	四	八九同	九四同

吳の滅亡

武帝である。武帝は、即位の後十五年に、吳を伐つて、これをほろぼし、遂に天下を一統した。漢末の分裂から、ここに至るまで、星霜實に八十餘年である。

後五年王
仁來朝し
論語千字
文を獻す

概 括

上古期は太古から晉の一統に至るまでの間で、皇紀では、九四〇年〔應神天皇の御代〕以前に相當する。この期のはじめに、漢族は、西北方から黃河の流域にうつつて來て、支那文明の基をひろき、しだいに諸蠻族を征服し、或はこれをおひはらつて、大いにその勢力をひろめ、遂に支那本部の大半を一統するに至つた。その間、黃帝が出て、はじめに一統の業を成し、堯舜の世をへて、漢族の國本は、ますますかたくなつた。夏殷および周の間は、文化の進歩が、比較的おそかつたやうだが、その封建制度をはじめとして、もろもろの組織は、いづれも皆周の標準となり、周固有の文化と夏殷の文化と合一して、遂に未曾有の盛觀を呈した。ただし、周は、文弱に流れて、立派な制度も禮樂も、歲月とともに、だんだんくづれ、中央政府の組織は、名あつて實なく、地方の諸侯は、專横をきはめて、尾大ふるはず、遂に春秋戰國の大亂世となり、最後に秦の一統を見るに至つた。

秦は、始皇帝の武斷專制の結果、一統後、わづかに十五年でほろび、ついで漢の世となつた。漢は、多年、支那を支配して、ますます漢族の勢力を張り、はげしく邊外の諸種族と競争衝突して、しばしば對外的優勢を示し、漢土及び漢人の名は、支那及び支那人の別名となるに至つた。當時、西域との交通が、漸く開けて、漢文化の西方に傳はつたものもあるやうだが、漢にはいつた西域の文化も、少くない。後にだんだん流行して、漢文化に影響を及ぼした佛教は、實に東漢

の初世に傳來したのである。また儒教は、西漢以來、ほとんど國教同様の取扱トリアツカヒを受け、その經典の研究が、しだいに盛んになつて、漢族の文化は、ますます進んだ。さりながら、漢代には、宦官外戚の憂があつて、國政も、これがために大いにみだれ、遂に天下の大亂をかもして、ここに三國の分立となり、およそ五十年にして、また晉の一統に歸した。

年表

(一)

年代は皇紀に據る

時代王朝

年代 (天皇) 重なる事蹟

堯

前二六八〇頃

堯の即位

舜

前二六〇〇頃

舜の即位

夏

前1540頃
前1100頃

前二五四〇頃

禹の即位

前二一〇〇頃

夏の滅亡

殷

前1100頃
前460頃

前二一〇〇頃

湯の即位

前四六〇頃

殷の滅亡。箕子朝鮮王となる

周

前460頃—405

春 秋 戰 國

前四六〇頃
前一〇〇
二五

武王の即位
周室の東遷
齊の桓公立つ

一六

(神武)
管仲死す

九八頃

(綏靖)
釋迦生る

一〇九

(綏靖)
孔子生る

一七八

(懿德)
釋迦入滅す

一八二

(懿德)
孔子死す

二八九頃

(孝安)
孟子生る

三二八

(孝安)
蘇秦六國を合従す

三五〇

(孝安)
張儀の連衡策成る

三七二

(孝靈)
孟子死す

三九〇頃

(孝靈)
アショカ王の即位

四〇五

(孝靈)
周の滅亡

四一五

(孝靈)
秦王政立つ

四二九頃

(孝靈)
アショカ王死す

四四〇

(孝靈)
秦の一統

四四〇

(孝靈)
始皇帝郡縣の制をしく

四四六

(孝靈)
匈奴征伐

四四七

(孝元)
長城を築き南越を平ぐ

四四八

(孝元)
始皇帝書を焚く

四四九

(孝元)
諸生を坑殺す

四五二

(孝元)
始皇帝死す

四五五

(孝元)
項籍劉邦兵を起す

四五九

(孝元)
秦亡ぶ

秦

440—455

上

1680
2587
4219

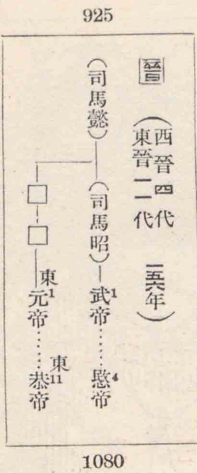
古		上							
國三	漢東	漢西	秦						
880—940	685—880	459—668	440—455						
八八〇 (應神) 八八一 (應神) 八八九 (應神) 九二五 (應神) 九四〇 (應神)	八八〇 (應神) 八六八 (應神) 八二六 (成務) 七八〇 (景行) 七五一 (景行) 七四九 (景行) 七三三 (景行) 七二七 (垂仁) 六八五 (垂仁)	六六八 (垂仁) 六四三 (垂仁) 六二四 (崇神) 六〇四 (崇神) 六〇一 (崇神) 五五三 (開化) 五四〇 (開化) 五二三 (開化) 五〇七 (開化) 四八一 (孝元) 四四七 (孝元) 四四八 (孝元) 四四九 (孝元) 四五一 (孝元) 四五二 (孝元) 四五五 (孝元)	四四〇 (孝靈) 四四六 (孝靈) 四四七 (孝元) 四四八 (孝元) 四四九 (孝元) 四五二 (孝元) 四五五 (孝元)	前460頃—405 國 戰 秋 春	前1100頃—前460頃 前 前 前 四六〇頃 二一〇 二二五 一六 九八頃 一〇九 一七八 一八二 二八九頃 三二八 三五〇 三七二 三九〇頃 四〇五 四一五 四二九頃 四四〇	前1540頃—前1100頃 前 前 一五四〇頃 一〇〇頃	前1600頃 前 前 一六〇〇頃 一五四〇頃	前1680頃 前 前 一六八〇頃 一六〇〇頃	年代 (天皇) 重なる事蹟
曹丕魏國を建て皇帝と稱す 蜀漢の劉備皇帝と稱す 吳の孫權帝と稱す 司馬炎魏の位を奪ひて帝となる 晉、吳を滅ぼして天下を一統す	劉秀帝位に即く 明帝の時大月氏より佛教傳來 明帝北匈奴を伐つ 和帝北匈奴を破る 和帝班超を西域都護となす 安帝の時大月氏のカニシカ王出づ 桓帝の時大秦國との交通開く 獻帝の時赤壁の戰 東漢亡ぶ	項籍亡ぶ。劉邦帝位に即く 惠帝の時衛滿朝鮮王となる 諸呂亂を謀りて誅せらる 景帝吳楚七國の亂を平ぐ 武帝の時張騫西域に使す 武帝匈奴を伐つ 武帝朝鮮を滅ぼす 宣帝西域都護を置く 宣帝の時新羅建國 元帝の時高句麗建國 成帝の時百濟建國 王莽の篡立	始皇帝郡縣の制をしく 匈奴征伐 長城を築き南越を平ぐ 始皇帝書を焚く 諸生を坑殺す 始皇帝死す 項籍劉邦兵を起す 秦亡ぶ	始皇帝郡縣の制をしく 匈奴征伐 長城を築き南越を平ぐ 始皇帝書を焚く 諸生を坑殺す 始皇帝死す 項籍劉邦兵を起す 秦亡ぶ	武王の即位 周室の東遷 齊の桓公立つ 管仲死す 管仲死す 釋迦生る 孔子生る 釋迦入滅す 孔子死す 孟子生る 蘇秦六國を合従す 張儀の連衡策成る 孟子死す アシヨカ王の即位 秦王政立つ 周の滅亡 秦王政立つ アシヨカ王死す 秦の一統	湯の即位 殷の滅亡。箕子朝鮮王となる	禹の即位 夏の滅亡	舜の即位 堯の即位	重なる事蹟

第二篇 中古

第一章 晋 南北朝 隋の統一

晋の形勢

晋の武帝は、魏の帝室が孤立して、遂に臣下のために奪はれて、ほろびたのにかんがみ、大いに一族のものを各地に封じて、帝室のたすけとしようとした。しかるに、この頃、しきりに清談（空理風）が流行して、浮世ウキヨをよそに遊びくらすものが多く、人人、實務ジツムをいやしみ、眞に國家・民人を思ふものは、甚だまれであるのに、一族の諸王は、武帝の豫期ヨキに反して、いたづらに權力を争ひ、こもごも兵を擧げて、骨肉相食ハむみにくき大内亂をひき起した。かくして、晋室が甚しく衰亂す



晋の形勢

武帝(司馬懿)

封建制度

人回(司馬懿)

趙長沙

晋の封建

清談の流行

清談の流行

佛(司馬懿)

竹林賢人

阮籍

八王の亂

八王の亂

東晋

東晋

異族の蜂起

晋の滅亡

東晋

五胡十六國の亂

秦の強大

肥水の戰

前三年都を難波に遷す

東晋元帝

司馬睿

建康(建業)都

江北の地

五胡十六國

苻堅

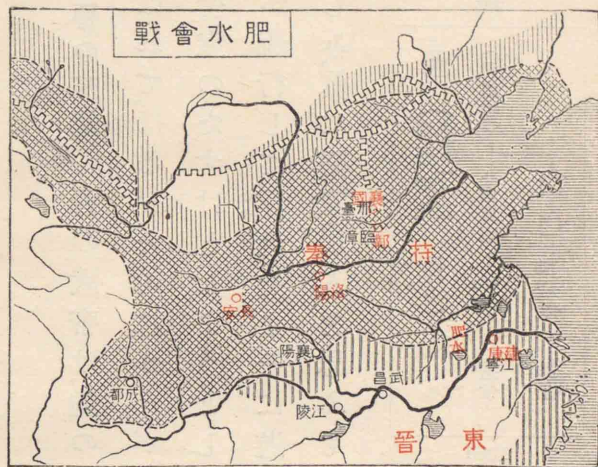
肥水の戰

苻堅

東晋

謝石

胡(異族の蜂起)



ると、漢以來内地に雜居してゐた異族が、これに乗じて、一時に蜂起し、九七六年〔仁徳天皇〕、遂に晋をほろぼした。そこで、晋の一族司馬睿は、その翌年、建康〔建業〕に於て帝位にのぼり、わづかに江南の地をたもつて、東晋第一代の元帝となつた。

江北の形勢と東晋の衰亡

東晋は、つづいて起つた内争に苦しんで、力を江北の恢復に注ぐひまがなかつた。その間に、江北の地は、異族紛争のちまたとなり、多くの國國が、めまぐるしく興亡した。その中で、一たび江北を一統した秦主苻堅〔族〕は、一〇四三年〔仁徳天皇〕、勢にまかせて東晋を伐ち、かへつて肥水〔縣安徽省壽縣の東〕

江北の分裂
後魏の強大
東晋の衰亡

劉裕

南北朝の分立

南朝

宋武帝(裕)

北朝

太武帝

に大敗した。それで、秦の威勢は、たちまち地におちて、諸種族、みなこれにそむき、江北は、また四分五裂して、麻の如くにみだれたが、やがて後魏〔族〕が強大になつて、嶄然、頭角をあらはして來た。また東晋は、肥水の戰には勝つたものの、その後とても、國勢が振はず、一〇八〇年〔允恭天皇〕に至り、その將劉裕に奪はれてほろびた。

◆肥水の戰

この戰は實に支那南北兩民族の運命を決した大戰であつた。はじめ苻堅が歩兵六十餘萬騎兵二十七萬の大軍をひきゐるて出發しようとした時、東晋の北には揚子江の天嶮があるといつて、その南征を諫めとどめたものがあつた。すると苻堅は、わが大兵を以てすれば鞭を江に投げこんだだけでも、その流を斷ちきることが出来る」と豪語し、進んで肥水に迫つた。東晋は、これを聞いて、上下ともにふるひおそれたが、沈著でものに動ぜぬ宰相謝安は、一族の謝石をえらんで征討大都督に、またその甥謝玄を前鋒都督に命じ、八萬の衆を督して、秦軍をふせがせた。謝玄は、肥水をさしはさんで、秦軍と對陣し、やがて軍使を送つて、秦軍すこしく退却すれば、わが兵は、川を渡つて、花花しく決戰するであらうと申しこませた。苻堅は、敵軍の半ば渡つたころあひを

南北朝の文化の相違

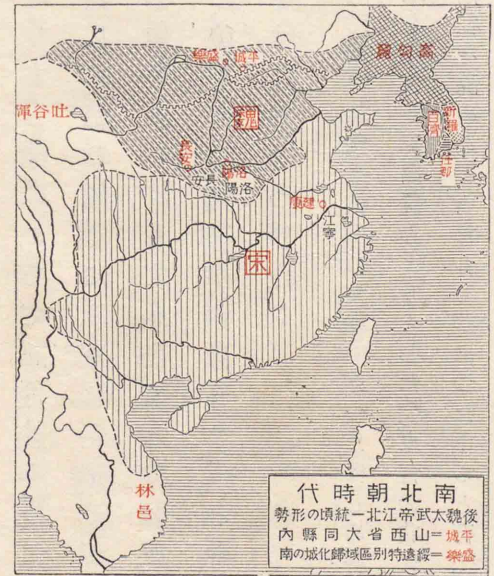
南北朝の文化の相違
南北朝の文化の相違

女子用 新編東洋史

五〇

見てこれに打撃を與へてやらうとおもひ謝玄の請をいれ、兵をさしまねいて退かせた。その命令が徹底しなかつたので、後軍は、何のために退却するかを了解せずただ混雑しながら、どやどやと退却した。この時晉人で捕虜となつて秦軍の中に入つたものが、大音聲に「秦軍大敗」とよばはつた浮足になつた秦軍は、これを信じて、全軍總崩れとなつた。謝玄は、これに乗じて、川を渡り遮二無二追撃した。潰走する秦兵は、われがちに先を争ひ、互に踏みにじつて死するものが、野をおほひ、川をふさぎ、命からがら逃げゆくのものは、風聲鶴唳をも晉兵の至ると思ひ、晝夜息はずにけにけにけて、飢寒に死するものが、十の中八九に及び、符堅みづからも流矢にあたり、からうじてのがれかへることを得た。

南北朝の分立 劉裕が帝位に即いて、宋の武帝となつてから、後四年に、後魏では太武帝が立



南北朝時勢
後魏 北魏 南魏 西魏 東魏 北齊 北周 南齊 南梁 南陳 南朝 北朝

宋

後魏の江北一統

南北朝

南北朝文化の異同

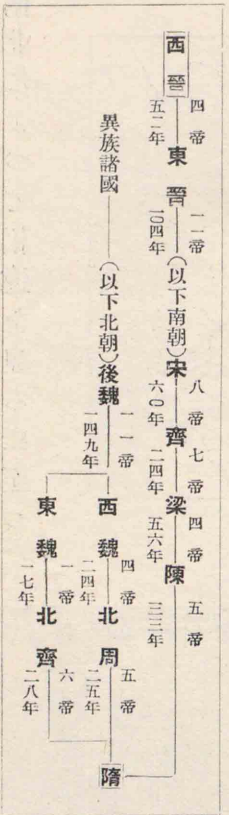
ち、遂に江北を一統して、宋に對した。これから、およそ百五十年の間、支那は、南北兩朝對立の世となつて、雙方のおのの數朝の興亡がある。兩朝には、ひとしく佛教が盛んに行はれたが、學術や風俗は、必ずしも一樣でなく、南方は、浮華柔弱に流れて、文學を重んじ、



雲崗の石佛

雲崗は、山西省大同縣内にあつて、全山二十餘の大窟、みな多数の石佛を有してゐるので有名である。これらの石佛は、主として後魏時代の製作にかかり、その様式は、北印度ガンダラの影響を受けたものだといはれてゐる。

北方は、質實剛健の風が多く、
て、儒學を尙び、
言語の如きも、



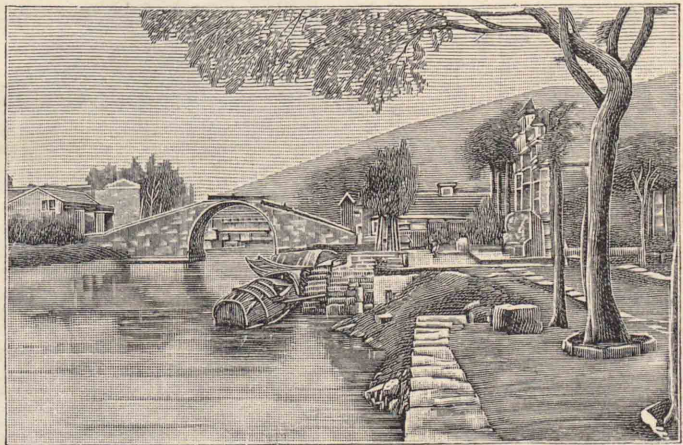
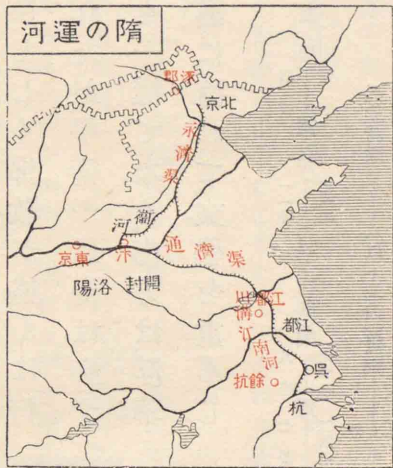
第二篇 第一章 晉 南北朝 隋の統一

五一

隋ノ統一
 隋文帝
 勤儉

女子用 新編東洋史

南北によつて相違を見るに至つた。



河運るけ於に(州蘇)縣吳

前年物部
 守屋殺さ
 る

文帝の一統
 とその政治

隋の統一

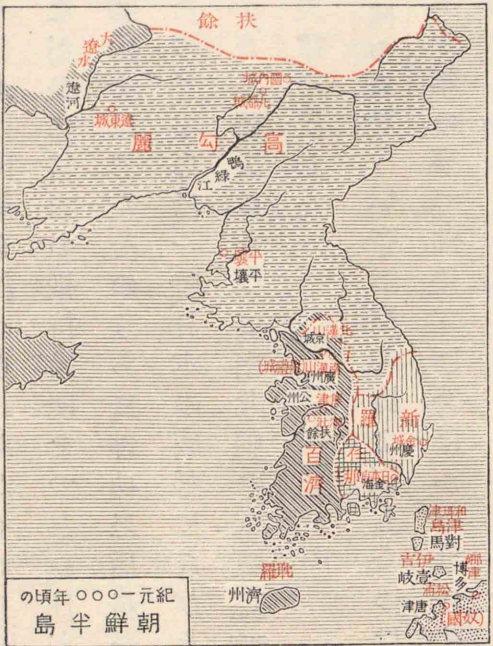
かくて、ながく南北に對立した二大勢力は、一二四九年〔崇峻天皇の御代〕隋の文帝によつて、はじめて統一された。帝は、漢族の出身で、心を政治にとどめ、勤儉をたふとび、人民を愛養し、よくもろもろの制度を

この頃聖
 徳太子小
 野妹子を
 隋に遣は
 す

煬帝の豪華

外征

三國の建國
 と任那



ととのへた。しかるに、その子煬帝は、全くこれに反して、奢侈豪華を好み、壯麗な宮殿や、大規模の庭園などをいとなみ、また大運河を開いて、巡遊の船をうかべなどし、少しも民の困苦をかへりみなかつた。

朝鮮半島の變遷

煬帝は、またしきりに兵を動かして、朝鮮半島その他に遠征をころみた。朝鮮半島には、西漢の時、新羅、高句麗、百濟の三國が、相ついで建國し、別に弁韓の地に加羅が起つて、わが日本の保護國とな

日本と三國及び任那との關係

任那の滅亡

高句麗遠征の失敗

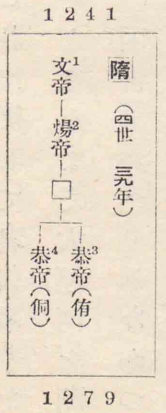
隋國分崩

隋の滅亡

後四年聖德太子薨

り、任那の國號を授けられた。かくて、三國は、或は結び、或ははなれて、たがひに勢力の維持・發展をつとめ、日本とも、またそれぞれ複雑な關係を生じた。そのうちに、神功皇后が一舉して新羅を征服せられたので、半島は、一時、日本の威勢になびき服したが、その後、新羅が、だんだん強大になつて、南北朝の末頃〔欽明天皇〕に至り、遂に任那を攻めほろぼした。

隋の末路 煬帝が高句麗を征したのは、任那のほろびた後、およそ五十年の事で、前後三回、おほかたは皆失敗にをはり、かへつて國力をつからせ、且、大いに威光をおとした。かねがね重税になやみ、苦役に泣いてゐた人民は、ここぞとおもつて、所在に蜂起し、李淵以下豪傑の士も、また兵を各地に起して、隋室をくつがへさうとした。かくて、一二七八年〔推古天皇〕に至り、李淵は、遂に隋帝のゆづ



りをうけて、唐の高祖となり、都を長安にさだめた。

第二章 唐の興亡

唐の一統 唐の高祖の即位した時

には、十數人の群雄が、なほ諸方にたてこもつてゐた。高祖は、次子世民とはかり、しだいにこれをうち平げて、

天下を一統し、一二八六年〔推古天皇の御代、聖〕遂に位を世民にゆづつた。これから、支那は、古今にまれなる英主太宗をいただくこととなつた。

太宗高祖の治

太宗は、多くの名臣良將を用ひて、もろもろの制度を改良し、よく文武の政をととのへて、いはゆる貞觀〔當時の〕の治をなした。太宗が死んで、その子高祖の世となつても、前代文武の名臣



高祖

この年蘇我蝦夷大臣となる

この頃大化の改新あり

世民の功

太宗の即位

貞觀の治

高祖の治

が、なほ多く生きのこつてゐて、よくこれをたすけたから、國內は、無事太平であつた。

◆太宗の皇后 太宗の皇后長孫氏は、婦徳にすぐれ學識も高く、いたく帝に敬愛せられた。しかも、つつしみを忘れぬ后は、政治むきのことに喩をいれるやうなことは、すこしもなかつた。ある日、太宗が、ただならぬ氣色で政廳からかへられたので、后は、しづかに、そのわけをうかがはれると、ゆるしがたきは魏徴上をあなごる罪にくみてもあまりがあるといはれた。これは、太宗が、皇女の婚儀に、豪華を極めようとせられたのに對し、魏徴が侃侃諤諤の辯をふるつて、陛下よ、さきには姉君のために、五萬金を費したまうたに、今、姫君のために十萬金を用ひらるるは、愛におほれて、倫をみだすに似たりとはばかる所なく諫めたので、太宗は、その道理には服しながらも、逆鱗の情、おさへがたく、かくは憤激の色を浮べられたのであつた。委細をきかれた后は、黙して退かれ、やがて服をあらためて禮装にし、太宗の前に出て、うやうやしく敬禮し、つつしんで陛下にお祝ひ申し上げます。魏徴の申すことは、まことに道理にかなひ、殊に死を覺悟して諫めたてまつつたのは、實以て得がたい忠臣と存じます。これ皆陛下の聖徳の致す所、唐の御代は、萬萬歳で御座いますと申し上げた。太宗も、はじめて自己の非をさとり、あつく后に謝して、重く魏徴を用ひられた。

朝鮮半島の形勢

太宗の高句麗親征

百濟高句麗滅亡

新羅の半島一統

朝鮮半島に於ける唐の勢力



太宗

この頃、朝鮮半島では、高句麗と百濟と、謀を通じて、新羅をはかつたので、新羅は、これをおそれて、援を唐に請うた。太宗は、その請をきき、いれ、みづから大軍をひきゐて、高句麗を征し、志を得ずして、ひきかへした。さて、この失敗の後をうけた高宗は、新羅をたすけて、まづ百濟を攻め、わが日本の援軍に克つて、百濟をほろぼし、ついで、さらに高句麗を攻め取り、その都であつた平壤に安東都護府を置いて、もとの百濟、高句麗の地を治めさせた。しかるに、やがて、新羅が、だんだん勢を得て、ほぼ半島を一統した。ただ表面のみ、唐に對して、臣と稱したから、唐では、安東都護府を平壤から遼東にうつすのやむなきに至つ

天智天皇の御代

諸外國の服従

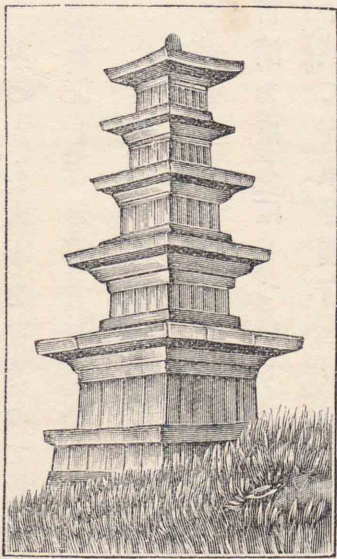
た。

唐の國威

この外、太宗・高宗二帝の時には、相ついで東西突厥をほろぼし、吐蕃を破り、印度に威を示し、また西域諸國を従へて、大いに國威を外にかがやかしたの

東西の交通

で、南海諸國も、多く貢を唐にささげるやうになつた。かくて、唐は、空前の大帝國となつたが、それにつれて、東西の交通が、おのづから發達し、後には、西アジアの大國大食は、西アジアの大國大食の人も、印度洋をわたつて、支那の南海に來航し、盛んに貿易をなしたのであつた。



唐が百濟を平たげた碑

朝鮮忠清南道扶餘縣にある。將軍蘇定方の功を録したものである。

突厥

突厥は、アルタイ山南に起つた匈奴の別種で、南北朝の末頃から、しだいに勢

を増し、遂に東遼東から西、カスピ海邊に至るまでの地を領するに至つた。後、ほどなく、突厥は東西に分裂し、その東突厥が、しばしば南侵して、隋を苦しめたので、煬帝は李淵に命じて、これをふせがせたが、淵は利を失ひ、かへつて、その援をかりて、隋を奪つた。そのため突厥は、とかくに唐を輕んじ、しきりにこれを侵したのであつたが、東突厥は太宗にうちほろぼされ、西突厥は、ついで高宗に平けられた。

女禍

高宗の皇后武氏は、權略漢の呂后にもすぎ、高宗の死後、二

帝を廢立し、

遂にみづか

ら即位して、

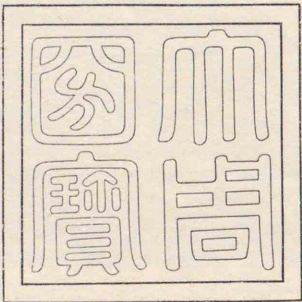
聖神皇帝と

稱し、國號を

周とあらた

めた。武後の死後、ほどなく、また章

后の禍があつたが、唐室、ま



武后の周大國寶

持統天皇の御代

武氏唐を奪

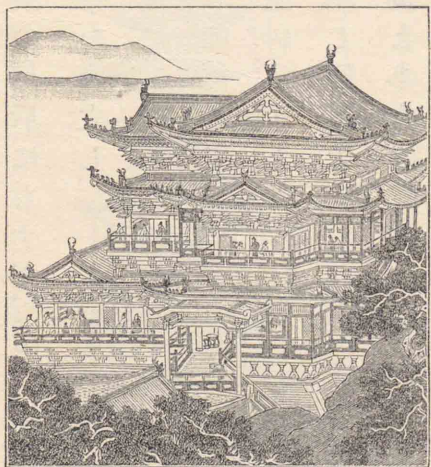
唐室の禍と復興



武后

たおこり、ついで玄宗の世となつた。

◆武后に就いて「漢には呂后の亂があり、唐には武后の亂があり、共に女政治家として傑出する。高祖の粗豪に較べて、太宗が多智多藝のやうに、呂后に對して、或る點で武后が智術ありさうに見える。太宗が第一の英主ならば、武后が第一の女政治家であらう。内行が治まらず、世間に非難されながら、豪傑の心を得ることが頗る巧みで、婁師徳とか、狄仁傑とか、當時第一流の人物と稱せられるのも、旨く丸められた意に逆らふのは何時の間にか殺して仕舞ひ、活殺頗る自由である。」(三宅雄二郎氏著「東英雄一夕話」)



つ一の殿宮たて建にめたの妃貴楊が宗玄

元正・聖武二天皇の頃で奈良文化の最盛期

開元の治
節度使

玄宗の世 玄宗は、即位のはじめ、賢臣を用ひて、政治にはげみ、よく天下を治めて、文學技藝も、大いに進み、いはゆる開元(當時の)の治をなした。帝は、また邊境の要地に節度使(わが鎮守府將軍兼)を置き、兵權

安祿山の叛

明年惠美押勝叛す

大亂平定

節度使宦官の横暴
朝臣の黨争

と民政とをこれにゆだねて、高宗の末年以來、ゆるんでゐた邊備にあたらせ、再び國威を外にのばした。かくの如く、帝の初政は、内外ともに見るべきものがあつたが、後に楊貴妃の愛におぼれて、政をおこたり、一四一五年(孝謙天皇の御代)遂に北邊の節度使安祿山の叛を招いた。遊にふけつてゐた朝廷は、これをどうすることも出來ず、顏真卿と顏杲卿とがふせいでも、ふせぎとめられず、叛軍は、疾風の枯葉を吹きまくるやうな勢で、都をめぐけて、猛進したので、帝も、一時、都をのがれ、やがて、位を太子にゆづつた。後、ほどなく、祿山は、その子に殺され、賊軍内に紛争が起つて、だんだん勢が衰へ、九年にわたつた大亂も、一四二三年(淳仁天皇の御代)に平いだ。

唐の末路

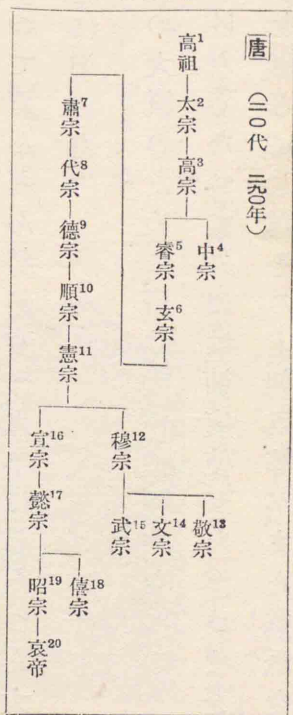
この多年の大亂のために、唐は、大いに國力をつひやし、これから、國勢がふるはなくなつて、外には、節度使がわがままを極め、内には、宦官が政權を専らにした。その上、朝臣等が、また黨派をた

前六年營
原道眞左
遷

唐の滅亡

てて相争つたので、
國政はいよいよみ
だれて、唐室は、ます
ます衰へ、一五六七年
〔醍醐天皇〕、遂に朱全
忠に奪はれてほろびた。

1278



第三章 唐の制度・文物 宗教

官制

唐の諸制度は、高祖・太宗・高宗三代の間に、ほぼ出来あがり、ただに支那後世の模範となつたのみならず、わが日本の如きも、かつては國使及び留學生を派遣して、これを學ばせたのであつた。まづ官制は、中央政府に尙書中書門下の三省を設け、尙書省の下に吏部・戸部・禮部・兵部・刑部・工部の六部を置いて、それぞれ政務にあたら

中央官制

三省	尙書省	中書省	門下省
長官	令	令	侍中
職掌	既に確定した詔勅を天下に施行す	天子の詔勅を宣奉す	詔勅を審査す
六部	吏部	戸部	禮部
長官	尙書	尙書	尙書
職掌	官吏の進退を掌る	戸口の調査と租税の徴收とを掌る	禮儀及び教育を掌る
	兵部	刑部	工部
	尙書	尙書	尙書
	軍事を掌る	刑律を掌る	工藝を掌る

地方官制

巡察使を任じて、地方政治の監督・目付に當らせた。

田制及び税法

唐では、はじめ土地公有の主義をとり、毎年、國民の年齢をしらべ、十八歳以上の男子には、田百畝を給し、内二十畝を永業田として、その子孫に傳へさせ、のこり八十畝を一代かぎりの口分田とした。また三種の税法を定め、百畝の田から、毎年、粟二斛を出すのを租とし、一年に二十日間、丁男が國家のために力役に就くのを

永業田及び口分田

租庸

調

庸とし、またその郷土の産出する所にしたがつて、絹綾、純麻布などの類を出すのを調とした。

刑罰

刑罰は、罪の輕重によつて、笞杖、徒流、死の内、いづれかをあてた。この笞杖、徒流、死が、いはゆる

五刑である。

五刑	等					級
	笞	杖	徒	流	死	
絞	十	六十	一年	二千里	斬	
	二十	七十	一年半	二千五百里		
斬	三十	八十	二年	三年		
	四十	九十	二年半			
	五十	一百	三年			

五刑

學校

官吏登庸法

儒學

學制

唐の學制は、頗るよく備はつて、都に國子學、大學その他の學校を設け、地方に府學、州學、縣學等を置き、主として經學を授けた。すべてそれらの學校を卒業したものを生徒といひ、地方に於て檢定をうけ、それに合格したものを貢舉と稱した。生徒及び貢舉は、毎年、尙書省でこれを試験し、合格者をば官吏に用ひた。

儒學と文學

儒學は、漢以來、主として字句の解釋を事とし、唐の世

詩文

になつても、別に新見地を開くに至らなかつた。しかし、詩文は、大いに發達、進歩し、玄宗の世には、李白太白、杜甫子美の二大詩星があらはれ、その數十年の後には、韓愈退之、柳宗元子厚

歐陽詢筆蹟

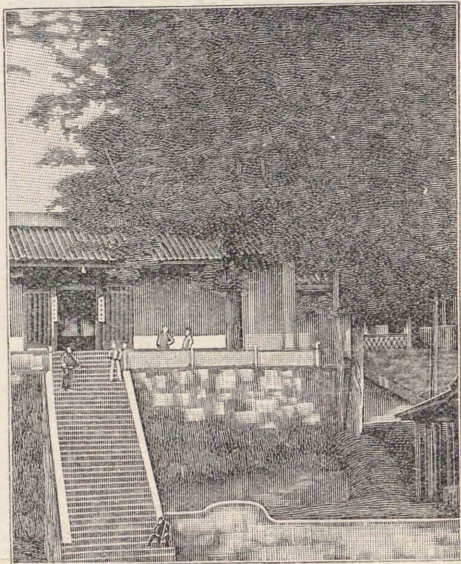
珠璧交暎

褚遂良筆蹟

聖丹青景

顏真卿筆蹟

清流激湍



韓愈の廟

廣東省潮安縣にある。

書畫

のやうな大文章家も出た。父子以來、皆その風を學んだのであつたが、唐に至つて、これを官吏登庸の一

書の大家

繪畫の大家

諸宗教傳來

資格と定めたので、書道は、ますます盛んにおこり、歐陽詢褚遂良顏眞卿等の大家が、續續あらはれた。また繪畫は、六朝〔吳・東晉・宋・齊・梁・陳〕以來、佛教の盛んなるにつれて、大いにすすみ、唐代には、山水畫の大家李思訓、佛畫の名人吳道玄〔子吳道子〕などが出た。また南北朝以來、盛んに行はれた佛像の彫刻も、唐に至つて、いちじるしく進み、わが天平時代の佛像製作の上で大影響を與へてゐる。

宗教

これよりさき、南

北朝の時、ペルシヤの祆教〔拜火教〕が、はやくも支那に傳はつたが、唐に至つて、ますます多くその徒がは

いつて來た。その頃、景教〔キリスト教の一派〕も、また西方から傳はり、後には回

玄奘法師

王羲之が書いた字をあつめたもの。



井 玄



釋迦 傳吳道玄筆



景 行 教 流 中 國 碑

この圖は、京都東福寺の所藏で、吳道玄の筆と傳へてゐるものである。吳道玄は、唐の玄宗時代の人で、人物・鬼神・鳥獸・草木等、何でも得意であつたが、特に佛畫に妙を得てゐた。

この碑は、明末、長安の西郊にある金勝寺の庭内から發掘したもので、その建設者は、長安大秦寺の僧景淨である。碑文には、唐の太宗の貞觀九年(皇紀一二九五年)に、景教がはじめて長安に將來せられてから、この碑の建設された唐の徳宗の建中二年(皇紀一四四一年)に至る約百五十年間に於ける景教流行の有様をしるしてある。大秦寺は、太宗の時に建てられて、波斯寺といつたのを、玄宗の時、大秦寺と改めたのである。また金勝寺は、大秦寺の廢滅した後、その空地に移轉したものである。

教〔アラビヤ人マホメ〕も傳來した。また六朝時代に隆盛を極めた佛教は、唐代に至り、名僧玄奘ゲンジャウの力によつて、いよいよその根柢コンテイをかためた。玄奘は、多年、印度を歴遊し、歸朝の後、太宗、高宗の尊信を得つつ、そのもたらしかへつた多くの經論を翻譯し、支那佛教史に一新時期を劃クワクした。

玄奘と佛教

後梁

第四章 五代 宋及び遼

五代	始	祖	國	都	代數	年數
後梁	太祖 朱全忠	大梁	河南開封縣	二	七	
後唐	莊宗 李存勗	洛陽		四	四	
後晉	高祖 石敬瑭	大梁		二	二	
後漢	高祖 劉知遠	大梁		二	四	
後周	太祖 郭威	大梁		三	二	

五代の形勢

朱全忠は、唐の帝位を奪つて、後梁リヤウの太祖となつたが、群雄がなほ諸方に割據して、帝或は王と稱してゐたから、その

後唐・後晉
後漢・後周

五代の紛亂

勢力の及んだ所は、ただ支那本部の一部にとどまり、天下は、まだ全く統一したわけではなかつた。かかる形勢の間に、後梁は、たちまち亡びて、後唐後晉後漢後周の四朝が、走馬燈のやうに、つぎからつぎへと興亡した。この後梁以下の五朝が、いはゆる五代で、前後通じて、わづかに五十餘年である。その間、武人の跋扈が、極點に達し、天子の廢立も、その手に歸し、紛亂争奪のはげしいこと、前世後世、その比なく、文化はおとろへ、道德節義などは、地をはらつて空しくなつた。

宋の太祖の
文治



太祖

宋の太祖 かくも紛亂を極めつつ、一六二〇年〔村上天皇の御代〕になると、後周の武將趙匡胤が、將士に推されて、帝位に即いた。これが宋の太祖である。太祖は、都を汴〔南省開封縣〕にさだめ、まづ天下の兵亂を絶ち、國家を長久な

太宗の一統

らしめるために、主として武人跋扈の弊風をあらためることをつとめ、専ら力を民治、財政につくした。これから、しだいに中央集權の政が行はれて、國內、太平を保ち、天下の民は、はじめて肩を休めることが出來た。

宋の盛衰

太祖の死後、弟太宗が立ち、ほぼ支那を一統したが、宋は、太祖以來、内治には成功したものの、いたく武人をおさへた結果、武

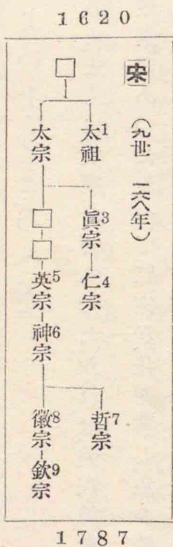
武力不振

神宗の新法
施行



神宗

力が弱くて振はなかつたから、つねに邊外の異族に壓迫された。太宗の玄孫神宗に至り、ふかくこれを憂へ、富國強兵の實を擧げるために、王安石を用ひて、諸種の新法



司馬光等の
反對
新法舊法兩
黨の争



司馬光

を行ひ、かへつて、司馬光以下諸名士の反對を招いた。これから、數十年の間、新法舊法兩派が、はげしく争つて、政府に立つものは、轉轉としてたびたびかはり、施政の方針も、全く一貫せず、民ますます苦しんで、國、いよいよおとろへた。

◇王安石と新法 王安石は、政治家であるとともに、文學者であつた。かれは、美衣美食を好まず、みづから奉ずることが、極めて儉素であつた。かつて、仁宗が、花を賞し、魚を釣る宴をもよほした時、王安石も、これに待し、あやまつて釣の餌を食した。かれは、直にそれと氣づいたけれども、知らぬ顔して、ことごとくその餌を食してしまつた。仁宗は、その非を遂ぐるのを見て、かれをにくんだといふことである。この話は、



王安石

安石の性行の一面をよくあらはしてゐる。その

新法は、必ずしもわるいもののみとはかぎらない。實施の方法だに、よろしきを得れば、相當の成績を擧げることが出来たであらうのにかれは、その人となりや、やや陰險強情で、徳望に乏しかつたから、しぜん多くの政敵を作り、折角の事業も、これを成就することが出来なかつた。左にかかてあるのが、新法の主なものである。

青苗法 毎年、春、官から資金を農民にかし、秋收穫の際、二割の利子をそへて、これを返納させる法。

均輸法 租税を納めるのに、その地方の産物を以てすることを許し、主税官は、これを便宜の地方にたくはへ置き、その産物の少くして高價な地方に送り、これを賣つて、利を官に收める法。

市易法 京都に市易務といふ官を置き、市場で賣れぬ品物を安價を以て官に買ひ上げ、もしくは他の官物と交換し、または資金を商人にかして、利を收める法。

保甲法 十家を保、五十家を大保、五百家を都保とし、おのおのこれをすべる長を置き、部下の保丁をして、それぞれ弓箭をたくはへ、武藝を講習させる法。

保馬法 馬を養ふことをねがふ保丁には、官から馬一匹或は二匹、もしくははその代金を給し、毎年、その肥瘠死病をしらべて、これを補償させる法。

契丹の開化

太祖の業

遼の勃興 これよりさき、北方に遼といふ強國がおこつた。この國をたてた契丹〔今の蒙古〕は、もと潢河〔今の内モンゴルのシラムレン河〕のほとりに住んでゐた未開野蠻の種族で、はじめは、文字もなく、貨幣の制もなかつた。しかるに、五代のはじめに、耶律阿保機といふものが、その諸部を一統し、一五七六年〔醍醐天皇の醍醐代〕帝位に即き、太祖となるに及んで、東鄰の渤海國、その他の近鄰諸族を従へて、大いに領土をひろめ、またしきりに支那の文化をとり入れ、且、契丹文字を製しなどして、その文化をも進めた。かくして、だんだん盛んになつた契丹は、太祖の子太宗に至つて、國勢が一層加はり、遂に後晉をほろぼし、國號をたてて、遼と稱した。

◇太祖の后 太祖の后述律氏は、人となり、勇決果斷で、權略に富み、男まさりの婦人で



契丹丹長牌

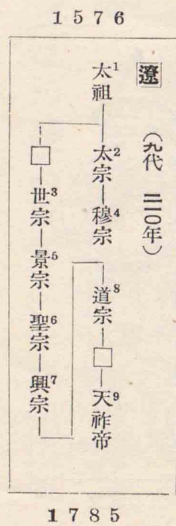
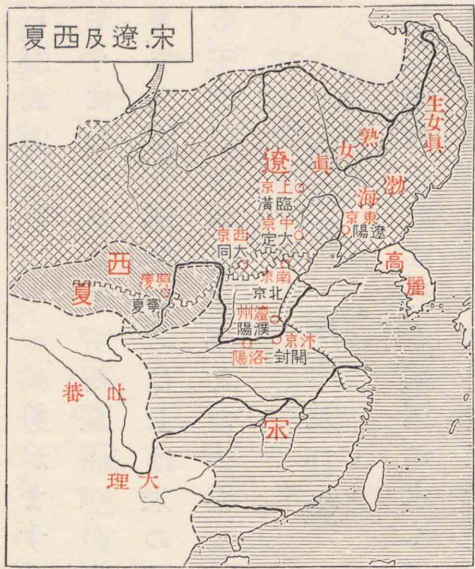
契丹銀牌

銀牌は、兵馬發給等の緊急事件ある時、使者がこれを頸にかけて、馬をさはす。牌中の字は、契丹文字の駱である。また長牌は、物資發給等の時、使者がこれを腰におびて、馬を走らす。牌中の字は、契丹文字の救走馬である。

あつた。太祖が契丹の諸部を一統した時も、またその諸方に兵を用ひた時も、つねに相談相手となつたものは后であつた。かくして、契丹の國基を定めることに大功のあつた后は、太祖の死後、丈夫も及ばぬ勇斷を以て、諸將をおそれ服させ、幼帝太宗を助けて、國勢をますます盛んならしめた。

遼の全盛と西夏の建國 遼は、太宗

の後、三代をへて、聖宗〔宋の太宗・眞の



世になると、その國が、ますます榮えて、しきりに宋を侵し、一六〇四年〔宋の眞宗の世〕、遂に多額の歳幣を約束させ、またさきに新羅に代つて、朝鮮半島を一統した高麗を攻めて、臣と稱させた。これで、遼の版圖は、東、日本海か

この頃藤原道長權を専らにす

聖宗の南伐
聖宗の東略
遼の大版圖

西夏

ら、西天山に及び、その威勢がますます宋を壓するやうになつた。この頃、西夏〔甘肅〕の李元昊〔チベット族の別種〕も、また帝と稱して、しばしば宋の西邊を侵したから、宋はいよいよ多事となつた。



幣貨の夏西

錢文は、西夏文字の大安寶錢で、上より右へ、右より下へ、下より左へ、左より上へ、西夏の年號である。

第五章 南宋及び金 宋の文化

女真起る

金の勃興

遼は、その盛運が永くはつづかず、宋とともにしだいに衰へた。たまたま滿洲松花江附近の

女真起る

女真〔また「阿骨打」といふ英雄があらはれ、兵を起して、遼の軍を破り、一七七五年〔宋の徽宗の時、鳥〕に、金の太祖となつて、しだいにその勢をたかめた。



俗風の眞女

國 アクダの建

擊 宋金の遼夾

金宋の交渉

この形勢を見てとつた宋の徽宗〔神宗の子〕は、金と約して、

遼の滅亡

年來の怨敵遼をはさみ撃つた。宋軍は、もろくも敗れたが、金軍は、大いに勝ち、ついで遼をほろぼした。この遼の滅亡は、宋にとつては、かへつて唇ほろびて齒寒しといふ結果になり、宋は、遂に金の大兵をかうむつた。徽宗は、戦はずして、位をその子にゆづり、膝を屈して、金と和したものの、和約履行の誠意を闕いたために、一七八七年〔崇徳天皇、また金軍に侵入せられ、徽宗父子及び皇后等、皆北方につれ去られてしまつた。〕

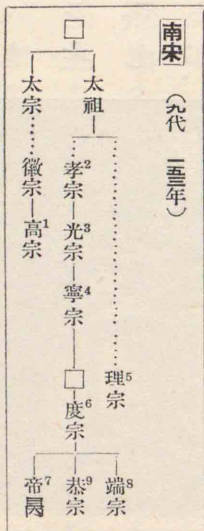
徽宗父子とらへらる

宋室の南渡

宋では、徽宗の子

高宗が位に即き、金の鋭鋒をさけて、しだいに南方にうつり、遂に都を臨安〔浙江省〕にさだめた。

1787



1939

南宋

高宗南にうつる

南宋和戦の議

當時、江北の地は、既におほかた金に占められ、宋の

岳飛等の主
戦論

領土は、いよいよちぢまつた。宋の忠臣岳飛等は、あくまでも、金と決



岳飛

は、秦檜の言に動かされ、不名譽の講和をなして、一時の安きを偷んだ。

戦すべきを主張したが、高宗

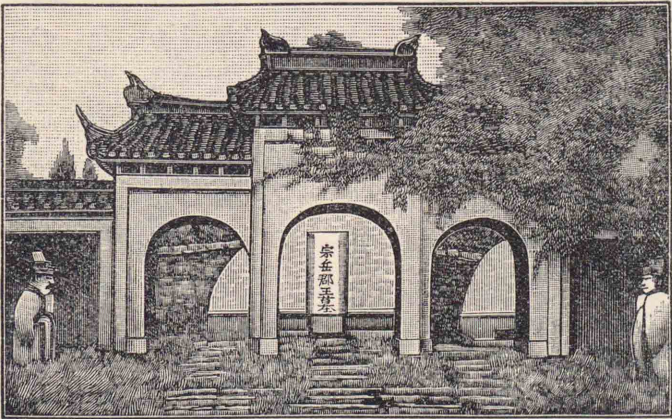
屈辱的講和



岳飛筆蹟

をたふとび、沈著寡言で、學につとめ、頗る兵法に

岳飛は、盡忠の士で、少年時代から、氣節



岳飛の廟

浙江省杭州にある。

南北間の平和

金の極盛

宋の衰微

同じ、且、腕力が強く、大小百戦、未だかつて一たびも敗れたことはない。金人は、皆飛をおそれ、山を撼すはやすけれど、岳家の軍を撼すは難しといつたといふことである。しかるに、秦檜は、飛を以て和を結ぶに害ありとなし、とらへて獄に下し、遂にこれを殺した。

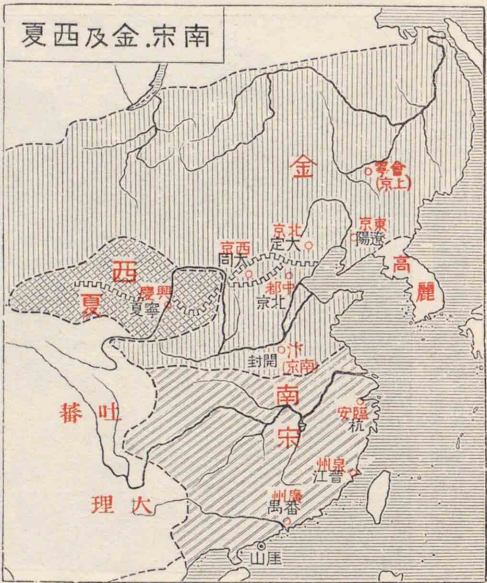
金の全盛

この後、ほどなく、

金にも宋にも、ともに明君が出て、兩國の間は、平和をたもち、しばらく事なきを得た。その間に、金は、東、高麗を威服し、西、西夏をなづけ、國運が、ますますさかえて、一時、東アジアの最大國となつた。

金宋の衰運

しかるに、金は、久しからずして、國勢が、かたむきはじめ、宋でも、奸臣が事を用ひ、朱熹以下の賢臣をしりぞけて、國政を



金の衰微

興 蒙古族の勃

みだし、やがて金を伐つて、大いに敗れた。金は、宋との戦には勝つたものの、また昔日の元氣がなく、日に月に衰へゆくのみであつた。この時に當つて、蒙古族が、新たに北方に勃興した。

存忠孝心

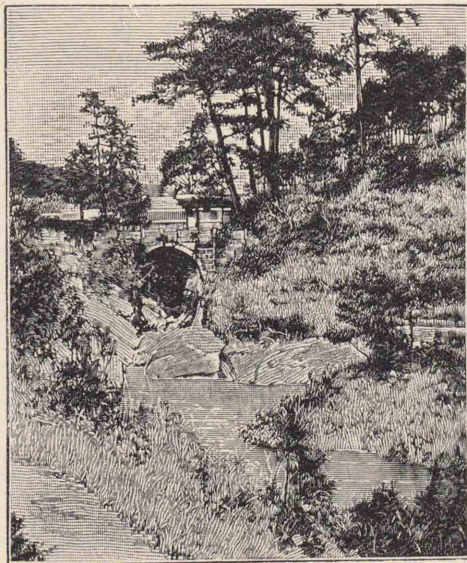
朱熹筆蹟



朱熹

宋代の佛教

宋の文化 佛教は、唐末以來、大いに衰へたが、宋の興るに及んで、太祖・太宗の保護により、各派



白鹿洞書院入口

白鹿洞は、江西省星子縣廬山の南麓にあり、朱子講學の地として有名である。白鹿洞書院の址は、今南昌高等農林學校の資料場となつてゐる。

朱熹と宋學

文章家

詩人

史學

書畫

東坡居士



蘇軾

ともに復興の運に向つた。中にも、最も盛んになつたのは、禪宗で、工藝美術はいふに及ばず、儒學の如きも、その影響をうけて、ふかく理論をきはめるやうになり、朱熹に至つて、いはゆる宋學を仕上げた。また文章は、五代の世に衰へたのを、宋のはじめに歐陽修が出て、古文を復興し、ついで蘇洵、蘇軾、王安石等の大家を出した。歐陽修と蘇軾とは、また非凡の詩才を有し、詩人

としても有名である。史學も、また大いに

發達し、司馬光の「資治通鑑」は、記事の正確と、文章の壯嚴

一時之譽

讀書保陰

なのとて名高い。また藝術、殊に書畫が、いちじるしく進歩し、蔡襄、黃庭堅は書を以

黃庭堅筆蹟

て、李龍眠は畫を以て、米芾は書畫かね善くするを以て、それぞれ世に知られてゐる。

◇司馬光と資治通鑑 司馬光は、字を君實といひ、學者であり、政治家であり、さうして、氣高い人格者であつた。英宗の勅をうけて、資治通鑑二百九十四卷を編し、前後十六年を費して、周の威烈王の二十三年(皇紀二五八年)から、後周の世宗の顯德六年(皇紀二六九年)に至るまで、一千三百六十二年間の治亂興亡の跡をのべた。

概 括

中古期は、晉が天下を一統した九四〇年頃から、南宋の中世頃に蒙古人の勃興した一八六〇年頃までの間で、わが第十五代應神天皇の御代から、第八十三代土御門天皇の御代に至る時代に當る。この期のはじめに、漢以來支那の内地に雜居してゐた異族は、晉の内亂及び人心のくづれたのに乘じて、各處に蜂起し、漢族たる晉を破つて、黃河の流域を占め、そこに國をたてたものが、前後およそ十餘の多きに及んでゐる。また晉は、江南にうつつて、揚子江の流域に國をなしたが、後遂に南北朝の世となつて、江南と江北とに二大國が分立し、雙方のおの天下の統一を欲して相争ひ、隋の起るに及んで、遂に一統された。



漢 筆 羅 龍 眠 李

この圖は、東京美術學校の所藏である。李龍眠は、名を公麟といひ、
佛像・山水・人物をよくゑがき、宋代第一の稱がある。

隋は、たちまち亡びて、唐の世となつたが、隋唐の時代は、漢族の最も隆盛を極めた時で、その文化が、四圍の諸民族に及んだと同時に、その勢力も、またアジャの大半に及んだのであつた。しかるに、五代五十餘年の間、天下が分裂して、不統一を極めたので、蠻族たる契丹の勃興を招いた。宋は、また天下を一統して、よく漢族の文化を進めたが、文弱の餘弊が甚しく、契丹をおそれ、西夏に苦しみ、ついで、また金に迫られ、遂に江南に遷都して、しだいしだいに衰亡の阪を下つた。

隋

1241-1279

- 二二七九 (推) 古 楊帝の高勾麗親征
- 二二七八 (推) 古 楊帝の高勾麗再征
- 二二七四 (推) 古 楊帝また高勾麗を征す
- 二二七三 (推) 古 隋亡ぶ
- 二二七八 (推) 古 李淵帝位に即いて唐の高祖となる
- 二二八九 (舒) 明 太宗の時支那印度に行く

年表

(二)

年代は皇紀に據る

時代王朝

年代 (天皇) 重なる事蹟

中

唐	隋	南朝	北朝	東晉	西晉
1278—1567	1241—1279	1099—1249		977—1080	925—976
<p>一五六七 (醜) 朱全忠帝位に即き後梁の太祖となる</p> <p>一四一五 (孝) 唐亡ぶ</p> <p>一三七三 (元) 安宗の時大祚榮渤海國を建つ</p> <p>一三五〇 (持) 武后帝位に即き國號を周と改む</p> <p>一三二八 (天) 高宗高句麗を滅ぼす</p> <p>一三二三 (天) 高宗百濟を滅ぼす</p> <p>一三一七 (齊) 高宗西突厥を討ち平ぐ</p> <p>一三一〇 (孝) 高宗の時大食來り通ず</p> <p>一三〇四 (皇) 太宗高句麗を征す</p> <p>一二九五 (舒) 太宗の時景教唐に入る</p> <p>一二九一 (舒) 太宗の時東突厥を滅ぼす</p> <p>一二八〇 (舒) 太宗の時玄奘印度に行く</p> <p>一二七八 (推) 李淵帝位に即いて唐の高祖となる</p>	<p>一二六七 (推) 煬帝の時日本の使節小野妹子來る</p> <p>一二七一 (推) 煬帝の高句麗親征</p> <p>一二七三 (推) 煬帝の高句麗再征</p> <p>一二七四 (推) 煬帝また高句麗を征す</p> <p>一二七九 (推) 隋亡ぶ</p>	<p>一二四九 (崇) 隋の文帝陳を滅ぼし南北始めて一統す</p> <p>一二四一 (敏) 楊堅、北周を奪ひて隋の文帝となる</p> <p>一二三七 (敏) 北周、北齊を滅ぼし江北を一統す</p> <p>一二三二 (敏) 新羅、任那の日本府を滅ぼす</p> <p>一二二七 (欽) 西魏亡び北周起る。梁亡び陳代る</p> <p>一一一〇 (欽) 東魏亡び北齊起る</p> <p>一一〇五 (安) 後魏東西に分裂す</p> <p>一一六二 (武) 齊亡び梁代る</p> <p>一一三九 (雄) 宋亡び齊代る</p> <p>一〇九九 (允) 後魏の太武帝江北を一統す</p>	<p>一〇八〇 (允) 劉裕東晉の位を奪ひて宋の武帝となる</p> <p>一〇四三 (仁) 肥水の戰</p> <p>九七七 (仁) 東晉の元帝位に即く</p> <p>九七六 (仁) 匈奴晉を滅ぼす</p> <p>九二五 (應) 司馬炎帝位に即き晉の武帝となる</p>		

年表

(二)

年代は皇紀に據る

古		中				
宋南	宋北	五代	唐			
1787-1939	1620-1787	1567-1620	1278-1567			
宋南	宋北	五代	唐			
1787-1939	1620-1787	1567-1620	1278-1567			
一七八七 (崇德) 高宗即位。宋室南渡 一八〇一 (崇德) 高宗金と和す 一八五六 (後鳥羽) 寧宗の時韓侂胄權を専らにし朱熹等を斥く	一六二〇 (村) 趙匡胤帝位に即き宋の太祖となる 一六三九 (圓融) 太宗の一統。太宗遼を伐つて敗る 一六七〇 (一) 宋の眞宗の時遼の聖宗高麗を伐つ 一六九八 (後朱雀) 仁宗の時李元昊大夏皇帝と稱す 一七二九 (後三條) 神宗王安石を用ふ 一七七五 (鳥羽) 徽宗の時女眞のアクダ帝と稱す 一七八五 (崇德) 徽宗父子金に捕へ去らる 一七八七 (崇德)	一五六七 (醜) 朱全忠帝位に即き後梁の太祖となる 一五七六 (醜) 後梁末帝の時契丹の耶律阿保機帝と稱す 一五七八 (醜) 後梁末帝の時王建高麗を建國す 一五八三 (醜) 後梁亡び後唐起る 一五八六 (醜) 耶律阿保機渤海を滅ぼす 一五九六 (朱雀) 後唐亡び後晉起る 一六〇六 (村) 契丹の太宗後晉を滅ぼす 一六〇七 (村) 後漢起る 一六一〇 (村) 後周、後漢に代る 一六二〇 (村) 後周亡ぶ	一三〇四 (皇極) 太宗高勾麗を征す 一三〇五 (舒明) 太宗の時景教唐に入る 一三〇九 (舒明) 太宗の時東突厥を滅ぼす 一三二一 (孝德) 高宗の時大食來り通ず 一三二七 (齊明) 高宗西突厥を討ち平ぐ 一三三三 (天智) 高宗高勾麗を滅ぼす 一三三八 (天智) 高宗百濟を滅ぼす 一三五〇 (持統) 武后帝位に即き國號を周と改む 一三七三 (元明) 玄宗の時大祚榮渤海國を建つ 一四一五 (孝謙) 玄宗の時安祿山反す 一五六七 (醜) 唐亡ぶ	一三六七 (推古) 煬帝の時日本の使節小野妹子來る 一三七一 (推古) 煬帝の高勾麗親征 一三七三 (推古) 煬帝の高勾麗再征 一三七四 (推古) 煬帝また高勾麗を征す 一三七九 (推古) 隋亡ぶ	一〇九九 (允恭) 後魏の太武帝江北を一統す 一一三九 (雄略) 宋亡び齊代る 一一六二 (武烈) 齊亡び梁代る 一一九五 (安閑) 後魏東西に分裂す 一二一〇 (欽明) 東魏亡び北齊起る 一二一七 (欽明) 西魏亡び北周起る。梁亡び陳代る 一二二七 (敏達) 新羅、任那の日本府を滅ぼす 一二三三 (敏達) 北周、北齊を滅ぼし江北を一統す 一二三七 (敏達) 楊堅、北周を奪ひて隋の文帝となる 一二四九 (崇峻) 隋の文帝陳を滅ぼし南北始めて一統す	九二五 (應神) 司馬炎帝位に即き晉の武帝となる 九七六 (仁德) 匈奴晉を滅ぼす 一〇四三 (仁德) 東晉の元帝位に即く 一〇八〇 (允恭) 肥水の戰 劉裕東晉の位を奪ひて宋の武帝となる

源實朝の
征夷大將
軍たる頃

蒙古人の原
住地

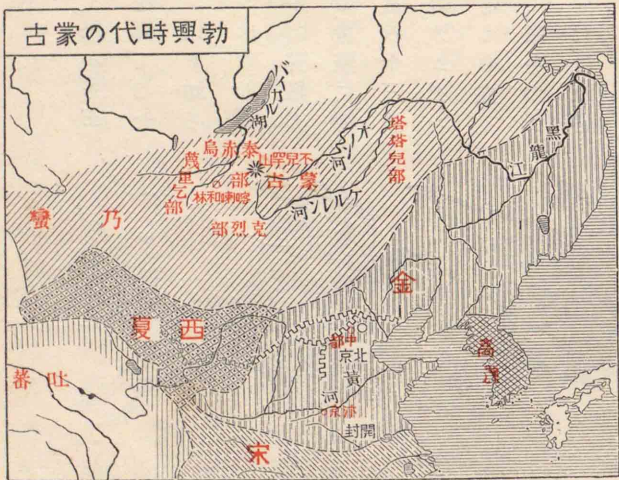
テムヂンの
蒙古諸部一
統

チンギス汗
の即位

第三篇 近古

第一章 蒙古の勃興

蒙古の勃興 蒙古は、オノン〔難〕ケル
 レン〔怯〕兩河上流地に遊牧生活を
 いとなんてゐた種族である。宋・金と
 もに衰へた頃、そこにテムヂン〔鐵〕木
 といふ豪傑が出て、しだいに諸部落
 を従へ、一八六六年〔南〕宋の寧宗の御代、土、盛ん
 な大汗即位式を舉げて、チンギス汗
 〔成〕吉思汗。チンギスは蒙古語、強
 〔盛〕の義、汗は「君主」の義である。と稱した。
 これが即ち蒙古の太祖で、その即位
 の年は、わが源頼朝の死後七年にあ



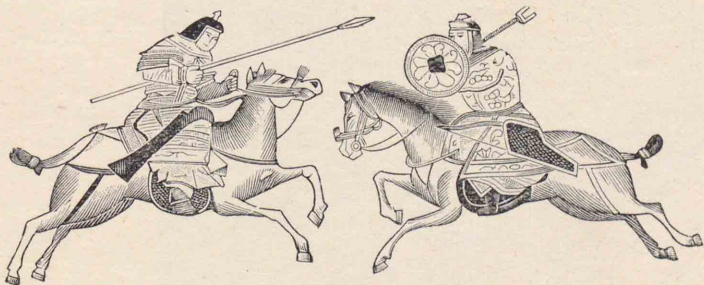
たる。

◇テムヂンの生立 テムヂンは、父をエスガイ、母をホエルンといつた。エスガイは、勇悍で部下の尊信を得てゐたが、遂に他部のために殺された。それで、テムヂン以下幼子たちは、皆ホエルンの手にのこされた。ホエルンは、なかなかの賢婦人で、勇氣にも富み、十三歳のテムヂンをもり立てて、家をつがせた。けれど



汗スギンチ

も部下の諸族は、多くそむき去り、四鄰の強敵は、しばしば侵入して、テムヂンに危害を加へようとした。或時、テムヂンをなきものにし、後後の憂の根を絶たうとして、急に襲つて來た敵があつた。テムヂンは、深林の中に身をひそめ、



士兵の古蒙

質 蒙古人の性

西夏及び金を攻む
中央アジア諸國平定
ロシヤ遠征

九日間全く食物を得る事も出來ず、絶望のあまり、ひそかに山を下るところを敵に捕へられ、頸と手とに、嚴重に錠を施された。一夜、テムヂンは、監守の童子をうちたふして脱出し、オノン河に沿うて、ひた走りに走り、河流に身をしづめて、一時の危難をのがれた。しかし、敵の搜索が嚴密であるので、一老夫の許に走つて、救助を求めた。老夫は、テムヂンを車にのせ、その上に羊毛を高く積みあげて置いた。敵は、老夫の家をくまなくさがし終つて、しつこくも、その車に及び、槍をとつて羊毛の中に突き立てた。その切先がテムヂンの脛を傷つけたが、テムヂンは、身動きだにしなかつたので、発見されることを免れた。かかる危難は、この外にも、なほたびたびあつて、テムヂンは、實に困苦の中に憂き年月を送つてゐたのであつたと云ふ。

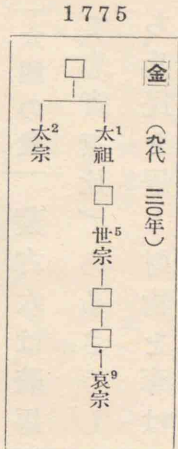
太祖の業

蒙古人は、騎馬に長じ、勇敢で、忍耐力が強く、君主に對して、忠實無比である。さうして、かれらは、敵を攻める時には、城池を毀ち、兵民を屠り、財物を奪はねばやまぬといふ風がある。太祖は、これを率ゐ、まづ西夏を攻めて、これを降し、ついで金をおかして、その黄河以北の地をとり、轉じて中央アジアの諸國を平げ、さらに將を遣はして、遠くロシヤに侵入させ、みづからは印度の西北部に入り、や

北條泰時
執権時代

西夏を滅ぼす
太祖の死

がて、ひきかへした。後、ほどなく、太祖は、全く西夏をほろぼし、進んで金を伐たうとして進軍したが、途中、病にかかり、一八七七年〔南宋の理宗の世、後堀河天皇の御代〕¹²²⁷遂に死んだ。



金を滅ぼす
1234

一八九四年〔南宋の理宗の世、四條天皇の御代〕、相共に金を伐つて、これをほろぼし、ついで都をカラコルム〔和林〕にさだめ、さて、いよいよ大規模の討軍を起



太宗

を起す

1894

太宗の業

太祖の死後、その第三子

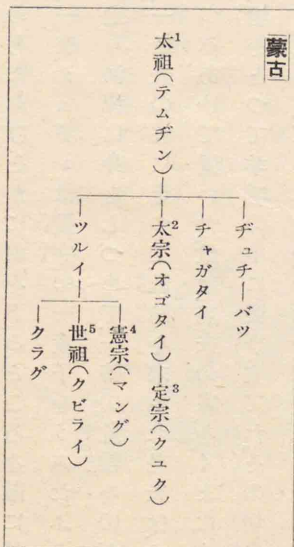
オゴタイ〔窩淵〕が、大汗の位に即いた。

これが太宗である。太宗は、宋と約し、

これをほろぼし、ついで都

をカラコルム〔和林〕にさだめ、さて、いよいよ大規模の討軍を起

1866



宋を侵し高麗を降す

ロシアその他の蹂躪

キプチャク汗國の建設

クビライの南征

クラグの西征

して、宋を攻め、また兵を出して、高麗を降し、別に甥バツ〔拔〕をしてヨーロッパに侵入させた。

バツの西征

1236

一八九六年〔南宋の理宗の御代〕、五十萬の大軍をひきゐ

て、征途にのぼり、キルギス草地を過ぎて、ロシアに入り、到る處、焚掠をほしいままにし、進んでドイツの東南部及びホンガリヤをおか

した。全歐の天地は、ために震撼し、天兵降るとさへいつて、おそれた

のであつたが、たまたま太宗死去のしらせが來たので、バツは、諸將

に命じて、東にかへらせ、おのれはとどまつて、諸屬國をしづめ、ついでロシアにキプチャク〔欽〕汗國〔帳汗國〕をたて、サライを都とした。

太宗の業

太宗の後、一代をへて、憲宗に至り、また兵を出して、四方

を征した。弟クビライ〔忽必〕は、大理國〔雲南〕を平げ、轉じてチベット〔藏西〕に

攻めこんで、これを従へ、且、別軍を遣はして、安南を征服させた。また

クビライの弟クラグ〔旭烈〕は、遠く西アジア地方を定め、イル汗〔汗兒〕

を征した。弟クビライ〔忽必〕は、大理國〔雲南〕を平げ、轉じてチベット〔藏西〕に攻めこんで、これを従へ、且、別軍を遣はして、安南を征服させた。またクビライの弟クラグ〔旭烈〕は、遠く西アジア地方を定め、イル汗〔汗兒〕

憲宗の南征



と稱して、タブリスに都し、バツのキプチャク汗國及びチンギス汗の次子チャガタイ〔台察合〕の封ぜられたチャガタイ汗國〔マリク地方のアル〕として中央ア〕とともに、いはゆる蒙古の西方三大汗國をなした。憲宗も、また親しく軍をひきゐ、クビライ等と途を分つて、宋を攻めたが、功半ばで、陣中に病死した。

第二章 世祖の業 東西の交通

前年龜山天皇即位

世祖の南伐

世祖の業 憲宗死後、クビライが大汗の位にのぼつて、世祖となつた。世祖は、都を燕京〔今北京〕にうつし、後、國號を元とあらため、南伐して宋の臨安をおとし入れた。この時、宋には、誠忠の士文天祥などがあつて、恢復をはかつたが、衰弱しきつてゐる宋は、到底、元軍に敵しが

北條時宗執權時代

宋の滅亡

宋滅亡の大原因

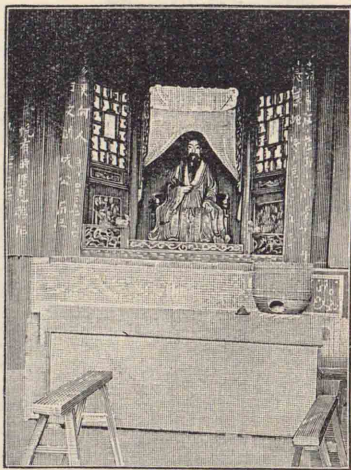
たく、しだいに南方におひちぢめられ、一九三九年〔後宇多天皇の御代〕遂に全くほろぼされた。宋は、太祖の即位から、ここに至るまで、實に十八代、三百二十一年で、國初以來、文治をたふとんだ結果、名臣、大儒は、多くあらはれたが、その兵力が、つねに振はず、武功のほとんど觀るべきものがなくて亡びた。

◇文天祥

文天祥は、博學能文の士で、氣節が高かつた。力を宋の恢復につくしたかひもなく、元軍にとらへられた。元では、しきりに元につかへて宰相とならんことをすすめたが、天祥は、國ほろびて救ふこと能はず、人臣として、死すとも尙餘罪がある。況んや、あへてその死をのがれて、その心を二つにすることが出来ようかといつて、頑として、頑として、燕京の獄



刻模蹟筆祥天文



北京晉賢坊なる文天祥の祠にある。

祥天文

につながられ、遂に斬られた。その獄中作る所の正氣歌は、悲壯淋漓、憤夫をして立たしめるものがある。

東征の失敗

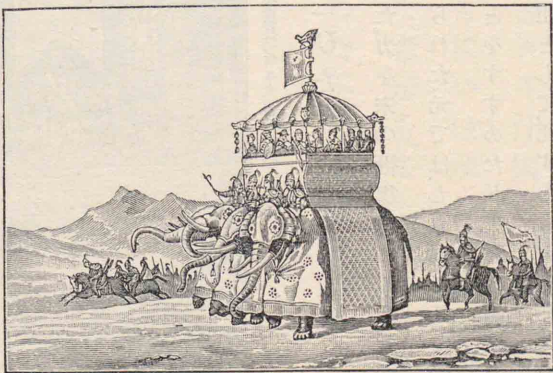
文永の役
弘安の役

元の極盛

世祖は、またわが日本をも從へようとして、前後二回、兵を出したが、かへつて大いに敗れ、歐亞にまたがる大勢力を以てしても、一指をだにふれることが出来なかつた。ただし、元は、その南方經略には成功し、緬國（メンコク）、占城（チャンパ）、安南（アンナム）、シムから、ジャヴァ、スマトラ等に至るまで、或は降り、或は朝貢したのであつた。

東西の交通

かくの如く、蒙古は、アジア、ヨーロッパの二大洲にまたがる大領土をたもち、領内には、道路、宿驛（ユキヤク）の制も、ほほ備はり、守備隊（シュベダイ）の配置等が、またややととのつてゐた。



陣出の祖世

東西の交通
南洋の交通
南方經略の成功
蒙古領域の大
海路
泉州
泉州の海路
泉州の海路

東西の交通と通商貿易

宗教學藝の傳來

マルコッポロ來る

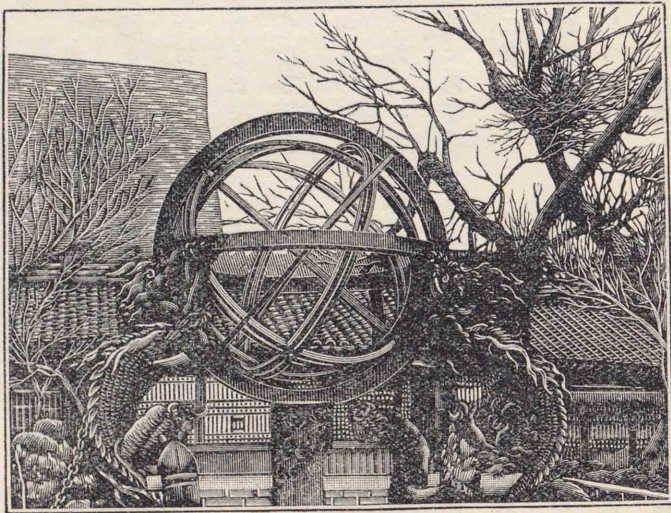
東方見聞錄

東方見聞錄
マルコッポロ來る
東方見聞錄



ローボ=コルマ

から、海陸共に東西の交通を促し進めた。それにつれて、通商貿易が盛んになり、はるばるヨーロッパから來て、キリスト教及び天文數學その他の學藝を傳へたものも少くなかつた。その中で、イタリヤの商人マルコッポロは、世祖につかへて、久しく支那にとどまり、歸國の後、東方見聞錄（アッハ）を著し、その書中にジバング（日本）の富盛



儀天渾の臺文天京北

元代の建造にかかる。

なありさまをのべ、はじめ、わが日本をヨーロッパ人に紹介した。

◇マルコポーロと東方見聞録

マルコポーロは、一九二四年(北條時頼執權時代)に、イタリアのヴェニスに生まれ、十八歳の時、父ニコロ叔父マフオにつれられて、旅に出で、ベルシャを横ぎり、バミール高原をこえ、天山南路をへて、元の大都北京に著し、世祖に謁したのは、一九三五年であつた。かれは、世祖の寵を得て、官吏にあげ用ひられ、久しく支那にとどまり、一九五五年、國にかへつた。歸國の後、まもなく、ヴェニスとジェノアとの間に、戦が起つた時、かれもまた出陣したが、武運つたなくして、敵手にとらへられ、ジェノアの獄に投ぜられた。その獄中、つれづれなるまま、同房のものに、東方にあつて見聞した所を語りきかせた。それを筆記したのが、東方見聞録である。その記事中に、ジバングは、支那大陸の東方千五百哩の海中にある一大島で、住民は、色が白く、風采が美しく、なかなか開けてゐる。その宗教は、偶像崇拜で、かつて外國に隸屬したことはない。そして、非常に黄金に富み、ほとんど無盡藏である。王宮の屋根は、西洋諸國の寺院が、鉛板を以ておほはれてゐるやうに、黄金の板を以てふかれ、床もあつて黄金の伸板を敷きつめ、窓にも黄金が用ひられてゐる。またこの島には、多くの赤色眞珠をも産する云々とある。この珍奇の内容が當時のヨーロッパ人の心を刺戟し、進んでこれを探検しようと企てるもの

Quoniam autem magni kaam aspectui oblati sunt ipse rex summe benignus erat et eos suscepit alacriter Inquisit autem ad eis p multas vices de condicionib occideraliu pcutu de impatore ronoz de regib et principib xpianis et qliter i eoz regnis suabat iusticia qliter ecia i rebus bellicis se debat Inquisit ecia diligit de morib latinor et sup oia diligenti inrogavit de papa xpianor et de cultu fidi xpiane Ipi at vt viri prudentes sapient ad singula ruderunt ppter qonq sepe eos ad se introduci iubebat dabuerunt q gratiam in oculis eius.

Quo ab ipso rege ad ronu pontifice missi sunt Capitulu quartu

Quada igitur die pfatus kaam consilio prius cu baro nibus habito rogavit pfatos viros vt sui amore redi rent ad papa cu vno de suis baromb qui dicebat cogatal p pre ipius sumu pontifice xpianor rogatur quaten ad cu centu sapientes xpianos dirigeret qui scirent ondere su is sapiencia ronabilis et pvdeter si veru erat q xpianor fides esset melior int oes. et q dij tartaroz eent demones et q ipi et orientales alij decepti erant in suoz deoz cultura desiderabat cam audire ronabilis q fides esset ronabilis y mitada. Quq pcutissent buis cora eo dicentes se ad cucta eius bnplacita preparatos fecit rex scribi lras ad romanu pontifice in lingua tartaroz quas illis tradidit deferendas Tabula ecia aurea testimoniale ill tradi iussit signo regali sculpta et insignita. in p suetudine sedis sue qua qui defert deduci debet de loco ad locu a cunctis superiorib civita tu suo imperio subiectaz cu omni sua comitiva securus e q diu imozari voluerit i civitate vel opido det illi de expē sito et necessarijs oibus integrat pvideri Insup impo sive ei rex vt de oleo lapadis q pendebat ad sepulchru dñi nostri ihu xpi in ibrlm ei deferrent in reditu. A redebat

これは東洋文庫所藏「東方見聞録」の一部で、一四八五年にアントワ
 ープで刊行したラテン譯の初版である。活版術發明後、まもない時
 の印書の體裁をうかがふ一材料ともなる。

を生ぜしめたのであつた。

第三章 元の衰亡 明の統一 チムール

元の衰亡

元の世祖は、支那の天子となつて、支那及び南方に威を



元の紙幣

ふるつたが、その大領土
 の西部には、だんだん威
 令が行はれなくなつて、
 チヤガタイ汗國もキプチャ
 ク汗國もイル汗國も、遂

にみな分離獨立して、相たがひに争つた。また元は、はやくから財政
 の困難に苦しみ、世祖以來、これが整理の途に窮して、しきりに重税
 をとりたて、且、みだりに紙幣を發行したために、いやが上にも財政
 をみだして、物價は、いよいよ騰貴し、人民は、生活の苦しさにたへず、

財政困難

三汗國の分
 離獨立

元衰亡の原因
 1. 相續は不備
 2. 各藩口の離反
 3. 財政困難
 4. 三汗國の分
 離獨立

漢人の蜂起

朱元璋金陵に據る

太祖の一統

太祖の政治

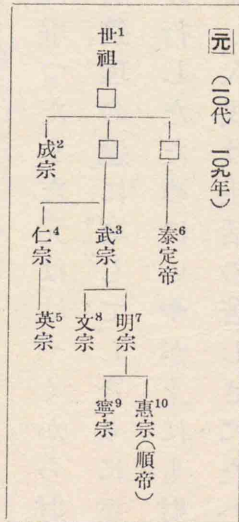
天下は、漸く不穩の雲におほはれた。この時に乘じ、かねて元の壓迫に不平をいだいてゐた漢人等が、一時に蜂起し、二十餘年の大亂を重ねた末、群雄中の大立物である朱元璋が、三〇二八年〔長慶天皇の踐祚〕に、金陵〔江蘇省〕に於て、帝位に即き、明の太祖となつて、ますます元に迫つたので、時の元の天子は、蒙古ににげかへつた。世祖が燕京に都してから、ここに至るまで、百五年である。



太祖

明の太祖の業 明の太祖は、即位の後、ほどなく天下を一統した。これにて支那は、また漢人の天子をいただくこととなつた。太祖は、心を國政に用ひ、漢の高

1920



2028

この頃足利義滿專横を極む

制度の改革 租税の軽減 教育の奨励 子弟を各地に封じて 神祇

燕王の反 北京奠都

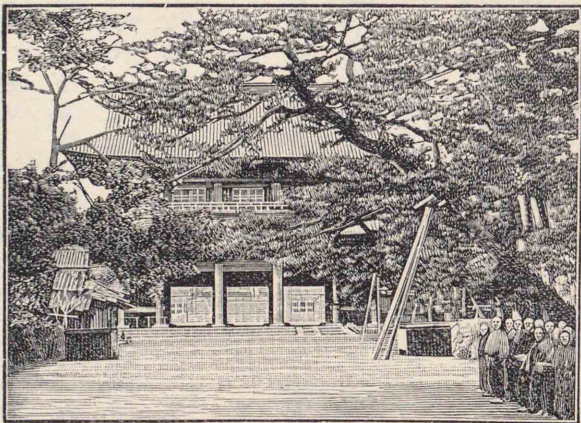
祖と同様、一族の諸王を要地に封じて、帝室の藩屏としたが、太祖について立つた惠帝〔太祖の孫〕は、諸王の強大なるを憂へ、漢の景帝の例にならつて、これを抑へることをこころみ、かへつて叔父燕王の反を招いた。燕王は大舉して金陵に迫り、遂にこれを攻めおとし、自立して成祖となり、燕京を北京とあらため



皇后馬

し、金陵を南京と稱した。

◇太祖の皇后 太祖の皇后馬氏は、寛厚な賢婦人で、その内助の功は、實に偉大である。はじめ太祖が



太祖の陵正門

陵は、江蘇省江寧縣にあつて、一三五八年の造營にかゝる。

兵を起して、しだいに勢を得た頃、馬氏は、太祖に、人を殺さぬことを以て本となされたならば、人心は、おのづから歸服するでありませう。人心の歸する所は、即ち天命のある所で御座います」と説いたのであつた。後、太祖が帝位に即くに及んで、馬氏は立てられて皇后となつたが、謙遜で、慈悲の心がふかく、女の道に於てほとんど闕くる所がなく、つねに太祖の食膳を自ら點檢し、その食事の世話まで親しくなされた。臣下の人たちが、御自身でなされるのは、勿體ない。宮中には他にその人がありません」と申し上げると、后は、自らこれをなすのは、一には上を敬する趣旨であり、一にはもし食膳に粗相があれば、臣下の落度として、おとがめをかうむることになるから、といはれた。女として人の上に立つものは、この心がけがなければならぬ。

成祖の治

成祖は、産業をすすめ、教育をはげまし、よく天下を治めたが、惠帝が、金陵陷落のをり、海外にのがれたものではなからうかと疑ひ、鄭和を遣はして、これをさぐらせ、かねて、明の武威を海外にかがやかさせた。鄭和は、前後七回、南洋及び印度洋に航して、大いに明の威徳を示したから、南方諸國は、多く明に貢をささげるやうにな

成祖の政治

南海諸國の
入貢

成祖
祖統
祖統
祖統
祖統
祖統

祖統
祖統
祖統
祖統
祖統
祖統
祖統
祖統
祖統
祖統

り、通商貿易も、したがつて發達し、海外に植民移住するものが、多きを加へ、漢人の海外發展に一新時期を劃した。

鄭和の遠征

鄭和は、容貌魁偉身長九尺に達し、その體格智謀、共に衆にすぐれてゐた。かれは、長さ四十四丈、廣さ十八丈の新造船六十二艘に、將士三萬七千餘人を分乗させ、また順良なる蕃王酋長等に賞賜する目的を以て、多くの金帛をもつこみ、二〇六五年(永樂三年)六月、南京を船出し、占城をへ



成祖

て、印度の海岸に至り、歸途、スマトラで酋長を擒にし、二〇六七年に歸國した。この後、二〇九〇年に至るまで、約二十五年の間に、かれはなほ六回の遠征をこころみ、南洋、印度のみならず、ペルシヤよりアラビヤに至り、遠くアフリカの東岸、イタリヤ領ソマリランドの沿岸に及び、三十あまりの國國をして明に朝貢させた。

チムールの業

さきに、元が東方に於て勢力を失つた頃、蒙古の西

レニシ
チムール(帖木兒)

テ、後裔

西曆 一三三五年

チヤガタイ汗國

外名

一、チヤカタイ汗國

二、イル汗國

三、キプチャク汗國

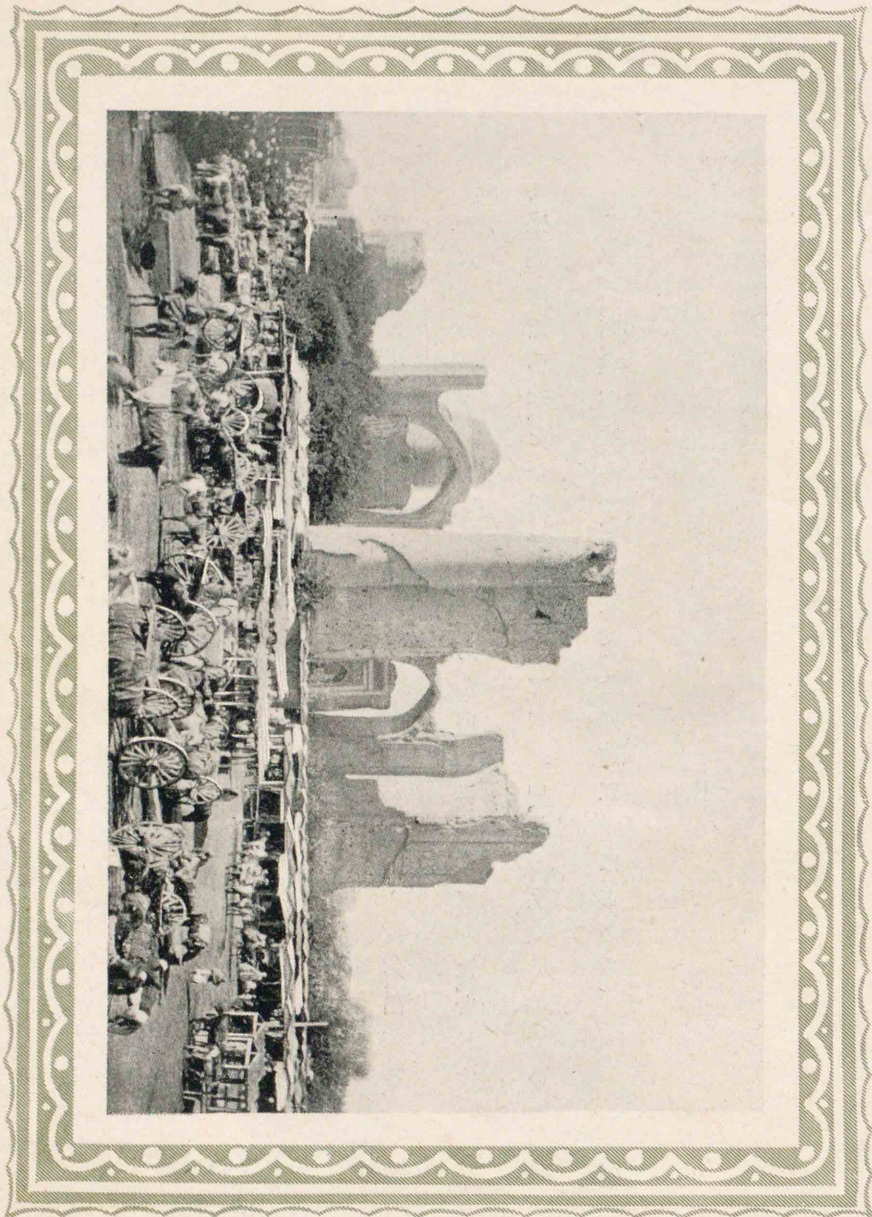
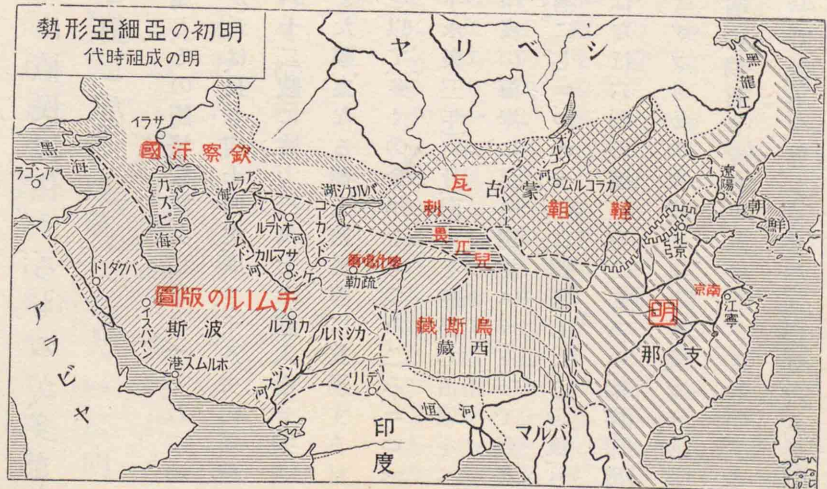
四、印度

五、明(成祖)

一四〇五

三汗國の衰
微
チムールの
興起

方三大汗國も、また皆衰へた。しかるに、やがてチヤガタイ國にチムール(帖木兒)といふ豪傑が出て、明の太祖が即位したところに、自立してサマルカンドに都した。チムールは、平素チンギス汗の大業を慕ひ、世界統一の大志をいだいて、しきりに兵を四方に用ひ、中央アジア及びイル汗國等をあはせ、キプチャク汗を伐つて、これを逐ひ、ついで印度をおかし、またオスマントルコを攻めて、その帝を虜にした。これで、西方諸國は、ほとんど皆その威風になびき服したから、チムール



場市るけに時現と墟廢のムマーカー—イバ—イバ

本
理
陽
堂
平
方
面

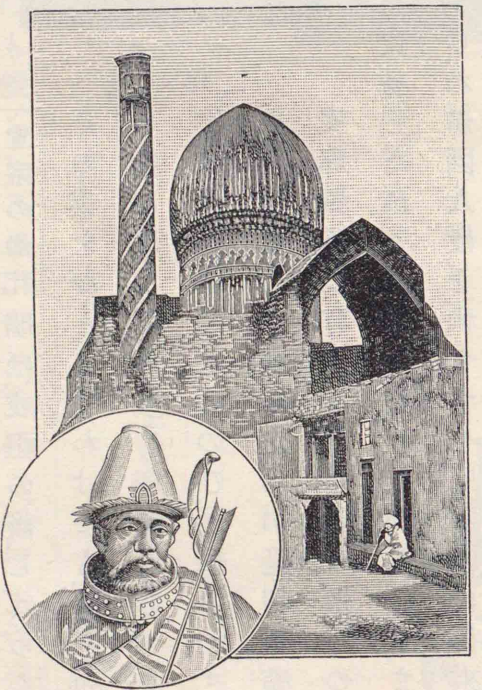
バイバイ—カーヌムは、チムールがその愛妃のためにたてた廟殿で、サマルカンドにある。今は、全く荒廢したが、それでもチムール時代の全盛の一斑をうかがふことが出来る。サマルカンドは、シル・アム兩河の中間にあつて、今は、昔日の盛觀はないが、その附近が、中央アジア中、最も豊沃の地であるから、商業が盛んで、人口およそ五萬五千ほどある。

チムールの東征

ルは、さらに東征して、支那を平げ、明のためにくつがへされた蒙古人の勢力を恢復しようとして企て、大舉して東行する途中、病んで死んだ。それは實に明の成祖の在位中の事で、¹⁴⁰⁵二〇六年〔後小松天皇の御代〕に當るのである。

◇チムールの教訓

チムールは、一九九六年（湊川の戦）のあつた年、サマルカンドの南ケシ（湯石）に生まれた。或時、一小蟲が草の莖をよぢのほるのを見たかれは、その小蟲が幾度も幾度も地におちながら、屈せずして、遂にその目的を達したのを感じ、左右の者に向つて、「この小蟲は、忍耐不屈である。われ等は、これを手本とすべ



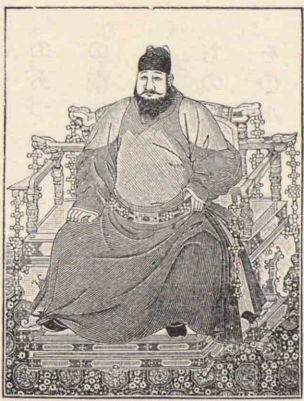
チムールの廟

廟はサマルカンドにある。

宣宗の治
日明の交通
美術の盛衰
義教

明の盛時

日明交通



宣宗

きだ。何人でも、忍耐力を張り、深く謀り、遠く慮つて、一たび定めた目的に向ひ、百折して
もたゆまず進めば、遂に志を達することが出来るであらうといつた。

宣宗の治

明は、成祖の後、しばらくは、その業をおとさず、わけても、宣宗〔成祖の世には、良臣が多く、朝廷にあつたので、政治がよくととのひ、藝術の如きも、いちじるしく進んだ。わが足利義満は、支那貿易の有利なるを知り、太祖の時以來、しばしば明と交通貿易したが、この頃に至り、足利義教も、また好を明に修めた。これから、わが國人は、ますますしげく明に往來して、薬種、織物等を輸入し、且、畫法や磁器の製法などを傳へた。

第四章 明の衰運 朝鮮の建國 滿洲の興起

明の衰運
宣宗の専横

太祖の對宣宗の専横
宣宗の専横
成祖の全盛時代
の又通
英宗の専横

王守仁
陽明学
北虜南倭
北虜南倭
南倭
南倭
盜賊及び諸王の亂

宦官の専横と内亂

明の太祖は、漢唐の弊にかんがみ、宦官をおさへて、國政にあづからせなかつた。しか



貴州省貴陽縣にある石に刻したものの。

仁守王

るに、成祖は、兵を擧げて、金陵に向つた時、宦官が内通したのを徳とし、だんだんこれを親近した。これから、宦官は、しだいに専横になり、

陽明

蹟筆仁守王

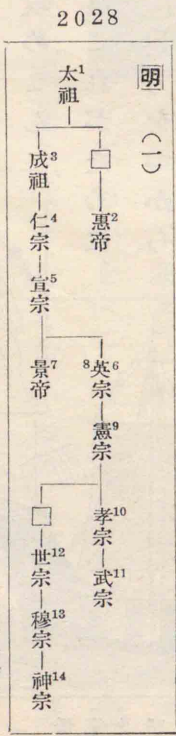
武宗に至つて、最も甚しく、國政も、大いにみ

だれた。それで、盜賊が諸方に起り、諸王の中にも、叛くものが出たが、幸にも、名儒王守仁

等の盡力によつて、これを平げることを得た。かくの如く、内に宦官の跋扈してゐる間に、外には

北虜・南倭の禍

かくの如く、内に宦官の跋扈してゐる間に、外には

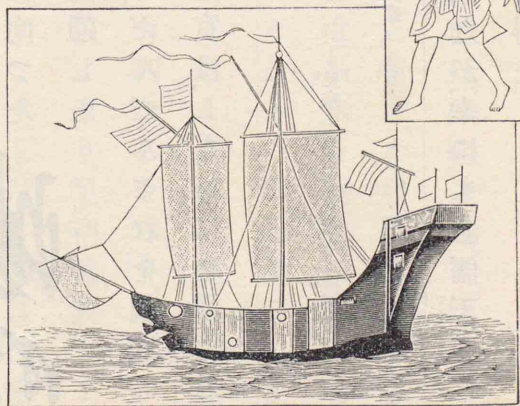


北虜

南倭

高麗と遼金
及び蒙古

また南北に外寇をうけて、明の国力は大いに衰へた。これよりさき、元の後なるタタール(韃靼)が、北方に威勢をふるつて、内外蒙古を一統し、しばしば明に攻めこんで、これを苦しめた。明は、これがために財をつひやし、且、大いに兵力をつからせた上に、國初以來、また倭寇になやまされた。明人は、非常にこの倭寇をおそれ、タタールとならべ稱して、北虜、南倭といひ、ふかくみづから警戒したのであつた。



船のそび及寇倭

朝鮮の建國

高麗は、遼の盛んな時には遼に、金が起れば金に、蒙古が榮えれば蒙古に、それぞれ臣としてつかへ、明の起るに及んで、ま

朝鮮の建國

宣祖

神宗

明の朝鮮半島に及ぼした影響

満州族の興起

女真族

ヌルハ

ナトウラ

遼陽

高麗の衰微
李成桂の自立

豊臣秀吉の朝鮮出兵

萬曆の役及びその影響



神宗の時は、後龜山天皇が吉野から京都におかへりになつた二〇五二年に當るのである。これから、朝鮮は、およそ二百年をへて、宣祖(李)の世に、わが豊

臣秀吉の大兵をかうむり、國運も、ほとんど危かつたが、幸にして、滅亡をまぬかれ、徳川氏に至つて、國交を恢復した。

明末の形勢

秀吉が兵を朝鮮に出した時は、明は、あたかも神宗の世であつた。神宗は、朝鮮王の請にまかせ、兵を發して、これを援け、か

黨争

へつて大いに敗れた。そのため、明は、一層疲弊したのであつたが、後



には、黨争の禍がまた甚しくなつて、ますます國政をみだした。この時に

女真族の勃興
流賊の蜂起

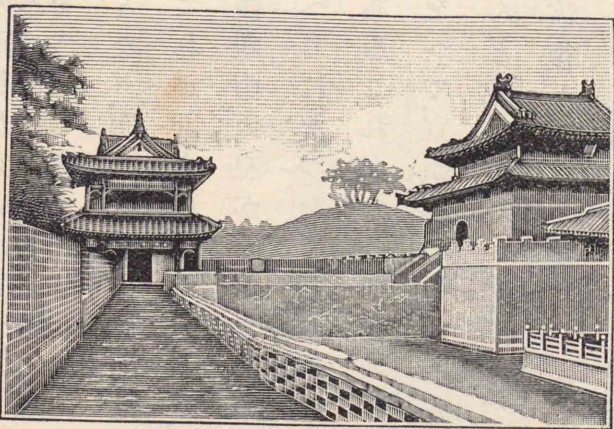
乗じて、滿洲に女真族が勃興し、國內諸方に流賊も蜂起して、遂にいかんともすべからざるに至つた。

滿洲の勃興

女真族は、金のほろびた

後、久しくその勢が振はなかつた。しか

るに、明の神宗の時、アイシンギョロ〔愛新覺羅〕



東陵は、奉天城を距る東三里の處にある。陵に向つて右前にある櫓内に、太祖の碑が立つてゐる。國の中央に櫓頭形をなしてゐるのが即ち陵で、太祖の遺骸は、この下に眠つてゐる。

東陵

前年大阪
落城豊臣
氏亡ぶ

ヌルハチの
興起

太祖の即位

瀋陽奠都

氏のヌルハチ〔努兒哈赤〕が、嚇圖阿拉〔今の興安縣〕から起るに及んで、またしだいに強盛に赴いた。ヌルハチは、近隣の諸部落を従へて、國を後金と號し、二七六年〔明の神宗の世、後、水尾天皇の御代〕、遂に帝位に即いて、太祖となり、すすんで瀋陽〔奉天省瀋陽縣〕遼陽等を略し、都を瀋陽にさだめた。

第五章 モゴル帝國 ポルトガル・オランダ等の

の東洋經略

チムール死
後の形勢

モゴル帝國の隆盛

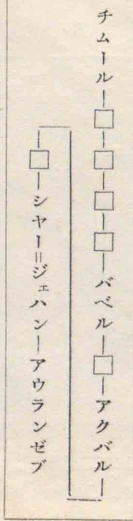
チムールの死後、その國は、たちまち亂れて、四分五裂したが、およそ百年ほどたつて、遠孫バ

バベルの創
業



ベルが、アフガニス
タンから

起つた。バベルは、二一八六年〔明の世宗の世、後、1526〕、印



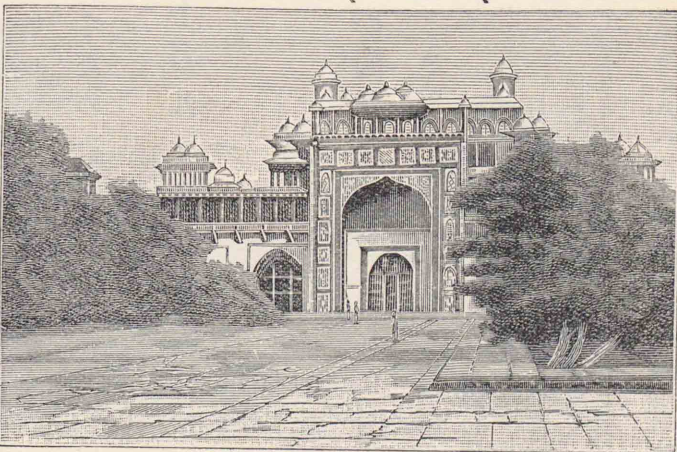
この年後
奈良天皇
踐祚

アクバル及
ビシヤール
ジエハンの
事蹟

アクバル
都 中印度
宗教政策
回教
印度教
アムールの印度教徒と
結婚
回教ノ権利
融和
帝國の全盛

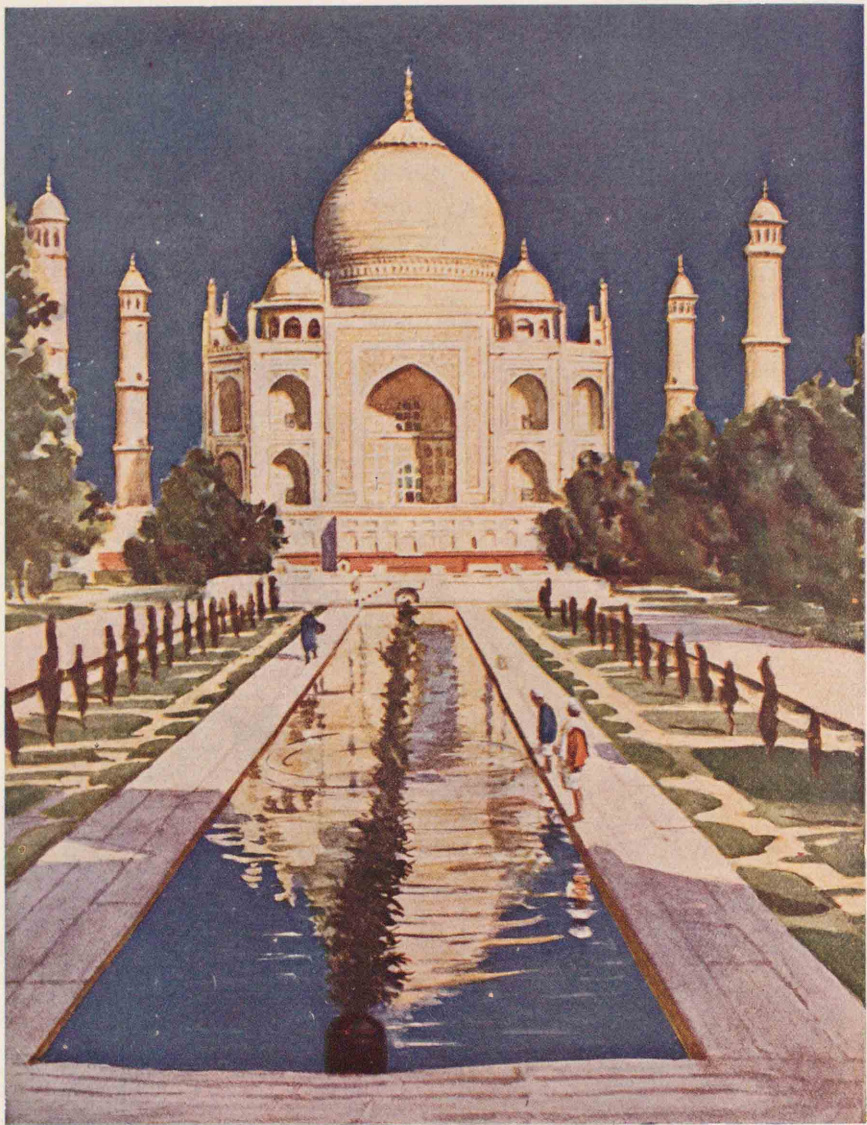
度に攻めこんで、印度皇帝の位にのぼり、デリーに都して、モゴル〔英臥〕帝國の基をひらいた。バベルの孫アクバル〔織田信長・豊臣秀吉・徳川家康と同時代の人〕は、世にまれな英雄で、都をデリーの東南アグラにさだめ、遂にことごとく北中兩印度を従へたが、その孫シャーリジェハンの時、さらに領土を南方にひろめ、且、デリーとアグラとに壯大なる建築を起して、その盛世をかざつた。この頃が、モゴル帝國全盛の時代であつたのである。

◇バベル バベルは、戦亂の間に成長し、戦争に關する事蹟の多い人であるが、同時に、文學を好み、美術を愛し、剛果の一面また武士的



廟の帝大ルバクア

印度セクンドラにある。



ル - ハ マ = ユ ジ タ

ミヤー、ハン
 在服 南印印度
 アフリカに建築
 アウラニクセフ
 失敗 東教改革
 印度教の及乳
 コラータ同盟
 衰退の心

タジュマハールは、アグラ市公園の一部にあつて、ジユムナ河に臨んでゐる。これはアクバル大帝の孫シャー・ジェハーン帝がその愛妃のために建てた廟殿で、およそ二萬の人を使役し、約二十年を経て出来あがつたものだと言へられてゐる。この建築は、白大理石を用ひて作り、世界で最も完備した建築物の一で、處々に瑪瑙・珊瑚・碧玉の類を嵌入し、結構、壯麗を極め、實にモゴル帝國全盛期の好記念物である。

印度
 ポルトガル人東航
 東航の動機
 オスマントルコ勸導
 小アフリカ陸上交通
 オルトガル

東西交通の
 困難

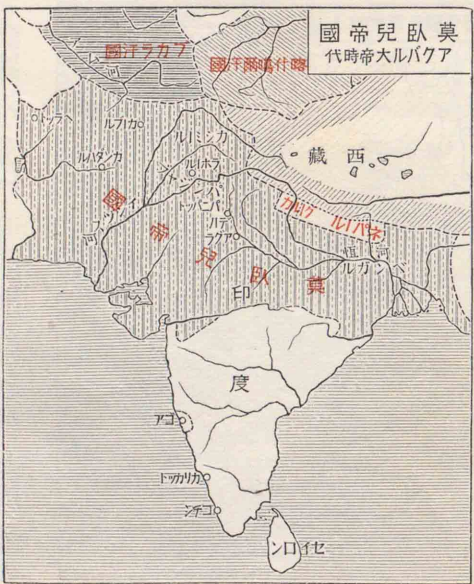
ポルトガル
 人の航海業

ポルトガル人の東航

さきに元の盛時に、一たび開けた東西の交通

寛恕の徳があり、殊に克己の精神に富んでゐた。かつて、酒のために行をあやまつたことがあつたが、かれはふかくこれを悔い、酒盃をうちこはして、終生、これを手にしなかつた。

は、元朝が衰へたのと、オスマン・トルコが西アジアに榮えたのと、この二つの理由で、ほとんど全くやんでしまつた。しかるに、明の中世頃から、西ヨーロッパの形勢が、しだいに、かはり、海路、印度にゆいて、世界の寶庫をさぐらうとする氣運が、だんだん起つた。その先鞭をつけたポルトガル人は、しきりに、アフリカ沿岸の探検と、その航路の發見とをつとめ、ヴァスコ・ダ・ガ



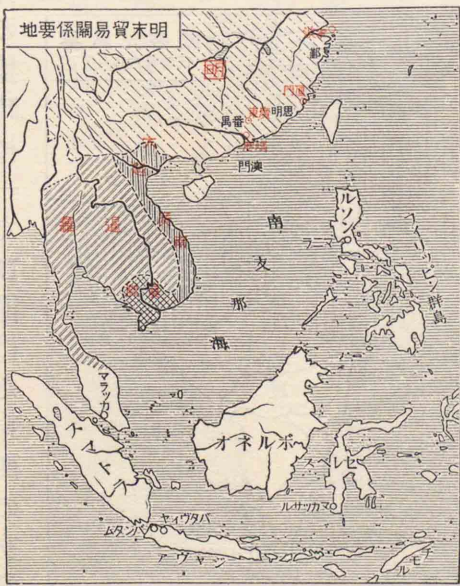
應仁亂後
二十一年

航
アフリカ周

ポルトガル
人の通商地

ポルトガル
人わが國に
來る

マに至つて、二一五八年〔明の孝宗の御代、後土〕に、アフリカの南端をまはり、遂に印度に達した。これは、モゴル帝國が建てられる前、二十八年のことである。これから、ポルトガル人は、相ついで印度に來航し、やがてゴアを取つて、そこに據り、しだいにセイロン島や印度の諸處に商館を設け、遂にはマラッカを略し、シヤム及びマライ群島と交易をひらき、さらに進んで廣東〔廣東省〕に至り、寧波〔浙江省〕、厦門〔福建省〕に商館をたて、また明から媽港〔澳門〕を租借して、これに據つた。ポルトガル人は、また二二〇三年〔明の世宗の世、後奈〕以來、わが日本にも來航して、貿易をいとなんだ。かくして、東方の物



二二〇三年〔明の世宗の世、後奈〕
良天皇の天文十二年

應仁の亂
後十五年
前年北條
早雲伊豆
を取る

コロンプス
のアメリカ
發見

フィリッピン
諸島の發見

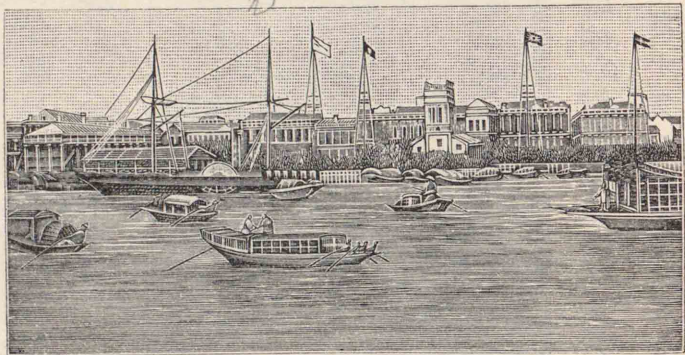
イスパニヤ
人の東洋貿
易

産が多く西ヨーロッパに輸送せられ、その貿易の巨利は、ポルトガル人の手に歸した。

イスパニヤ人の東航 これよりさき、二一五二年

1492

年〔明の孝宗の御代、後土〕に、イタリヤ人コロンプスが、イスパニヤから纜〔トモツナ〕をといて、大西洋を西航し、アメリカを發見した。これから、イスパニヤは、アメリカの拓殖〔タクシヨク〕に従ひ、二一八一年〔明の武宗の御代、後土〕には、さらにフィリッピン〔フィリッピン〕諸島を發見して、四十四年の後に、セリヤウ〔セリヤウ〕を占領し、ついでマニラ市をたて、そこを根據として、明及びわが日本と通商しようとしたが、東洋貿易に於けるポルトガル人の勢力が、既に定まつてゐたので、イスパニヤ人の商業は、ただ



館商の人ルガトルボるけ於に東廣

明の使節
来る。秀
吉これを
逐ふ

オランダの
獨立

東印度會社
と東洋貿易

大阪落城
後四年

オランダ人
と日本

マニラとわが平戸にかぎられた。

オランダ人の東航

その頃、イスパニヤから分離して獨立を宣した

オランダも、また東洋貿易に著眼し、¹⁵⁹⁶二二五六年〔明天の神宗の慶長元年〕には、そ

の國人が、はじめてスマト

ラ・ジャヴァに來た。後六年、オラ

ンダ人は、東印度會社を起

し、政府の保護をうけて、東

洋貿易に従事し、軍艦・商船

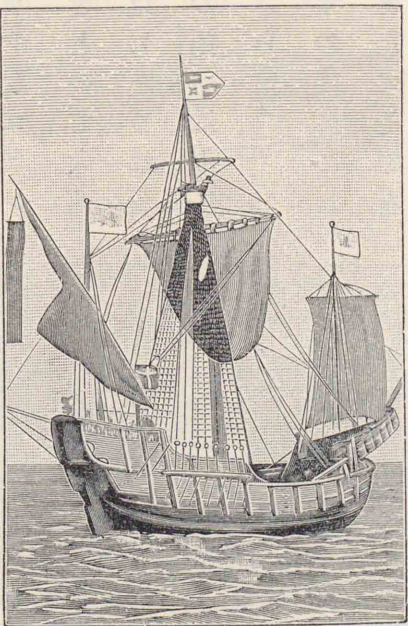
を派遣して、到る處で、ポル

トガル・イスパニヤの商船

を掠め、且、その植民地を奪ひ、¹⁶¹⁹二二七九年〔明天の神宗の元和五年〕、ジャヴァにバタ

ヴィヤ府をたてて、ここにその根據をかまへた。オランダ人は、またさ

きにわが平戸に來り、後には臺灣にも據り、盛んに貿易をいとなん



船のヤニバスイ

だ。
イギリス人の東航
二二六〇年〔明天の神宗の慶長五年〕に、東印度會社

を起して、東

洋に來たが、

ポルトガル

人及びオラ

ンダ人に妨

げられて、そ

の計畫、思ふ

にまかせず、

遂に印度に

退いて、専らこれが經營に當つた。その頃

この年關
ヶ原の役
あり

イギリス東
印度會社

イギリス東航

印度根據

カルカッタ

マドラス

ボヤット

二二五〇年

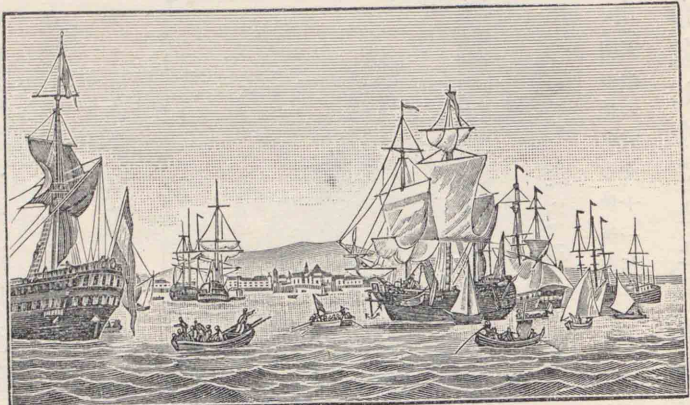
東印度會社

モル帝口

アウランゼブ

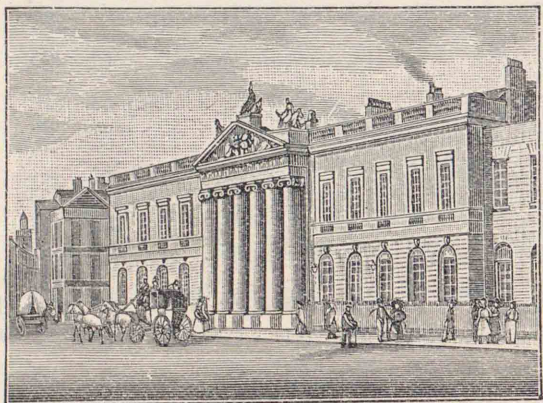
瓦使

印度經營



景光の港ヤイヴタバ

イギリス人の東航
二二六〇年〔明天の神宗の慶長五年〕に、東印度會社
を起して、東
洋に來たが、
ポルトガル
人及びオラ
ンダ人に妨
げられて、そ
の計畫、思ふ
にまかせず、
遂に印度に



社會度印東るけにンドンロ

キリスト東征
イスパニヤ

イスパニヤ

フランシスコ・サバトル

二二〇三年

二二〇九

天主教

マテオリッチ

二二四〇

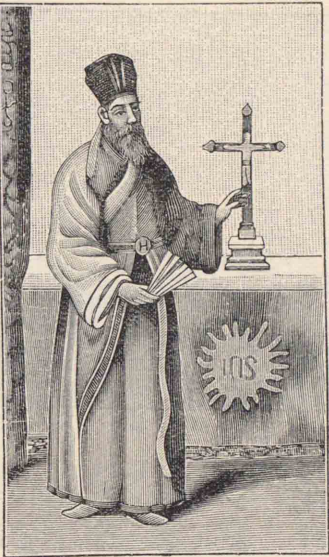
モゴル帝國
の衰微

ゼスイト教
團の東來

サヴィエル
日本に來る

マテオリッチ
チ支那に來る

印度のモゴル帝國には、アクバルの曾孫アウランゼブ〔清の聖祖〕が帝位にあつて、印度全體を領してゐたが、帝の死後、暗君が相ついで立つたので、帝國は遂に四分五裂し、その支配の及ぶ所は、わづかにデリー附近にかぎられた。それにつれて、印度に於けるイギリスの勢力は、だんだん増進した。



チリニオテマ

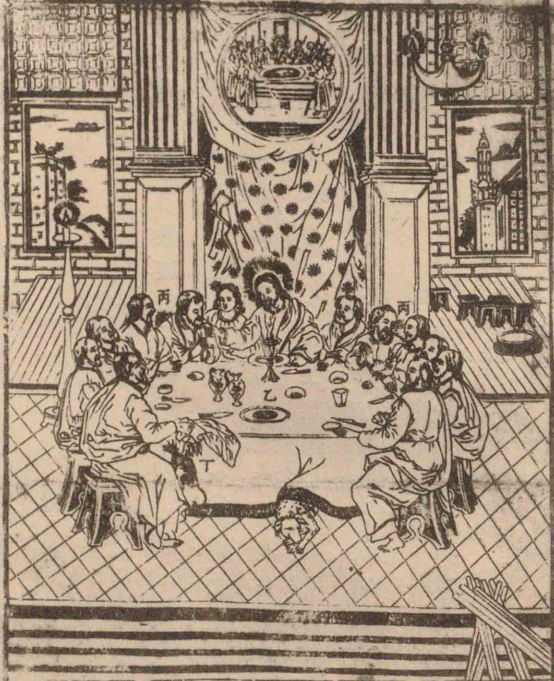
につとめた。その中で、イスパニヤ人フランシス・サヴィエルが、¹⁵⁴²1542年〔明の世宗の世、後奈良〕に、ゴアに來著し、後七年、わが日本に來て、各地に布教した。ことと、同派のイタリヤ人マテオリッチ〔利瑪〕が、¹⁵⁸⁰1580年〔神宗の世、

キリスト教の東來

右の如く、

西洋人がしきりに東來すると共に、キリスト教の舊派に屬するゼスイト教團〔天主〕の僧侶も、また東洋に來て、布教

立聖體大禮



聖體大禮、即ち新舊の禮、食料を以て示す、其禮已終、而後、世全功已得、矣、
乙卯、蘇漢、定、
禮、就、座、特、釋、
及、治、以、其、能、
化、成、聖、體、聖、
血、
承、前、在、世、以、
宗、徒、及、後、世、
奉、教、者、
兩、儀、從、心、而、
領、聖、體、以、致、
其、神、聖、禮、
禮、
一、聖、體、亦、
其、聖、體、之、
不、除、廢、入、
其、心、而、
見、行、三

最後晩餐圖

これは東洋文庫所藏「出像經解」の一部である。「出像經解」は、アレニ Giulio Aleni の撰にかかり、毅宗の崇禎十年(皇紀二二九七年)に刊行された耶蘇繪傳ともいふべきもので、木版畫五十七葉から成り、畫中に説明がついてゐる。アレニは二二四二年頃、イタリヤに生れたゼスイト教團の宣教師で、支那に來て布教に従事し、艾儒略アヂウロと稱し、漢文の著書が多くある。

西洋學術の
輸入

正親町天皇天正八年、媽港に來て、二十年間、南支那の布教に従事し、進んで北京に赴き、そこに教堂をたてて、多くの信徒を得たこととは、共に世にいちじるしいのである。この前後に、續續、東來したキリスト教の宣教師は、いづれも學術に通じてゐたから、布教のかたはら、西洋學術書の翻譯等に盡力し、天文、地理、數學、曆法、砲術、測量術測天術等を傳へて、支那の新文明に多大の貢獻をなし、大いに官民からの敬愛をうけた。

概 括

近古期は、蒙古人の勃興した一八六〇年頃から、明の滅亡した二三〇〇年頃までの間で、わが第八十三代土御門天皇から第九代明正天皇に至る時代に當つてゐる。この期の特色は、蒙古人の勃興隆盛であつて、かれらは、ひろく東西の諸民族を伐ち従へ、その意氣ほとんど當時の世界を征服するかの如く見え、一時歐亞二大陸にまたがる空前の大帝國を建設した。しかるに、財政困難その他の原因によつて、國本の動搖を來し、遂に漢族の背叛を招き、結局蒙古人は、支那本部から驅逐されてしまひ、ここに漢族の明代となり、またまた漢文化の興隆を見るに至つた。さりながら、蒙古人の勢力は、なほ盛んなるものがあつて、中央アジアにチムールの大帝國が興り、その遠孫は、印度にモゴル帝國を起した。また、この期には、東西の大交通があつて、ヨーロッパ人東進の勢が、いよいよいちじるしくなり、それにともなつて、キリスト教が東流し、西洋の學藝も傳來した。

古

明

2028—2304

- 二二五八 (後土御門) 孝宗の時ヴァスコ・ダ・ガマ印度に達す
- 二二七〇 (後柏原) 武宗の時ポルトガル人ゴアを略取す
- 二二七七 (後柏原) 武宗の時ポルトガルの使節始めて明に來り通す
- 二二八六 (後柏原) 世宗の時バベル、モゴル帝國の基を開く
- 二二〇二 (後奈良) 世宗の時サウイエル、ゴアに來る
- 二二一六 (後奈良) 世宗の時アクバル大帝即位
- 二二一七 (後奈良) 世宗の時ポルトガル人媽港に商館を置くことを許さる
- 二二二五 (正親町) 世宗の時イスパニヤ人フィリッピン諸島を占領す
- 二二三九 (正親町) 神宗の時イギリス人始めて印度に來る
- 二二四一 (正親町) 神宗の時マテオ・リッチ明に來る
- 二二四三 (正親町) 神宗の時滿洲のヌルハチ兵を起す
- 二二五二 (後陽成) 神宗の時豊臣秀吉朝鮮を伐つ
- 二二五五 (後陽成) 神宗の時オランダ人始めて印度に航す
- 二二六〇 (後陽成) 神宗の時イギリス人東印度會社を建つ
- 二二七六 (後水尾) 神宗の時ヌルハチ帝位に即く
- 二二七九 (後水尾) 神宗の時オランダ人バタヴィヤに據る
- 二二八四 (後水尾) 熹宗の時オランダ人臺灣を占領す
- 二二八七 (後水尾) 熹宗の時清の太宗朝鮮を征伐す
- 二二九一 (明 正) 李自成亂を作す
- 二二九六 (明 正) 清の太宗國號を清と改む
- 二三〇四 (後光明) 李自成北京を陥れ明亡ぶ

年表

(三)

年代は皇紀に據る

時代	王	朝	年代	(天皇)	重なる事蹟
古	明	2028—2304	二〇二八 二〇二九 二〇三〇 二〇五一 二〇五二 二〇五九 二〇六二	(後龜山) (後龜山) (後龜山) (後龜山) (後龜山) (後小松) (後小松)	朱元璋帝位に即き明の太祖となる 太祖の時チムール、中央アジアを定む 太祖の時チムール、キプチャク汗を破る 太祖の時李成桂朝鮮王となる 惠帝の時燕王兵を擧ぐ 成祖の即位。アングラの戦(チムール、オスマントルコを破る)
近	(元) 蒙古	1866—2028	二〇二八 一九四一 一九三九 一九三五 一九二〇 一九一八 一九〇二 一八九七 一八九四 一八八七 一八七九 一八六六	(後龜山) (後宇多) (後宇多) (後宇多) (龜山) (後深草) (後嵯峨) (四條) (四條) 太宗金を滅ぼす チンギス汗西夏を滅ぼす 太宗金を滅ぼす バツ、ロシアに侵入す キプチャク汗國建設 イル汗國の建設 クビライの即位 マルコポーロ支那に来る 世祖南宋を滅ぼす 世祖の時日本に寇して大敗す(弘安の役) 元の滅亡	テムチン大汗の位に即く チンギス汗の西征 チンギス汗西夏を滅ぼす 太宗金を滅ぼす バツ、ロシアに侵入す キプチャク汗國建設 イル汗國の建設 クビライの即位 マルコポーロ支那に来る 世祖南宋を滅ぼす 世祖の時日本に寇して大敗す(弘安の役) 元の滅亡

年表

(三)

年代は皇紀に據る

時代	王朝	年代	(天皇)	重なる事蹟
古	明	2028—2304		
		1866—2028	(元) 蒙古	
		一八六六	(土御門)	テムジン大汗の位に即く
		一八七九	(順德)	チンギス汗の西征
		一八八七	(後堀河)	チンギス汗西夏を滅ぼす
		一八九四	(四條)	太宗金を滅ぼす
		一八九七	(四條)	バツ、ロシヤに侵入す
		一九〇二	(後嵯峨)	キプチャク汗國建設
		一九一八	(後深草)	イル汗國の建設
		一九二〇	(龜山)	クビライの即位
		一九三五	(後宇多)	マルコポーロ支那に来る
		一九三九	(後宇多)	世祖南宋を滅ぼす
		一九四一	(後宇多)	世祖の時日本に寇して大敗す(弘安の役)
		二〇二八	(後龜山)	元の滅亡
		二〇二八	(後龜山)	朱元璋帝位に即き明の太祖となる
		二〇二九	(後龜山)	太祖の時チムール、中央アジアを定む
		二〇五〇	(後龜山)	太祖の時チムール、キプチャク汗を破る
		二〇五二	(後龜山)	太祖の時李成桂朝鮮王となる
		二〇五九	(後小松)	惠帝の時燕王兵を擧ぐ
		二〇六二	(後小松)	成祖の即位。アングラの戦(チムール、オスマントルコを破る)
		二一五八	(後土御門)	孝宗の時ヴァスコダガマ印度に達す
		二一七〇	(後柏原)	武宗の時ポルトガル人ゴアを略取す
		二一七〇	(後柏原)	武宗の時ポルトガルの使節始めて明に來り通ず
		二一七七	(後柏原)	世宗の時バベル、モゴル帝國の基を開く
		二一八六	(後奈良)	世宗の時サヴィエル、ゴアに来る
		二二〇二	(後奈良)	世宗の時アケバル大帝即位
		二二一六	(後奈良)	世宗の時ポルトガル人媽港に商館を置くことを許さる
		二二一七	(後奈良)	世宗の時イスパニヤ人フイリッピン諸島を占領す
		二二二五	(正親町)	神宗の時イギリス人始めて印度に来る
		二二三九	(正親町)	神宗の時マテオ・リツチ明に来る
		二二四一	(正親町)	神宗の時滿洲のヌルハチ兵を起す
		二二四三	(正親町)	神宗の時豊臣秀吉朝鮮を伐つ
		二二五二	(後陽成)	神宗の時オランダ人始めて印度に航す
		二二五五	(後陽成)	神宗の時イギリス人東印度會社を建つ
		二二六〇	(後陽成)	神宗の時ヌルハチ帝位に即く
		二二七六	(後水尾)	神宗の時オランダ人バタヴィヤに據る
		二二七九	(後水尾)	熹宗の時清の太宗朝鮮を征伐す
		二二八四	(後水尾)	李自成亂を作す
		二二八七	(後水尾)	清の太宗國號を清と改む
		二二九一	(明正)	李自成北京を陥れ明亡ぶ
		二二九六	(明正)	
		二三〇四	(後光明)	

前三年徳川家光征夷大將軍に任ぜらる

朝鮮征伐

明への侵入
内蒙古平定

朝鮮再征

第四篇 近世

第一章 清の統一

太宗の業

後金の太祖は、二二八六年〔明天皇の熹宗の世、後水尾天皇の寛永三年〕に死んで、その子太宗が立ち、やがて兵を發して、朝鮮を伐つた。朝鮮は、さきに明か



李自成の北京を焚掠

ら援けられたのを恩とし、これに並びいてゐたが、遂に和を太宗に請うた。太宗は、ついで、みづから將となつて、明を攻め、さらにまた内蒙古を平シげ、二二九六年〔明天皇の徳川家光時代〕、國號を清シとあらため、翌年、再び朝鮮を征して、明と絶たしめ、且、清の封冊を受けさせた。

後七年由
井正雪の
隠謀露顯
す

明の滅亡

清北京に遷
都す

鄭成功の孤
忠

世祖の業

太宗の子世祖は、二三〇四年〔後光明天〕に、また兵を出して、明に攻めよせた。明では吳三桂をしてこれをふせがせたが、たまたま流賊李自成が北京をおとし、呉三桂は清軍をむかへて降参し、ともに李自成を伐つて、これを走らせた。かくて、世祖は、難なく支那の北部を定



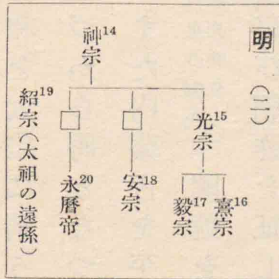
鄭成功

た。ひとり鄭成功のみは、孤忠を守つて屈せず、力をつくして、明の恢

めることを得、都を北京にうつし、ついで、辨髮の令を下して、滿洲の風俗に従はせた。

明の遺臣

明の遺臣たちは、なほその王族を擁し、江南諸處に兵を擧げたが、結局、みな敗れ、清は、遂に支那を一統し



明の遺臣わ
が國に歸化
す

復をはかり、後、臺灣に渡り、オランダ人を島外に逐つて、これを占領し、依然、清軍に抗した。また明の遺臣の中には、清につかへることをいさぎよしとせず、海を渡つて、わが日本に來朝、歸化したものもあつた。朱之瑜〔水舜〕及び僧隱元等は、即ちそれである。

◇鄭成功 鄭成功の父鄭芝龍は、かつてわが平戸に來り寓し、田川氏を娶つて、一子を擧げた。それが明朝復興のため、最後の活躍をした成功である。成功は、歸國の後、母をむかへて、孝養、甚だつとめたが、明軍が清軍と戦つて敗れた時、田川氏は、城樓より河水に身を投じて死し、烈女の名をのこした。清兵は、田川氏の死に感じ、婦女すら、なほこの通りである。倭人の勇氣、知るに足るといつたといふことである。また成功は、明の王族から、その姓朱氏を賜はつたので、國姓爺と呼ばれてゐる。

第二章 聖祖 高宗 清露の交渉

聖祖の業

清の聖祖〔世子〕は、清朝の基をかため成した大英主である。帝は、康熙帝〔年號〕とも稱し、わが徳川時代の全盛期を通じ、六十

三藩の由来



聖祖

餘年の久しい間位にあつて、文勳武功共にいちじるしい。この頃、雲南に吳三桂、福建に耿精忠、廣東に尙之信といふものがあつた。この三人は、いづれも明の降將またはその子孫で、それぞれ廣大な領地をもち、その上、兵權をもにぎり、三藩と稱して、ほとんど半獨立の姿をなしてゐた。聖祖は、三藩の強大なるを憂へ、その處置について、心をなやまし、遂に英斷を以てこれを撤廢しようとした。三藩は、これを知つて、不安を感じ、二二二三年〔靈元天皇の御代〕、吳三桂が、まづ兵を擧げて反し、ついで、他の二藩も、これに應じた。かねて清室に心服しない漢人等は、きそつてこれに與し、あはや、清朝の基礎も動くかと思はれる形勢であつたが、非常な苦戰を重ねて、清軍は、遂にこれを鎮定した。これよりさき、臺灣の鄭成

この頃徳川家綱將軍たり

三藩の亂

臺灣の鄭氏

臺灣服屬 聖祖の外征

功は、既に死んで、その子をへて、その孫が、なほ臺南に據り、父祖の志を守つてゐた。聖祖は、三藩の亂を平げた後、これを攻め降して、臺灣を取り、ついで親征して、外蒙古を併せ、また青海地方をなびかせ、さらにチベットをも従へた。

◆三藩の亂について 「此時に吳三桂は既に七十以上の老人であつたが、其反亂は清朝に非常な打撃を與へたものである。中略清朝では勿論大軍を擧げて防いだ、が、其時には既に明を取る時に大變に骨を折つた皇族や大將などは大部分亡くなつた人が多かったので、逆も敵する程の名將は無かつたと云ふことで、それで清朝の兵の見苦しかつたことは非常なものである。能く吳三桂の兵に遭つては逃げ廻はつて居つたのであるが、然るにどうして其亂が平らいだかと云ふと、吳三桂は餘り年を取つて居つて、軍事にあまり慣れ過ぎて居つた。慣れ過ぎると大事を取り過ぎる。中略其時に康熙帝は僅か年が十九か二十であつたが、若い時から鋭敏で且つ大變な精力家であつて、一日に八方から來る軍事の報告は自分一人で眼を通して大臣を側に置いて斯う云ふ方針にしろ、斯う云ふ方針にしろと云ふ風に、一々皆口授をして朝から晩まで凡そ三四百通の奏疏に可否を決してやつて兵事を指揮して居つた。それで兵は弱くて屢々

前年足利義輝將軍となる

モスコイの獨立
ロシア人の東進

この頃徳川綱吉將軍たり

ネルチンスク條約



高宗

高宗の業

聖祖の孫高宗は、乾

逃けるが、防備配置の手順が良かったので、大敗に至らない中に吳三桂は老死したので、此の大亂を甘く征伐し終つた。(内藤虎次郎氏著清朝衰亡論)

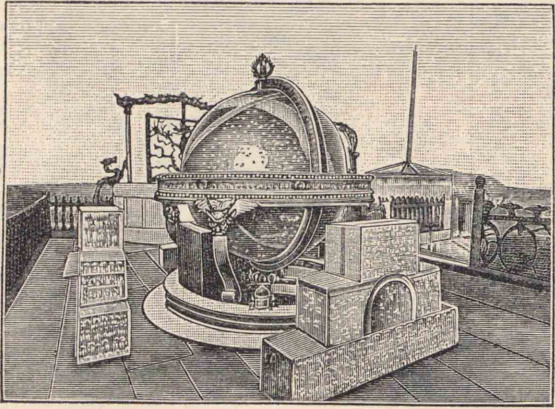
ロシア人の東進 　またロシアでは、明の中世頃に、モスコイ大侯がキプチャク國をうちほろぼし、二二〇七年〔明の世宗の御代〕はじめてロシア皇帝と稱した。これから、ロシア人は、しだいに東進して、シベリヤを略し、明末以來、滿洲北部にあらはれ、清代に至つては、しばしばこれと境界上の争をひき起した。よつて、聖祖は、ロシアに交渉し、二二四九年〔東山天皇の元年〕、ネルチンスク〔尼布楚〕條約を結び、外興安嶺及びアルグン河を以て兩國の境界と定め、ロシア人の南下をくひとめた。

高宗の晩年に徳川家齊將軍となる

高宗の英明
外征

康熙乾隆二代の極盛

大部の書籍發行



儀體天たつ造がトスービルエフ

隆帝〔乾隆は〕とも稱し、その在位の長きこと、ほとんど聖祖に同じく、英明なることも、聖祖についてゐる。帝は、天山南北兩路を定め、バルマを攻め降し、シム、安南等と共に、それぞれ清の封冊を受けさせ、またネパールをも伐つて、これを降した。これで清の領土は、漢唐の盛時にもまさつて廣大となつた。

清の極盛

かくの如く、康熙乾隆二

帝の時代は、國威が大いに外にあがつた上に、内に於ても、もろもろの制度がととのつて、政治がよくゆきとどき、學術の研究も、また大いに進み、康熙字典ををはじめとして、大部の有益な書物が、續續刊行された。康熙帝は、ま

林則徐の處置

清 (二)

高宗⁶—仁宗⁷—宣宗⁸—文宗⁹—穆宗¹⁰

遣はして、斷然たる處置をなさしめ、イギリス人の密藏してゐた鴉片二萬餘函を沒收して、これを焼きすて、且、阿片喫煙者及びその密輸入者を嚴刑に處することとし、遂にイギリス人との貿易を禁止せしめた。

イギリスの態度

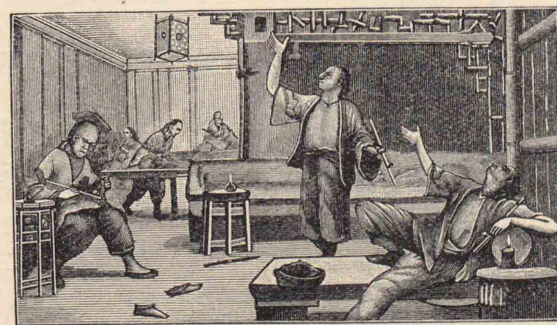
戦役の顛末 イギリスでは、貿易保護のため、いよいよ起つて、清國を伐つこととし、船艦を派して、舟山島を占領

イギリス軍の連勝



林則徐

し、廣東廈門・寧波等を封鎖攻撃させ、別に艦隊をすすめて、渤海灣に入り、白河口に迫らせ、ついで、廣東を占領し、廈門



鴉片喫煙所内部の景光

南京條約

各國の通商條約締結

モゴル帝國滅亡

江戸幕府外國船打拂令を弛む

鎮海〔省内江〕寧波・上海鎮江〔省内江蘇〕を陥れ、南京に攻めよせた。清國政府は、大いにおそれ、和を求め、遂に南京に於て和約を結び、償金〔約四十二萬圓〕を出し、香港を割譲し、上海寧波・廈門・福州〔閩侯縣〕廣東の五港を開くこととした。これが即ち清國の開國で、時は二五〇二年〔宣宗の十二年、仁孝天皇の天保十三年〕に當り、わが安政假條約の調印にさきだつこと十六年である。この後、清國と歐米諸國との間に、相ついで通商條約が結ばれ、國際關係はいよいよ密接してきた。

イギリス領印度

南京條約を結んでから後十五年〔バベルの建國から三百年〕に、イギリスは、モゴル帝國皇帝を廢し、



林則徐が鴉片を沒收する所

イギリス王
印度皇帝と
なる

ついで東印度會社の政權を收めた。そして、二五三七年（清の徳宗の世、明治十年）になると、女王ヴィクトリヤが、印度皇帝の位を兼ねることとなり、その九年の後に、全くバルマを併せて、印度の一州とした。

第四章 長髮賊 英佛軍の侵入

長髮賊

清は、鴉片の役にもろくも敗れて、大いに威信を内外に



洪秀全

洪秀全廣西
に起る

墜オトしたので、洪秀全コウシュウゼンが、これに乗じて、兵を廣西に擧げた。洪秀全は、滅



洪秀全がひた玉璽

後二年ベ
リ浦賀
に来る

賊名の由来



曾國藩

滿興漢マンコウカンをとなへて、漢人の心を取り、またキリスト教を利用して、外人の意を迎へ、二五一年（明天宗の咸豐元年、孝）國號をたて、太平天國と稱し、みづから天王と號した。世にこれを長髮賊チャウハツゼンといつてゐる。

洪秀全南京
に據る

曾國藩李鴻
章義勇兵を
起す

る。これは、その一味イチミのものが、清の風俗にそむいて、辮髪をやめ、すべて髪を長くのばして、結びあげることとしたからである。
賊勢 洪秀全は、破竹の勢を以て、江南を席卷セキケンし、南京を取つて、これに據り、進んで江北をも侵した。やがて、曾國藩ソウコクハン、李鴻章リコウチャウ等の



曾國藩の祠の一部

も曾國藩の邸で、湖南省長沙にある。この建物は、今は女學校となつて、曾國藩の孫女がこれを經營してゐる。



李 鴻 章

名士が、相共に義勇兵をおこし、賊軍を伐つて、これを破つたが、たまに清國とイギリス・フランス二國との間に紛議が起つて、清國政府は、大いに苦しんだ。

◇會國藩の人物 會國藩は、湖南省の人

で、二四六九年仁宗の嘉慶十四年に生まる。文武の才を兼ね備へた近世の大人物で、奉公の精神に富み、常に意を修養に用ひて怠らず、勤儉みづから持し、勞苦に習ひ、早起をたふとび、克己を工夫してゐた。

紛議の原因

英佛軍の侵入

この紛議の原因は、廣東の清國官吏が、イギリスの國旗を立てた商船内にはいつて、有罪のうたがひある清國人をとらへたことと、廣西に於て、清國人がフランスの宣教師を殺害したこととにある。この二件に關する清國政府の處置が、宜しきを得な

英佛軍の連勝

ロシア公使の調停

北京條約

賊勢再振

洋槍隊成る



フエチナグイ

かつたので、イギリス・フランスの聯合軍は、廣東を攻めおとし、進んで白河にはいつた。清國政府は、内亂のために、力を外事に専らにすることが出来ず、あわてて和を講じたが、たちまちまた破れ、聯合軍は、遂に北京に侵入して、これをおとし、入れた。たまたまロシアの公使イグナチエフが起つて、その間には、いりたくみに兩者の和議を周旋した。それで、清國は、イギリス・フランスと北京條約をむすび、償金を出し、キリスト教をひろ

めることを承認し、且、牛莊漢口（湖北省）以下七港を開く等のことを約した。時に二五二〇年（文宗の咸豐十年、孝）である。

長髮賊の平定

この外患に乗じて、長髮賊は、一層、勢をたかめた。上海在留の外國人等は、北京條約の成つた後、洋槍隊を組織して、これ

この年櫻田の變あり

ゴルドンの功

に當ることとし、ついで、イギリス人ゴルドンを推して、その將とした。ゴルドンは、よく兵を用ひ、李鴻章等と力をあはせて、しばしば奇勝を



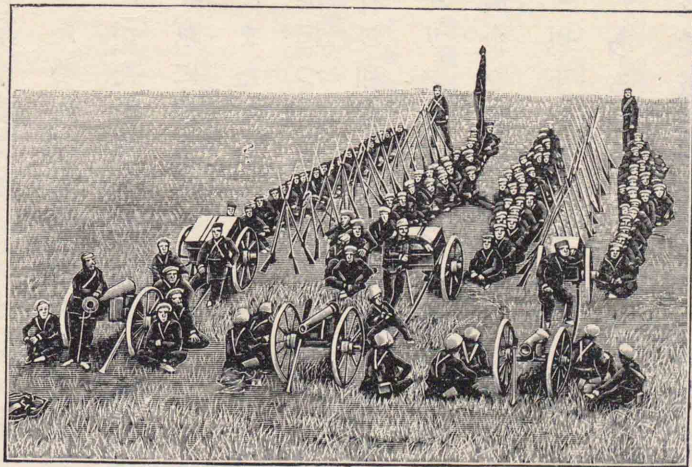
ゴルドン

制した。この頃に至つて、官軍も、またしだい

に勢を得、遂に大舉して、南京をかこみ、¹⁸⁶⁴二五二四年〔穆宗の世、孝明天皇元治元年〕、これをおとし、れて、洪秀全をたふし、十五年にわたつた大亂も、ここに全く定まつ

南京陥落と兵亂鎮定

長州征伐はじまる



洋槍隊

た。

◇ゴルドンの人物　ゴルドンは、イギリスの工兵士官である。二五二三年以來洋槍隊の將となり、十六箇月の間に、三十三戰を重ね、赫赫たる武功をたてた。清國政府は、その功勞にむくいるために、多額の金を贈つたが、ゴルドンは、かたく辭して、一錢をも受けなかつた。その故郷への通信の一節に、余は支那に來た時と同じく、貧困で支那を去つたと書き送つたといふことである。まことに世にめづらしい高潔の人といふべきである。

第五章　ロシアの滿洲及び中央アジア經略

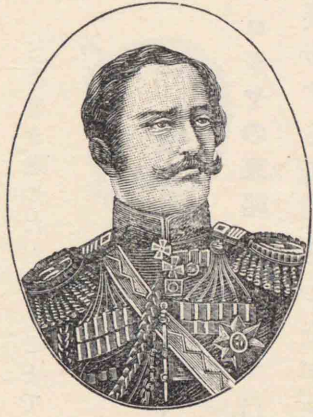
ロシアの東略

ロシアは、ネルチンスク條約によつて、一時、清國に讓步する所があつたが、その後、久しからずして、カムチャッカをとり、ついでアラスカを略し、樺太カラフトをおかし、千島及び蝦夷にもあだして、わが江戸幕府を驚かした。また東部シベリヤ總督ムラヴィヨフは、清國が、長髮賊の内亂と、イギリス・フランスの外患とにくるしんでゐ

カムチャッカその他の略取

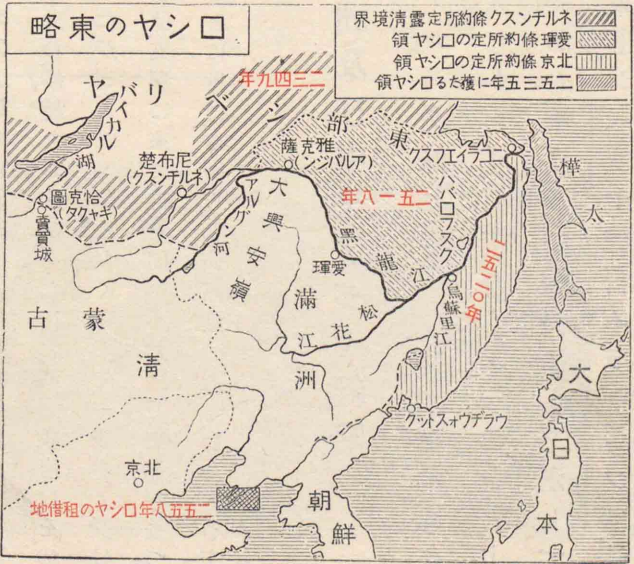
愛瑠條約

るのに乗じ、境界改正の事をこれに迫り、三五一八年〔清の文宗の安政の五年、孝明、明〕愛瑠條約を結び、黒龍江を以てその境界とした。ついで、ロシアは、



フヨウハラム

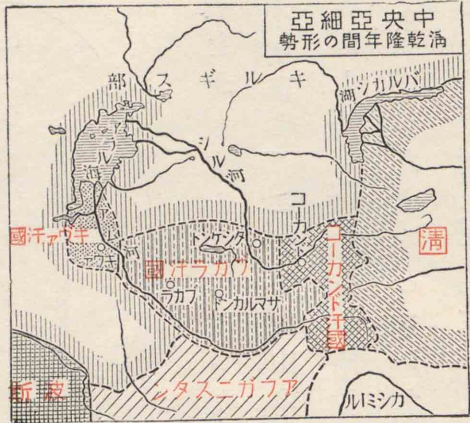
イグナチエフの講和周旋の功を利用し、清國をして烏蘇里江東の地を割かせ、やがて、その南端にウラヂウオストックをたて、これを極東に於けるロシアの根據地



千島樺太交換

中央アジアの三汗國

三汗國の末路



とし、後さらに千島を日本にゆづつて、樺太全島をその有とし、ほとんど全く北部アジアの地をその手ににぎつた。

ロシアの中央アジア侵略

またロシア

は、中央アジアを占領して、印度洋方面に進出しようとはかつた。中央アジアは、チムールの死後、興敗つねなく、明の中世以來、キヴァブカラ・コーカンドの三汗國に分れて、相争つてゐた。ロシアは、はやく大遠征隊を派遣して、キルギス及びキヴァ地方の探検をこころみさせ、遂に全くキルギス種族を従へて、キヴァに接近し、二五二八年〔清の穆宗の元年〕ついでブカラ・キヴァを保護國とし、またコーカンドを従へた。これで

回教徒の亂

ロシアのイ
リ占領
清國天山南
路を平ぐ



族スギルキ

議をかもすやうになつた。

イリ事件

この頃、天山南路の回教徒が亂を起し、イリ〔伊犁〕地方の回教徒も、これに應じて動搖ドクモウした。すると、ロシアは、國境を安んずるためと稱し、二五三一年〔清の穆宗の世、明治四年〕、兵を出して、イリを占領した。清國では、まづ天山南路を平げ、然る後、ロシアに向つて、イリの返還

ロシアの領域は、南、アフガニスタンに接し、東、山嶺をへだてて、支那と對し、しぜん、イギリス及び清國と紛



隊征遠のヤシロるけ於にヤジア央中



兒二のそと人美のラカブ

ブカラ婦人の風俗を見るべし

事件の落著

下
ロシヤの南

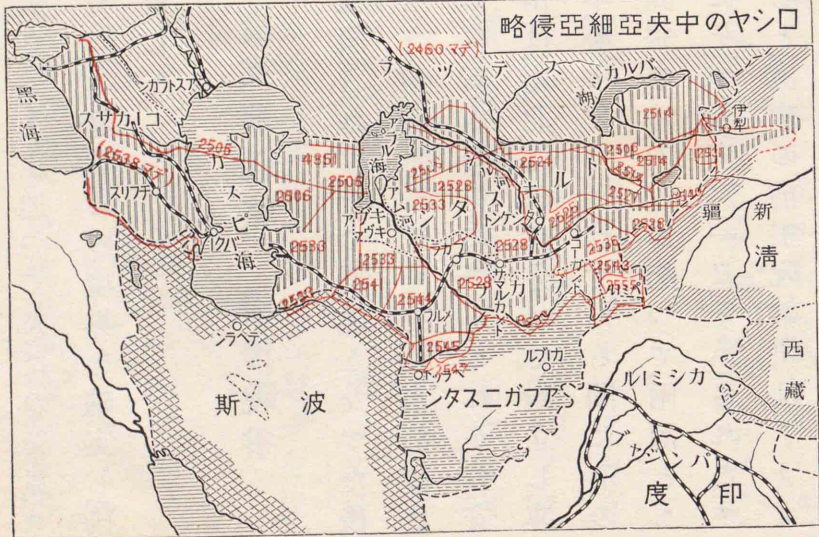
イギリスの
對策

を求めた。ロシヤは、言を左右に託タテマして、これに應ぜず、兩國間の平和は、今にも破れようとしたが、結局、雙方、たがひに譲りあひ、二五四年1851〔清の徳宗の世、〕清國は、償金を出し、ロシヤは、コルゴス河（イリ河の枝河）以東の地を清國に還付して、その局を結んだ。

イギリス・ロシヤの紛議 ロシヤは、

この後、まもなくメルフをとり、進んでアフガニスタンにはいつた。イギリスは、さきにアフガニスタンを保護國として、ロシヤに當る

略侵亞細亞中のヤシロ



二一八八
三五五
バミール
題並にその
境界確定

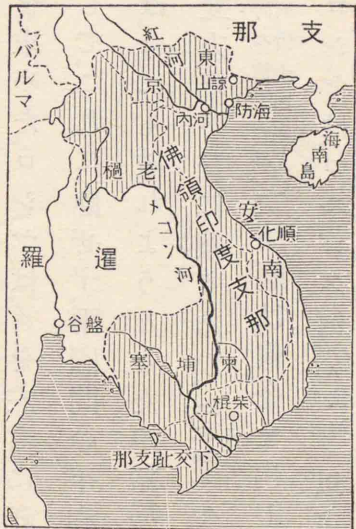
大越と廣南

阮福映の一
統

こととしたが、今や、その南進の勢がますます迫つて來たのを見、ロシヤと協議して、ロシヤ領とアフガニスタンとの境界を確定し、後またバミール地方の境界をも議定した。

第六章 フランスの印度支那經略 清佛戰爭

越南の建國 安南は、明の成祖に征服されて、その屬地となつた後、ほどなく獨立して、國を大越と號したが、明末に至り、その南部に、さらに廣南國が起つた。これから、安南は、南北兩部に分れて對立し、連年、紛争をつづけてゐる間に、清の高宗の時、内亂が起つて、兩國ともに、その王室が、一旦たふされた。すると、廣南の前王阮福映は、フラン



蝦夷奉行
を函館奉
行と改む

越南

フランスと
越南との紛
争

フランス、
カンボヂヤ
を保護國と
なす

フランス越
南を保護國
となす

清國の抗議
海陸の勝敗

ス人の援をかりて、恢復をはかり、遂に一統の業をなし、都をユエ〔化順〕にさだめ、國號をたてて、越南と稱した。時に二四六二年〔清の仁宗の世、光〕で、越南は、やがて清の封冊をうけた。

フランスの印度支那經略

越南は、一統後、かへつてフランス人を喜ばず、遂にその宣教師を虐待したので、二五〇八年〔清の文宗の世、孝明〕、フランスは、兵を出して、サイゴン〔梹〕を占領し、後四年、越南をしてその南部を割かせ、且、償金を徴して、和を結んだ。ついで、フランスは、カンボヂヤ〔柬埔寨〕を保護國とし、二五〇三年〔清の徳宗の世、光緒〕、また越南と戦つて、その國都をおとし、いれ、ことごとく東京地方を讓與させ、且、越南を保護國とした。

清佛戰爭

しかるに、清國は、越南王がかつてその封冊を受けたのを口實とし、この講和に異議をとなへて、二五〇四年〔明治十〕、フランスと開戦した。この役、フランスの海軍は、清國艦隊を破り、澎湖島を占

和約

領し、臺灣の諸港を封鎖した。ただし、越南北境の陸戦に於ては、清軍の勢が盛んであつて、フランス軍は、かへつて苦戦したが、翌一八八五年、兩國間に和約が成りたち、清國は、越南に對する權利を放棄し、且、東京のフランス領なることを承認し、遂に今のフランス領印度支那の成立を見るに至つた。

フランス、メコン河東の地を取る

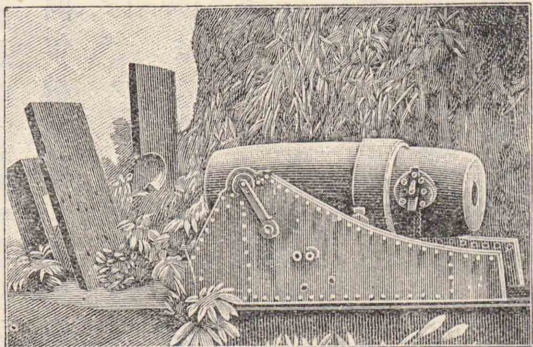
フランスとシムとの交渉

フランスは、また

シムをおびやかして、メコン河東の地を取つた。この頃、既にメコン河上流地方を領してゐたイギリスは、これに對して異議をと

イギリスとの協商

なへ、兩國領地の境界に幅五十英里の中立地帯を設けることとした。これから、シムは、イギリス・フランス二勢力の間にはさまり、わづ



清軍敗殘の遺址

光緒十年六月十五日、明治十七年八月四日、佛國軍艦九隻、基隆港を攻撃し、砲臺數處を陥れ、沙灣から上陸した。八月十七日、佛艦十三隻、また來り犯し、大いに清軍を破つて、遂に基隆を占領した。本圖は、沙灣に於ける海岸砲臺が破壊された敗殘の光景を示す。

かにその國家の存立を保つことを得るといふおぼつかないありさまとなつた。

第七章 清國と歐米列強との關係 清の滅亡

支那共和國の建設

清國の衰勢

列強の壓迫

清國は、内外の多事に苦しんで、國運が、だんだんかたむいたが、明治二十七八年の日清の役に、遺憾なくその弱點を暴露した。列強は、これに乗じて、にはかにその壓迫をたくましくし、わづか數年の間に、ドイツは膠州灣を、ロシアは大連灣地方と旅順口とを、イギリスは威海衛を、フランスは廣州灣を租借した。その頃、アメリカ合衆國も、ハワイを併合し、またイスパニヤと戦つて、フィリピン諸島を併せ、しだいに力を東洋及び南洋方面にのばさうとして來たから、清國は、あたかも爪牙をみがける猛獸につつまれたと同様

米國の勢力伸張

列強の租借

國政革新の企圖
西太后の政策
義和團蜂起
聯合軍の救援
講和
ロシアの經營

の姿となつた。

北清事變 時の清國皇帝德宗は、熱心、國勢をもりかへすことをつとめ、康有爲を用ひて、政治の革新をはかつた。しかるに、西太后が政をきくこととなり、改革黨をしりぞけて、専ら保守、排外を事としたので、西教撲滅、外人排斥を目的としてゐる義和團といふ暴徒が、この機に乗じて、山東省に起り、^{1900年}〔明治三十三〕北京に亂入して、列國公使館を圍んだ。そこで、日英米佛露獨埃伊諸國は、相聯合して兵を出し、遂に北京を攻めおとし入れて、各國公使以下をすくつた。この騒亂の間に、德宗と西太后とは、難を西安府〔陝西省〕にさけ、李鴻章等をして列國と和を講ぜしめ、償金を出し、且、罪を謝して、その局を結んだ。

日露の役と韓國併合 この事變に際して、兵を滿洲に入れたロシアは、事定まつて後も、容易にこれを引きあげず、かへつて、ますますそ



西太后

西太后は、文宗の妃で、穆宗の生母である。文宗の死後、およそ五十年の間、國政に關與し、内外多事の際に處して、よく人材をすべ、政治家的才略を發揮したので有名である。圖の上部に横書してある文字は、その尊號である。

日英同盟

韓國併合

日露の役

の經營の歩を進め、さらに手を韓國にまで伸ばした。たまたま¹⁹⁰²二五六年〔明治三十五年〕に、清韓二國の領土保全及び東洋平和を目的とした日英同盟が成り立つたので、ロシアもいささかこれに憚^{ハバカ}る所があつて、滿洲から撤^{テッ}兵^イすべきことを清國に約束した。しかるに、ロシアは、誠實にその約束を履行^{リカフ}せず、日本と明治三十七八年の役をひき起し、かへつて大敗した。その結果、旅順口及び大連灣地方に對するロシアの租借權は、日本に讓與され、韓國は、また日本の保護國とな



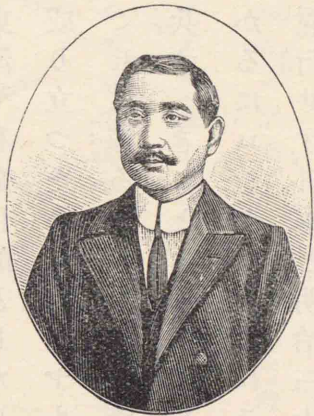
牌門念記林德克

義和團の亂に、ドイツ公使男爵フォン・ケットレルが殺された。清國は、償金の外に、ドイツ公使が命をおとした地點に、その事蹟を記した露罪の克復林記念門牌と稱するものを建設することになり、これを實行した。

清國の自覺

り、後五年、遂に併合された。

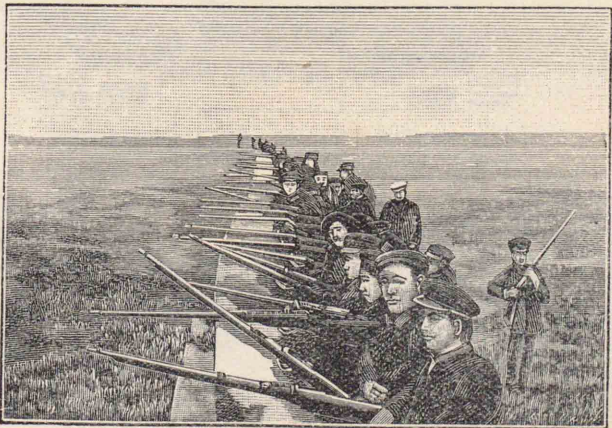
清室の滅亡 義和團の亂後、清國は、ますますめざまめて、日本その他の國國に多數の留學生を派遣し、これが文物制度を學ばせた。二五六年〔明治四十四年〕¹⁹⁰⁸



Sun Yat Sen

文 孫

西 太 后 及 び 德 宗 相 がつ いて



軍 命 革

宣統帝立つ

死に、幼年の宣統帝が立つたが、當路の人人は、銳意、國政の改良につとめ、日本にならつて、立憲政治を行はうとした。しかるに、滿洲政府に對して、

革命軍勃發

宣統帝退位

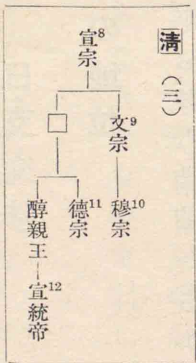
不平をいだいてゐる革命派が、二五七年〔明治四十一年〕十月、急に兵を武昌に擧げると、その影響は、すみやかに四方に波及して、たちまち全國的の動亂となつた。清廷は、急遽、袁世凱を總理大臣に任じて、時局を始末させようとしたが、事、既におそく、翌年二月、宣統帝は、遂に帝位を退くこととなり、滿人の壯烈な決戦も、執拗な反抗もなく、清朝は、もろくも亡びてしまつた。清は、



凱 世 袁

太祖の即位から、ここに至るまで、十二代二百九十七年である。

支那共和國 この前年、革命派は、南京に據つて、中華民國新政府を組織した。をりしも、イギリスより歸り來り、衆に推されて、



2572

孫文臨時大總統となる
袁世凱假大總統となる

支那共和國
成立

臨時大總統となつた孫文〔號^{逸仙}と〕は、今や、清帝が退位したので、その地位を辭した。それで、袁世凱が、これに代り、假大總統の任に就いて、北京に新政府を立てたが、そのなす所、必ずしも革命派の満足する所とならず、第二の革命が、また勃發した。しかるに、袁世凱は、たちまちこの動亂を鎮定し、二五七年〔大正元年〕國會に推されて、正式の大總統となり、ここにはじめて支那共和國が成立し、やがて列國の承認を得た。

第八章 共和國建設後の支那 日支交渉

東洋の現勢と我が國の地位

帝政運動

袁世凱は、既に大總統に當選したが、野心^{ヤシ}滿滿たるかれは、これを以て満足せず、さらに帝政を再興し、みづから帝位に即くべきことを宣言した。舊革命黨員等は、これを憤^{イキドホ}り、討袁の旗を雲南

袁世凱の帝
政宣言と討
袁軍

帝政宣言取
消と袁世凱
の死
黎元洪の大
總統

にかかげ、諸省の應援を得て、その勢が、日に盛んになつた。袁世凱は、形勢の不利なを見、その帝政宣言を取消^{トリケ}したが、人心が容易に定まらないので、二五六年〔大正五年〕六月、憂悶^{イウモン}して病死した。それで副總統黎元洪が、これに代つて大總統となり、帝政をとなへたものを罰^{バツ}し、一時、平和となつた。

日獨開戦と日支交渉

これよりさき、二五四年〔大正三年〕の七月に、ヨーロッパに大戦亂が起つた。日本は、東洋平和維持のために、ドイツに對して、戦を宣し、十一月、青島を攻めおとし、膠州灣を占領した。また日本は、支那に於けるその地歩をかたくする目的を以て、翌年五月、日支條約を結び、支那をして遼東半島租借期限の延長〔^{ロシヤが設}定した年か

日獨開戦

日支條約

ら通算して、九十九箇年に延長すること。即ち〕と、南滿洲ならびに東部蒙古に於ける日本の優越權、及び山東省に於けるドイツの權利を、日本に於て繼承^{ケイシヨウ}し、將來、條件を附して、膠州灣地方等を支那に還付すべき

こと等を承認させた。これが即ち世に二十一箇條の條約と稱するものである。

復辟運動と支那參戰

參戰問題

支那は、ヨーロッパの大戦亂に對し、はじめの頃は、中立を守つてゐたが、黎元洪の大總統就任後、まもなく、參戰問題について、國會と國務院〔内閣〕との間に、争をひき起した。黎元洪は參戰論者の國務總理段祺瑞〔段〕を免職して、その争を解かうとし、かへつて、段祺瑞に與してゐる將軍等の反抗を招いたので、安徽督軍張勳〔張〕を召した。張勳は、兵をひきゐて、北京に入り、黎元洪をしてまづ國會を解散させ、ついで、突然、復辟〔宣統帝の復位〕をとなへて、一時、共和政府をたふしたが、段祺瑞等に討たれて、たちまち失敗した。時に二五七七年〔大正〕七月である。この事變の結果、黎元洪は、責を引いて辭職し、副總統馮國璋〔馮〕が、大總統の職を代行し、再び段祺瑞を國務總理に任じ、八月、遂にドイツ、オーストリアに對して宣戰した。

對獨塊宣戰

張勳の復辟運動

廣東政府

支那の内紛

さきに黎元洪が國會を解散した時、難を南方に避けた多數の議員等は、今や、馮國璋、段祺瑞の就職したのを見て、その違法なることを主張し、別に軍政府を廣東にたて、孫文を大元帥に推して、北京政府に對抗し、しきりに舊國會の再興をとなへてやまなかつた。これに對して、馮國璋は、新國會を召集し、二五七八年〔大正〕その任期の満つると共に退職し、新國會によつて新たに選舉された徐世昌〔徐〕が、この年十月、大總統就任の式を舉げた。ついで南北兩政府の代表者は、上海に會して、和平會議を開いたが、雙方の意見が一致しないために、遂に決裂に終り、依然として、南北對抗の勢をつづけた。やがて、北方派中、段祺瑞等のひきゐてゐた安徽派と、曹錕等のひきゐてゐた直隸派と相きしり、二五八〇年〔大正〕遂に戰端を開き、直隸派は、奉天派の頭領張作霖〔張〕の援を得て、たちまち安徽派を屈伏させた。南方に於ても、その翌年、孫文が民國政府を廣東に設けて、みづから

馮國璋の退任と徐世昌の就任

南北和平會議の決裂

安徽派と直隸派との軋

廣東に於ける民國政府

大總統と稱した。

ワシントン會議及び膠州灣地方還付

この年、米國大統領ハーディングの申出により、五大國〔日、英、米、佛、伊〕及び四國〔支那、ベルギー、オランダ、ポルトガル〕の全權委員は、ワシントンに集つて、會議を開き、翌年二月に至つて、五大國の海軍力制限の外に、支那の主權及び領土を尊重し、且、その關稅率の改訂を承諾することをも約し、支那の平和と利益とのためには、かかる所があつた。またこの會議に於て、日本支那兩國は、膠州灣地方の還付等に關する約束を結び、日本は、やがて、これを實行し、山東省在留の軍隊を引きあげた。

支那の内争

しかるに、支那人は、相かはらず、政權争奪を事とし、ワシントン會議の後、ほどなく、直隸派の領袖吳佩孚が、張作霖と戰を開いた。この戰亂は、奉天派の敗北によつて、たちまち定まつたが、これを制止することの出來なかつた徐世昌は、遂にその職を辭し、黎

ワシントン會議

膠州灣地方還付

奉直戰

黎元洪の復職

曹錕の大總統就任

再度の奉直戰と段祺瑞の臨時執政

漢族と異族との關係

元洪の復職をへて、¹⁹²³二五八三年〔大正十〕、直隸派の頭領曹錕が大總統に選ばれた。しかるに、翌年、また國內に動亂が起り、ひいて、奉天派と直隸派との交戰となり、奉天派が勝利を得た結果、段祺瑞が、臨時執政に就任した。段祺瑞は、就任後、たえまなき軍閥の勢力争の間にあつて、苦心百端する所があり、また外交上に於ては、關稅改訂の事にも努力したのであつたが、在職、わづかに一年半ばかりで、¹⁹²⁶二五八六年〔大正十〕四月、野に下つた。以後、支那にはまた正式の政府がなく、北方軍閥と南方國民黨との間に種種のうづまきを起してゐる。

支那の現勢

支那の現勢は、右の如くであるのに、外蒙古は、さきに既に獨立を宣言し、チベットも、また獨立をとなへてゐるから、支那の領土は、まさに解體せんとしてゐる。その上に、支那の財政困難は、今や、その極度に達して、またいかんともすべからざる有様である。

支那の地位

從來、漢族を壓迫した周圍の異族は、武力に於て、まさ

漢族と歐米諸民族

つた所があつたが、文化に於ては、つねに漢族よりもおとつてゐた。それ故、異族は、武力を以て漢族を征服しながらも、かへつて、かれらの文化に征服されたのであつた。しかるに、今日、漢族の周圍に迫つてくるものは、武力に於ても、文化に於ても、はるかにすぐれた歐米の諸民族である。これ支那が、文化の相類してゐる武強の民族と、相頼り相助けるを必要とする所以である。支那の國民たるものは、ふかく思をここに致すべきであらう。

東洋の現勢とわが國の地位

アジャとヨーロッパの面積の比較

アジャに於ける獨立國

アジャ洲の全面積は、約二百八十八萬方里で、ヨーロッパ洲の全面積六十四萬方里にくらべると、その四倍以上に達してゐる。しかるに、現今、獨立國としてアジャに立つてゐるものは、わが日本帝國の外に、わづかに支那、シム、アフガニスタン、ペルシヤ等の數國と、ヒマラヤ山下のネパール、ブータン等の二三地域とがあるのみである。しかも、支那は、近年、その國勢が甚だ振はず、

日本國民の使命の重大

遂に革命を敢行して、アジャ唯一の共和國となつたが、果してよく國運をもちかへすことが出来るかどうか。けだし、これは大なる疑問とすべきであらう。また支那以外の諸國に至つては、からうじてその獨立をたもつといふに過ぎない有様であるから、眞に獨立國の體面を全うして、世界の列強と東洋に角逐する實力と意氣とをもつてゐるものは、ただわが日本だけであるといつてよろしいのである。アジャ諸民族往時の活動を見來つて、現時のこのあはれむべき状態に及べば、實に感慨に堪へないと同時に、わが國民の使命のいかにも重大であるのを思はざるを得ないのである。日本國民たるものは、相一致して、大いに奮發努力しなければなるまい。

概 括

近世期は、明が亡びたニ三〇〇年頃から、現今に至るまでの間で、わが第一百十代後光明天皇の御代から、現今までの間に相當する。この期に於ては、西力が盛んに東進し來り、ロシアは、シベリヤ及び中央アジアを略し、イギリスは、印度、バルマを併せ、フランスは、印度支那半島を取り、ドイツ、オランダ、ポルトガル、アメリカ合衆國等の國國も、また或は前期に略取した地を守り、或は新たにその屬領地を占めた。この西人の東進にともなつて、キリスト教をはじめ、天文、數學、地理等の西洋の學藝が、また支那に傳來したが、最近に至るまでは、なほさほどいちじるしい影響を漢文化の上に及ぼしてはゐない。

清國は、この期のはじめに、一時、隆盛を極めたのであつたが、列強の壓迫と、内政の腐敗とによつて、國勢が、日に月にかたむいた。日清の役後は、その衰弱が一層甚しくなつて、革命の旗が、一たび武昌にかかけられると、二百餘年つづいて來た女眞族の清朝は、もろくもくつがへり、漢族を中心とした共和政體の中華民國が建設された。この中華民國は、アジア唯一の共和國で、創立以來、既に十七年になるが、支那は、なほ國內の紛争になやんでゐる。

今や、アジア大陸の過半は、既にヨーロッパ人の手に歸して、獨立強國の名と實と共に全きものは、ただわが日本があるのみである。日支兩國國民は、古今の成敗東西の興亡にかんがみ、相頼り相助けて、共存共榮の實を擧げ、ひいては東洋文化の宣揚につとめねばならぬ。

女子用

新編東洋史 終

支那共時圖

一〇〇〇

清

2572

二五〇二	(仁孝)	親月の名の糸身百夏作糸屋	(宣宗)
二五〇七	(孝明)	ムラヴィヨフ東部シベリヤ總督となる	(宣宗)
二五一〇	(孝明)	長髮賊起る	(宣宗)
二五二七	(孝明)	英佛聯合して清と開戦す。モゴル帝國亡ぶ	(宣宗)
二五二八	(孝明)	愛軍條約成る	(宣宗)
二五二九	(孝明)	フランス、サイゴンを占領す	(宣宗)

年表

(四)

年代は皇紀に據る

時 代 國 號	年代	(天皇) 重なる事蹟	(清帝)
清 2276—2572	二三〇四	(後光明) 都を北京に遷す	(世祖)
	二三一八	(後西) モゴル帝アウランゼブ即位	(世祖)
	二三三一	(後西) 鄭成功臺灣に據る	(聖祖)
	二三三三	(靈元) フランス人ボンヂェリイを占領す	(聖祖)
	二三三三	(靈元) 三藩の亂起る	(聖祖)
	二三三三	(靈元) 臺灣清領となる	(聖祖)
	二三四三	(靈元) ネルチンスク條約成る	(聖祖)
	二三四九	(東山) ズンガルを親征す	(聖祖)
	二三五六	(東山) チベット清に降る	(聖祖)
	二三八〇	(中御門) 金川を平ぐ	(高宗)
	二四〇七	(櫻町) プラッシーの戰	(高宗)
	二四一七	(桃園) 回部平定	(高宗)
	二四二〇	(桃園) 阮福映の越南建國	(高宗)
	二四六二	(光格) 林則徐の鴉片燒棄	(仁宗)
	二四九九	(仁孝) 鴉片の役起る	(宣宗)
	二五〇〇	(仁孝) 鴉片の役の結果南京條約成る	(宣宗)
	二五〇二	(仁孝) ムラヴイヨフ東部シベリヤ總督となる	(宣宗)
	二五〇七	(孝明) 長髮賊起る	(宣宗)
	二五一〇	(孝明) 英佛聯合して清と開戦す。モゴル帝國亡ぶ	(宣宗)
	二五一七	(孝明) 愛理條約成る	(文宗)
	二五二一	(孝明) フランス、サイゴンを占領す	(文宗)
	二五二九	(孝明) 英佛聯合軍北京を陥る。ロシヤ烏蘇里江東の地を得	(文宗)
	二五三〇	(孝明) カンボヂヤ、フランスの保護國となる	(文宗)
	二五三三	(孝明) 長髮賊の亂平ぐ	(穆宗)
	二五三四	(孝明) プカラ、ロシヤの保護國となる	(穆宗)
	二五二八	(明治) ロシヤ人イリを占領す	(穆宗)
	二五三一	(明治) キヅア、ロシヤの保護國となる	(穆宗)
二五三三	(明治) 千島樺太交換	(德宗)	
二五三五	(明治) コーカンド汗國、ロシヤに滅ぼさる	(德宗)	
二五三六	(明治) イリ條約成る	(德宗)	
二五四一	(明治) 越南、フランスの保護國となる	(德宗)	
二五四三	(明治) 清佛開戦	(德宗)	
二五四四	(明治) フランス、メコン河東の地を略す	(德宗)	
二五五三	(明治) 日清開戦	(德宗)	
二五五四	(明治) パミール問題解決	(德宗)	

年表

(四)

年代は皇紀に據る

時

代

國

號

年代

(天皇)

重なる事蹟

(清帝)

近

清

2276—2572

世

支那共和國

2573—

二五七二	(明治)	中華民國起る	(宣統帝)
二五七三	(大正)	袁世凱大總統となり支那共和國成立す	(宣統帝)
二五七四	(大正)	歐洲戰亂起る。日獨開戦	(宣統帝)
二五七五	(大正)	日支條約成る	(宣統帝)
二五七六	(大正)	袁世凱死し黎元洪大總統となる	(宣統帝)
二五七七	(大正)	支那獨逸二國に宣戦す。張勳の復辟運動失敗	(宣統帝)
二五七八	(大正)	段祺瑞臨時執政に就任す	(宣統帝)
二五八六	(大正)	段祺瑞下野	(宣統帝)

二二〇四	(後光明)	都を北京に遷す	(世祖)
二二一八	(後西)	モゴル帝アウランゼブ即位	(世祖)
二二三一	(後西)	鄭成功臺灣に據る	(聖祖)
二二三三	(靈元)	フランス人ボンヂェリイを占領す	(聖祖)
二二三三	(靈元)	三藩の亂起る	(聖祖)
二二三三	(靈元)	臺灣清領となる	(聖祖)
二三四三	(靈元)	ネルチンスク條約成る	(聖祖)
二三四九	(東山)	ズンガルを親征す	(聖祖)
二三五六	(東山)	チベット清に降る	(聖祖)
二三八〇	(中御門)	金川を平ぐ	(高宗)
二四〇七	(櫻町)	ブラッシーの戦	(高宗)
二四一七	(桃園)	回部平定	(高宗)
二四二〇	(桃園)	阮福映の越南建國	(高宗)
二四六二	(光格)	林則徐の鴉片燒棄	(仁宗)
二四九九	(仁孝)	鴉片の役起る	(宣宗)
二五〇〇	(仁孝)	鴉片の役の結果南京條約成る	(宣宗)
二五〇二	(仁孝)	ムラヴイヨフ東部シベリヤ總督となる	(宣宗)
二五〇七	(孝明)	長髮賊起る	(宣宗)
二五一〇	(孝明)	英佛聯合して清と開戦す。モゴル帝國亡ぶ	(文宗)
二五一七	(孝明)	愛理條約成る	(文宗)
二五二八	(孝明)	フランス、サイゴンを占領す	(文宗)
二五二九	(孝明)	英佛聯合軍北京を陥る。ロシヤ烏蘇里江東の地を得	(文宗)
二五三〇	(孝明)	カンボヂヤ、フランスの保護國となる	(文宗)
二五三三	(孝明)	長髮賊の亂平ぐ	(穆宗)
二五三四	(孝明)	ブカラ、ロシヤの保護國となる	(穆宗)
二五三三	(明治)	ロシヤ人イリを占領す	(穆宗)
二五三一	(明治)	キウア、ロシヤの保護國となる	(穆宗)
二五三三	(明治)	千島樺太交換	(德宗)
二五三五	(明治)	コーカンド汗國、ロシヤに滅ぼさる	(德宗)
二五三六	(明治)	イリ條約成る	(德宗)
二五四一	(明治)	越南、フランスの保護國となる	(德宗)
二五四三	(明治)	清佛開戦	(德宗)
二五四四	(明治)	フランス、メコン河東の地を略す	(德宗)
二五四五	(明治)	日清開戦	(德宗)
二五五五	(明治)	パミール問題解決	(德宗)
二五五七	(明治)	獨逸膠州灣を占領す	(德宗)
二五五八	(明治)	獨逸英三國、清の港灣を租借す	(德宗)
二五五九	(明治)	フランス、廣州灣を租借す。義和團の亂起る	(德宗)
二五六二	(明治)	日英同盟成る	(德宗)
二五六四	(明治)	日露開戦	(德宗)
二五六八	(明治)	徳宗及び西太后死す	(德宗)
二五七〇	(明治)	日韓の併合	(宣統帝)
二五七一	(明治)	革命軍起る	(宣統帝)
二五七二	(明治)	清の滅亡	(宣統帝)

昭和三年八月七日印刷
 昭和四年一月十二日訂正再版印刷
 昭和四年一月十五日訂正再版發行



著者

東京府北豊島郡西巢鴨町池袋一三四五番地
 峯岸米造

發行者

東京市神田區通神保町六番地
 上原才一郎

印刷者

東京市神田區通神保町六番地
 山崎與吉

發行所

東京市神田區通神保町六番地
 光風館書店
 (電話 神田三〇八七番)
 (振替口座東京三二七番)

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に
 賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はば直に御送附可致候

昭
和
四
年
一
月
十
五
日
訂
正
再
版
發
行

用女子新編東洋史

石印本 蘇州人 甚本



KOFUKAN
館風菴

卯三子年
徳永

広島大学図書
2000081259



庫
29
59